

鉄也のヒーローアカデミア 磁場鉄也:オリジン

そうちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『個性』 始まりは中国で〈光る〉子供が生まれたことから始まった。それから世界各国では原因も分からないまま次々と『個性』を持った子供たちが生まれた。初めは『超常』でしかなかった事が『日常』になり、今は全総人口の約八割が何らかの『個性』を持つ世界になった。それにつられその『個性』を悪用する犯罪が爆発的に増えた。だが逆にその『個性』を使いあるひとつの職業〈ヒーロー〉が生まれた。

これは〈ヒーロー〉を目指す『磁場 鉄也』の物語。

目次

第1話	スタート	1
第2話	雄英高校試験	7
第3話	体力テスト	15
第4話	戦闘訓練	24
第5話	戦闘訓練②	34
第6話	初めての『悪』	46
第7話	強大な力	56
第8話	本当の英雄	68
第9話	放課後の特訓	81
第10話	雄英高校体育祭開催!!?	91
第11話	予選通過!	101

第12話	第二種目 騎馬戦	109
第13話	最終種目 トーナメントガチ	
ニコ勝負!		128
第14話	トーナメント戦 その2	140
第15話	衝撃の結末	153
第16話	雄英高校体育祭終結!	161
第17話	ヒーロー名を決めよう!	181
第18話	職場体験	195
第19話	脳無襲撃	210

第1話 スタート

「はあ、もうちよいで受験とか勉強やだなー。」

少し茶色の掛かった髪少年、磁場鉄也は中学三年生ならではの悩みを愚痴った。

「でもお前あの雄英だろ？その個性で頭もまあまあ良いんだからいけるだろ？」

一緒に帰っていいいるクラスメイトが鉄也の愚痴に答える。

『雄英高校』

プロヒーローを多数輩出させている超名門校。その中でもヒーロー科は毎年倍率も偏差値も高いにも関わらず全国から受験を申し込む生徒は後を絶たない。

「まあまあは余計だ。でもあそこは偏差値今年79で倍率も半端無いしやっぱり勉強はしないとダメだしな。」

「まああの雄英に受けるっただけでもすげえよな。」

「お前も結構良い個性だしお前の行く高校も良いところじゃんよ。」

「いやいや雄英に比べたら低いって。」

しかし鉄也には明確に雄英を目指す理由がない。ただ学年で一番の個性を持っていて少し勉強が出来ると言うだけで雄英を目指す。もしかしたら隣のクラスメイトの方

がちやんとした理由でヒーローをめざしてるも知れない。こんな中途半端な気持ちで
雄英へ行っていいの。そんな事を考えていると学校へ着いた。

おはよー ういーす おはよ昨日のテレビ見た？ やべ宿題忘れた！

教室にはクラスメイトも既に挨拶をすまし話し合っている。すると担任が入ってき
て朝のホームルームを始める。

「ハイみんなおはよ。今日は特に行事はないけど今から進路のプリント集めるから前に
持つてこいよ。」

今は9月の中旬、受験シーズンで進路は決めなければいけない時期。クラスではプリ
ントを出しながらガヤガヤと話し合っている。

「おい喋るなー。でもどうせみんなヒーロー科希望だろ？お!!? やっぱり磁場は雄英か
！」

え? まじ!!? あの雄英? 本当かよ鉄也凄いな! でもあそこ倍率やばくね?

「おい先生! 普通生徒の進路ばらすかよ!!? 」

「いやいや先生も自分のクラスからあの雄英に行くなんてハナが高いからついな。」

「... それでも教師かよ。」

朝から賑やかな始まりでクラスは笑いながらホームルームは終わった。

キーンコーンコーンコーン

学校も終わり三年は部活もなくそのまま帰宅。鉄也はクラスメイトが進路の相談で遅くなる為1人で帰ることになった。

(偏差値79、今の俺が60だから今から結構追い込んで勉強しなきゃダメだな。考えると憂鬱になって来たけど三年生の宿命だし仕方ないか。本屋に寄って雄英の赤本でも買うか。)

キヤーーー。女の人の叫び声が辺りに響いた。声のする方を見るとどうやらひつたくりの様だ。

「誰かその人を捕まえて！ひつたくりよ！」

「ハッ！誰が捕まるかよ！」

(まじかよ!!?こつち向かってきてる!)

ひつたくり犯は人混みを掻き分けながら鉄也の方へと走ってくる。

(ここはヒーローが来るのを待つしか…)

「丁度いい付いて来い！」ガシッ

「!!?ママアーー」ドサッ

「イヤアアアアアーー！その子を返してえ！」

「!!?」

犯人は通行人を掻き分けた際目の前にいた少女を人質に取りこちらに向かつて来る。

(あいつあんな小さな子を！)

気づくと鉄也はポツケからビー玉程の鉄球を3つ取り出し、それをひったくり犯へと投げた。

「邪魔だガキ！」

すると鉄球は加速し投げただけでは有り得ない軌道を描きながらひったくり犯の腹へと吸い込まれて行った。

「ヴェツ、なん…だ…」

ひったくり犯はその場に膝をつき少女はその好きに母親の元へ戻って行った。

「このクソガキが！タダじゃおかねえぞ！」

「そこまでだ！」

「!!?」

誰かが通報したのかヒーローが駆け付けその後ひったくり犯は捕まって事件は解決した。その後軽い事情聴取を受け警察は犯人を連れて行ったが鉄也はヒーローに呼ばれ説教を受けた。

「怪我が無くて良かったものの君やあの子に何かあったらどうするんだ！今度からはヒーローが駆け付けけるのを待っている事！」

「：： はい。すみませんでした。」

犯人を捕らえたが一歩間違えれば大怪我に繋がる。しかしあの場で鉄也が犯人を足止めしなければ少女は無事では済まなかつたかも知れない。鉄也は自分がした事は間違つてとは思わない。しかしヒーローの言うことも分かる。矛盾した気持ちを押し堪えながらその場を離れ家に変えろとしたその時。

「お兄ちゃん助けてくれてありがとう！」

「娘を助けて頂きありがとうございます！」

人質になった少女とその母親がお礼を言つて来た。

「：： いや自分は何も。犯人を捕まえたのはあのヒーローです。礼ならあのヒーローに：：」

「違うよ！犯人を捕まえたのはお兄ちゃんじゃ無いかも知れないけど私を助けてくれたのはお兄ちゃんだよ！お兄ちゃんは私のヒーローだよ！」

（：： そうだ、俺のした事は間違つてなかつたんだ。けど俺にはヒーローの資格が無いから人を助けられない。待つんじや無くて自分で助けられる様に俺はなりたい！）

今までは理由も無く雄英を受けるだけだった鉄也に雄英を受ける理由が出来た。この日から鉄也はあの親子の言葉と決意を胸に秘め受験勉強へ打ち込んだ。

そして
雄英高校
試験当日！

第2話 雄英高校試験

「はあくやっぱり緊張するな。けど流石雄英。めちやくちや受験生多いな。」

今日は待ちに待った運命の日。雄英高校ヒーロー科の試験日。この日の為に猛勉強をして来たがやはり試験への不安は抜けず緊張で少しお腹が痛む。すると受験生の1人に身に覚えのある生徒がいた。

（あれ？あいつって10ヶ月位前にヘドロ敵に乗っ取られてた奴じゃん。あいつも雄英なのか。）

こうやって辺りを見渡すと良くも悪くも特徴的な者たちが多い。雄英の正門をくぐりいきなり躓きそこを女子に助けられている天パの者。女子を見るなりハアハアと色々とヤバイ小さい者。頭の半分で色違う者など全国から色々な個性を持つ生徒が来るため一癖も二癖もある生徒ばかりだ。

（三年間一緒にいても飽きななさそうな奴らばっかだな。でもまず雄英に受からなきゃ意味ないし頑張るか。雄英に来るのが今日が最後じゃなきゃ良いけど。）

気合を入れ直し校内にある看板に従い進むと広い大学の教室の様な所に案内され受験番号順に席に座らされる。席について10分ほど待つと生徒たちの前に教師である

うー人の男が前に立った。

『今日は俺のライブにようこそー！エヴィバディセイハイ！』

『…』

(え？なにこれ…)

プロヒーロー『プレゼント・マイク』が今回の実技試験についての説明をヤバいくらのハイテンションでしてくれた。色々長いので省略するとこの後10分間の模擬市街演習を7つの組みに分かれて行う。そこで出てくる"三種"の仮想敵が多数配置してありそれを"行動不能"すればポイントが入るらしい。だが配られたプリントには仮想敵は"四種"書いてある。疑問に思っていると眼鏡をかけた真面目そうな少年がプレゼント・マイクに質問した。残りの一つの仮想敵はデカイのに倒しても0ポイント。要はステージジギミックの様な物で各1つのステージに1体配置されてるらしい。プレゼント・マイクの説明も終わり生徒達は各々分けられた模擬市街へと案内された。「校舎もでかかったけど演習場はデカすぎだろ。」

そこは小さな村程の敷地にビルなどが立っていて本当に模擬なのか疑う程の規模だった。

(こんだけ広いと仮想敵見つけるのも大変だな。いや人数の割合で考えたらむしろ狭いのか？てなるとスタートダッシュが肝心に『ハイ、スターーーート!!?』…ん?)

『どうしたあ?!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ! 走れ走れ!!? 賽は投げられてんぞ!!?!』

「クソツ! まじかよ?!?」

急なスタートに戸惑ったが皆一斉に市街地へと走り出した。

(こいつらと同じところに行つてもポイントが入らない! 一先ずここから抜け出して一人にならないとポイントが稼げない!)

生徒の群れから外れ独りになった。すると建物の陰から プリントに乗っていたのと同じ仮想敵が現れた。

「目標発見! ブツ潰ス!」

「出てきたな! 確かこいつはIPか、なら早速IPゲットだ!」

鉄也が個性は発動させると体の周りにバチバチと電流が走る。すると周りから黒い何かが鉄也を中心に集まってくる。外から見るとまるで蟻が餌に集まってる様に見えるが実際に集まっているのは鉄也の個性に寄つて引き寄せられている『砂鉄』だ。集めた砂鉄を一塊にし、それを太い鞭の様にし仮想敵へと行き良いよく叩きつけた。

バガン! と派手な音をたて仮想敵は壊れ動かなくなつた。

「さーてこの調子でバンバン稼ぎますかね!」

目の前に集めた砂鉄でレールの様な物を作りその上を滑る様に市街地を移動した。

「これで最後！」

一体目の仮想敵を倒してから着々とポイントを稼いで6分。

「ふー、ザツと40位倒したけどそろそろ仮想敵も少なくなってきたな。時間も少ない
しまだ残ってる仮想敵を探さなきゃ」「ズドオン!!?」

「!??!?!?!?! なんだ地震? いや違うな。何だこの地鳴り。」

ズドオン!ズドオン!と音鳴る方へ移動するとそこには今までとは比べ物にならない
い程の大きい仮想敵がいた。

「おいおい! 幾ら何でもデカ過ぎでしょコレは!??!?」

大きさはそこら辺のビルと同じくらいかそれ以上の大きさの仮想敵がいた。

「確かにこいつは無視した方がいいな。見つからない様に移動して: : 何であいつ逃げ
ないんだ?」

大型仮想敵の進行方向のすぐ近くに独りの女子生徒が尻もちをついていた。

「: : : もしかして!??!?」

なぜ足が動いたかは分からない。『どうせ試験だし教師達が見てるから心配ない。』
『早くポイントを取りに行かなきゃ。』『多分大丈夫だろう。』そんなのお構い無しに鉄也

は女子生徒へと走って行った。

「はあはあ、流石にここも仮想敵が少なくなつて来ましたわね。早く他の所へ移動しなければ……」「ズドオン!!?」「こ、これは?!?」

目の前の仮想敵に夢中で大型仮想敵が接近してゐるのに気付かなかつた。

「これがお邪魔虫仮想敵?!?流石にこの大きさは……早くここから。」

大型仮想敵から逃げようと足を引くと先程倒したけど仮想敵の残骸に足を引っ掛け転んでしまった。

「いたつ。っは!」

目の前には大型仮想敵が迫つてゐるのに足が震えて思う様に動かない。

「だ、誰か……」

怖さのあまり目を瞑つてしまった。すると急に体が何かに引っ張られた。目を開けると誰かに抱えられ大型仮想敵から距離が離れていく。

(え、誰が)

「君大丈夫?!?どこか怪我してないか?」

「あ、ありがとうございます。貴方は?」

「君と同じ雄英の受験生だよ。」

ある程度大型仮想敵から距離が離れたので降ろしてもらい再度礼を言うと。

「いやーにしても結構危なかったな。けどあいつに目つけられちゃったな。」

「すみません私のせいでこの様な事に…。」

「大丈夫だつて気にしなくていいから。けどあんなのに付いてこられてら厄介だからここで倒しとくか。」

「どうやってあの様な大きい物を。」

「まあ見てなつて。」

バチバチという音と共に周りから大量の砂鉄が集められる。そこからレールを伸ばし大型仮想敵へと向かっていく。大型仮想敵の頭の位置まで登ると集めた大量の砂鉄を柱の様に固める。

「これでも喰らえ!!?」

固めた鉄柱を思いつきり大型仮想敵へと叩きつけた。大型仮想敵の足音よりも大きい音と共に大型仮想敵はそのまま倒れていった。

「ふー、こんなデカイのに倒してもOPなのは割に合わないよな本当。」

「あ、あんな大きさの仮想敵をたった1人で。貴方は一体。」

「あははは、まあね。それより早く次の仮想敵探さなきゃな。時間ももう少ないし

『終————了!!?』…ね…。」

「……………」

「…すみません。」

「い、いや君のせいじゃないから気にしないで。じゃあ試験も終わった事出した外に出よっか。」

「私は八百万百と申します。先程は本当にありがとうございます。」

「俺は磁場鉄也よろしく。」

鉄也は自己紹介と共に八百万に向けて右手を出した。

「！こちらこそよろしく願います！」

「つて、先に自己紹介しちゃったけど先ずはお互い試験に受からないとな。」

「そうですわね。でも磁場さんならきつと大丈夫ですわよ。」

「そうだな。自身持たないとな、ありがとう。じゃあお互い試験受かるよ願ってるよ。」

「はい、では次はヒーロー科で会いましょう。」

八百万と別れた後、生徒は一度集められ次の筆記試験の会場へと向かう。

(自信持たないとは言ったものの、やっぱり筆記試験が一番の山場だな。)

勉強で学んだ全てを絞り出した筆記試験はなんとか終わり雄英の試験に合格は終

わった。今日はいろいろ疲れたので寄り道せずまっすぐに家へと帰った。

「お疲れ鉄也。試験どうだった？」

「ただいま。まあボチボチかな。実技は手応えあつたけど筆記はギリギリかも。にしても腹減ったー！」

夜ご飯を食べ風呂にも入って体もサツパリし布団へと入る。するとドツと疲れが来て睡魔が迫ってくる。

（八百万も受かっているといいな。）

〵〵一週間後〵〵

「ちよつと鉄也！雄英から封筒来てるわよ！」

「！分かった今取りに行く！」

雄英からの封筒をポストからとり中を開ける。試験結果は……

第3話 体力テスト

(私は磁場恭子。鉄也の母で専業主婦だ。今朝、郵便受けを見ると鉄也が受験した雄英から受験結果であろう封筒が来ていた。それを今鉄也がリビングで開封しようとしている。鉄也の初めての受験でわたしもかなり緊張しているが鉄也の方は私よりも緊張しているだろう。あ！今鉄也が封筒を開けた！え!!？急に鉄也が泣き始めた!!?…:と言ふことは落ちたのだろうか。何せあの雄英だ。なにせ雄英高校は超難関高校だ。私には慰める事しか出来ないけどそれが私が今出来る精一杯の事だ。)

「あ、あの雄英受けただけでも私は凄いなと思うよ?確かにもう雄英には落ちちゃったけどまだ他にもヒーロー科はあるしね?大変だと思うけどまた頑張る!」

「え?」

「…受かった。」

「え?」

「鉄也雄英入学おめでとー。初めはいきなり泣き出すから落ちたかと思つたよ。何はともあれ無事合格する出来て良かった。この時の為に予約していた特注寿司取つていた

からジャンジャン食べな！」

「いやーありがとう。だけでもし俺が落ちてたらこの予約してた寿司どうなったの？」

「…う、受かるって信じてたから予約してたんだよ。」

「真っ先に励ましてたじゃん!?!? まあいいつか別に。それじゃいただきます！」

「食べな食べな！鉄也が好きだなネタばっかだから。お父さんは仕事で遅いのは残念だけど気にせず食べな。」

無事に試験に合格し特注寿司をたらふく食べた鉄也は緊張が解けたのかベッドに入った瞬間眠ってしまった。

そして雄英高校入学

当時

「… 何これ」

「何これって朝食だよ。」

「俺朝からカツ丼なんて食えないしなんで今カツ丼なの。」

「だって雄英高校の初日なんだから気入れないときさ。」

「分からなくもないけど朝からカツ丼はなあゝ」

「文句言わないで早よ食え。いらぬなら下げよ！」

「わかったよ。いただきます。」（あれ、意外と食えるぞ？）
「どお？うまいでしょ。」

「うん。ありがとう。」

「チャツチャと食べちゃって早く着替えちやいなよ。」

母の気合い注入カツ丼を平らげ支度を終え玄関へと向かうと柄にもなく母が玄関まで迎えに来た。

「ちやんと必要な物もった？」

「大丈夫だよ。」

「道間違えないようにね。」

「大丈夫だつて。」

「クラス間違えないようにね。」

「だから大丈夫だつて。じゃあ行つてきます。」

「ちよつと待ちなさい。ネクタイ曲がつてるよ。初日なんだからビジツ！と決めないと……ハイ、これでよし。」

ネクタイを直し終わると母は鉄也の背中をバンツ！と強く叩き「いってらっしやい」と大きな声で迎えてくれた。

「ああ、行つてきます！」

自転車で25分の道のりを緊張と不安と興奮が混ざったような複雑気持ちで自転車を漕いでいるとあの試験の時と同じ場所に来た。正門をくぐり雄英の中に入り一年用の案内看板にし従い教室へと向かう。

（はあく高校時代自体デカイけど教室のドアもデカイな。ここに俺のクラスメイトがいるのか・・・緊張してきたな。）

一回深呼吸を入れ落ち着かせて教室のドアをあける。入ったそうそう見るからにヤンキーっぽい奴と真面目眼鏡が言い争いをしている。

（早速何かもめてるよ。てかこいつらあのヘドロ乗っ取られ野郎と試験説明よ時の真面目眼鏡じゃん。）

少しクラスメイトに不安を抱いたがスルーしつつ自分の名前が書いてある席に座りこの後のスケジュールでも確認しようとする。と誰かに「すみません」後ろから肩をつつかれ振り向くと。

「あ！八百万じゃん！良かった受かったんだな。しかも同じクラスなんて！」

「ええ、磁場さんこそ合格おめでとうございます。私も知っている方がクラスメイトで嬉しいですね。」

「こっちも嬉しいよ。同じクラスになったんだからL I O E交換しようよ？」

「は、はい！・・・来ましたわ。では改めてお願いします。」

「こちらこそよろし「友達」ごっこしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ。」
(誰だこのくたびれた引き籠もり見たいな人?)

急に現れた無精髭を生やした男は何故か入っていた寝袋から出るなり生徒たちを見回すと気だるそうな声で

「はい。静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠けるね。」

急に現れるや否や説教染みた事をしクラスのみんな(誰だこの人)状態だ。

「俺は担任の相澤消太だ。」

(このくたびれた引き籠もり見たいな人が担任かよ!?)?て事はこの人もプロヒーロー?見た事ないな。)

「さて急だが君たちにはこれ着てグラランドに出ろ。」

クラス全員に雄英の体操着が配られた。皆体操着に着替えグラランドに既に相澤がいた。

「個性把握テストオ!?」

「え!??入学式とかはどうするんですか!??」

「雄英は〈自由〉な校風が売りだ。それは先生側も然り。入学式に出る時間があるならその時間をヒーローになる為の訓練に使い。時間は有限だ。有意義に使わないとな。」

(…?)

「ソフトボール投げ、立ち幅跳びとかの『個性』禁止での体力テスト。国は未だ画一的な記録を取っていつて平均を作り続けていっている合理的じゃない。」

相澤先生の説明によると今から『個性』有りの体力テスト行い個人の得意不得意を見つける合理的手段らしい。そこまではいい。その後体力テストのトータル成績がビリの奴は除籍になるらしい。

「災害はいつ何処から来るか分からない世界は理不尽に溢れている。そうゆうピンチを覆すのがヒーローだ。これから3年間雄英は君達には苦難を与え続ける。【Plus Ultra】だ。全力で乗り越えてこい。」

（結果から言おう。超余裕でした。これももしかしたら一位行けんじゃね？って位自分でも良かったと思う。元々自分の個性には自信があったし色んな事が出来るのは分かっていたけどここまでは。。。。。周りもみんな凄い奴ばっかだけど自信が溢れるばかりだぜ。フツ、自分の才能が恐ろしいな。）

自分の才能に浸っていると一人気になる生徒がいた。

（一人全然個性使わない奴がいるけどどうしたんだあいつ？ソフトボール投げで相澤先生になんか言われてるけど平気か？多分あいつ除籍かな？は？？今になって個性使っ

た!??しかも記録結構凄いいし!でも指なんか紫じゃね?)

体力テストも終わり遂に結果発表。自分が一位か気になり別の意味で緊張するがビリでは無いので焦りは無い。

「じゃあパツと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合格した数だ。口頭での説明は時間の無駄なので一括開示する。」

「おおおおおおお!??チクシヨ。2位かあ!」

(1位は八百万か、そういえばあいつの個性なんなんだ?身体から色んなもんポンポン出してたけど。ビリはあの指紫君か)

「ちなみに除籍はウソな」

「!?!?!」

「君達の最大限を引き出す合理的虚偽」

(なんだよ、別に焦らなかつたけどビックリして損したわ。)

体力テストも終わりこの後は普通に授業があるらしいので皆教室に戻る途中で八百万を見つけた。

「おーい八百万!」

「あら磁場さん。体力テストお疲れ様でした。」

「お疲れ。にしても八百万が1位だったかく、俺も結構自信あったんだけどな。」

「いえ、まさか私も1位を取れるなんて。先程の持久走はお見事でしたわ。」

「いや、まさか急に原付出して来たのはビックリだけどガス欠でリタイアつてのもビックリしたわ。八百万と最後まで競い合ってたせいで持久走の後は身体痺れて動けなかったわ。」

「私もまさかついて来られるなんて思っていませんでしたわ。次はプリウスでも出しませわ。」

「え？出せんの？？てか運転出来んの？？」

お互い体力テストの話をし更衣室の近くで別れた。授業は普通の勉強で少し退屈だったが次の授業はヒーロー科らしい『ヒーロー基礎学』でしかもあのオールマイトが務めるらしい。

「わーたーしーが普通にドアから来た！」

（うわー本物のオールマイト初めて見たけどやっぱり風格あるな。）

「ヒーロー基礎学！ヒーローの基礎つくる為様々な訓練を行う科目だ！早速だが今日はコレ！『戦闘訓練』。そしてこれに伴ってこちら。入学前に送ってもらった『個性届』と『要望』沿ってあつらえた戦闘服を着てもらおう。」

「戦闘服だあああ！」

「よっしや戦闘服だ！これはモチベ上がるなあ！」

「着替えたら順次グランドへ集まるんだ！」

「はい！」

第4話 戦闘訓練

『戦闘服』個人の個性に合わせて作られたオリジナルのコスチュームで個性を使いやすくしたり、出力の底上げ。更には個性によるリスクを軽減させる事が出来る。雄英では入学前に個性届を提出しその要望に合った戦闘服が用意される。その戦闘服を身につけ今から屋内戦闘訓練をする。

「はあく凄いな。本当に要望通りになってるわ。それに俺がデザインしたのよりカッコよくなってるし。」

教室で戦闘服が配られ男女別れて更衣室で着替えている。

（俺のもかっこいいけどみんなのもかっこいいな。爆豪のも良いけど少し敵っぽいデザインだな。上鳴のなんてほぼ私服だし。）

周りの戦闘服を少し見た後みんな更衣室を出る。

「緑谷のコスチュームもジャージみたいな感じなんだな。」

「こ、これお母さんが作ってくれたんだ。」

「へえ、母さんが作ってくれた戦闘服とか最高にカッコ良いじゃん。それならやる気も出そうだな。」

「そうなんだよ！こんなにカッコいい戦闘服は他に無いからね！でも磁場君のカッコいいね。」

「だろ！なんせ3日も掛けて考えたんだからな！少し要望を変えられてるところもあるけど最高の出来だよ！ほら、ここなんかカクカクシカジカ」

（余程自分の戦闘服気に入ってるんだな。）

話していると対人戦闘訓練の待ち合わせ場所へと着いた。

「始めようか有精卵共!!? 戦闘訓練の時間だ!!?」

「戦闘訓練かぁー、テンション上がって来るなー。」

「磁場さんこれは授業の一環ですよ。真剣に受けないとダメですわ。」

後ろから八百万の声で注意された。

「いやーそうだけど個性使う機会なんてあんまり無かったし…さ」

振り返るとそこには露出度の高い戦闘服の八百万がいた。

「…随分これまた露出の高い戦闘服だな。」

八百万の戦闘服上半身は袖は無く、胸の真ん中からへそ辺りまで開いており下半身は超が付くほどのミニスカートで構成された戦闘服でどうにも目のやり場に困る格好だった。

「本当はもっと布面積が少ないよう要望したのですがこれが限界だと戦闘服会社からコ

「ここまで言われまして。」

（そ、それよりも更に露出が凄いだと!?!）

「… ヒーロー科最高！」グツb

「あ、ああ… え!?？」

今から行う対人戦闘訓練は『ヒーロー組』と『敵組』の2人1組に別れて屋内戦をす
るらしい。状況設定では『敵組』は核兵器をアジド内に隠していて『ヒーロー組』がそ
れを処理する。『ヒーロー組』は『敵組』を捕まえるか核兵器の回収で勝利。『敵組』は
『ヒーロー組』を捕まえるか核兵器の保守。そしてお互いに15分の時間制限がある。
捕獲は『ヒーロー組』に配られた捕獲テープを巻けば捕獲証明になる。

（あれ、2人1組？A組は2人だから1人余る計算に…）

「おっと、そうだったA組は2人だったか。うーむ… では磁場少年には最後にど
こかのチームの一人と交代で入ってもらおう。」

「分かりました。」

「では戦闘訓練を行う『敵組』は屋内へ！『ヒーロー組』は5分後に屋内に潜入！それ以
外の待ちの生徒たちはビルの地下にモニター室があるからそこには集合!!？」

(リアルタイムでみんなの個性が観れた後で訓練出来るのはラッキーだな。ここでしっかりみんなの個性をみとけば大分有利になる。あ、爆豪の奴奇襲とか敵役が様になるな。そしてそれを避ける緑谷も凄いな。けど爆豪1人で大丈夫かな。!!?緑谷のあの動きまるで爆豪の動きを読んで対処してるぞ。確か爆豪って入試1位だよな。その爆豪個性使わずにあそこまで…)

緑谷が一旦その場を離れ体制を立て直している。その間爆豪は何か言っているが待ちの生徒たちはカメラだけなので音声は拾えない。

(爆豪のなんかブチ切れてんな。麗日の方も飯田にばれてて不利だし。爆豪と緑谷が鉢合わせたぞ。)

「爆豪少年ストツプだ！殺す気か！」

「殺す気？オールマイトそれってどうゆうっていう「ツドオオオオオン」

「!!? オイ授業だぞコレ！オールマイト！爆豪もう一発同じの使おうとしてますよあれ。止めなくてもいいんですか!!?」

「… 爆豪少年！次それ使ったら強制終了で君達の負けにするぞ。」

オールマイトがマイクを使い爆豪に先程の攻撃の注意をした。納得したのか爆豪は緑谷に接近戦闘を仕掛けるため緑谷に近づいた。

(… 緑谷も凄いいけど爆豪も凄いな。爆発で目眩しと軌道変更して勢いを殺しつつまた

爆発。）

爆豪が緑谷に攻撃を当ててから爆豪は緑谷に考える隙を与えずに攻撃を繰り返して行く。

（爆豪の奴あんまり考えるタイプじゃないと思ったけど全くの逆だ。乱暴だけどころかと考えて動いてる。才能だなあは。）

緑谷は爆豪のラッシュに対処出来ず逃げだが壁際へと追い込まれました。

「なんか爆豪の方が有利なのになんでアイツあんなに余裕無さげなんだ。」

緑谷が覚悟を決めたのか爆豪へと攻撃を仕掛ける。しかし爆豪は冷静さを失っているようにも見え先程同じく中止せざる終えない様子になっている。

「先生！やばそうだってこれ！先生！！？」

『つく！双方中止・・・『麗日さん行くぞ！！？！』』

「緑谷の奴何か仕掛ける気だ！」

緑谷と爆豪がクロスカウンターの様になったがよく見ると緑谷は「天井」に向けて腕を振り上げた。その途端ビルの中心部分が下から上にかけて本懐していった。

「腕振った勢いでビルに穴開けるとかどんな力だよ！！？オールマイト並じゃねえかあれじゃー！」

「！！？」ビクッ

緑谷の攻撃によって崩壊したビルの瓦礫が上の階へと持ち上げられ麗日はそれを柱を使って飯田へと打った。それをカードした隙に麗日は個性を使って飯田を飛び越え核兵器を回収した。

『ヒーローチームWIIIIIIIN!!?』

「なんで勝ったほうがボロボロで負けたほうが無傷なんだ。」

オールマイトが緑谷達の試合の反省会をした後残りの組の戦闘訓練が開始された。

「じゃあ最後に磁場少年の番だ！入る組と対戦相手もくじで決めよう！さあ〜て対戦相手は…」ゴソゴソ

（見た限りだと轟がクラスの中で一番強そうだから轟のチームと当たんなきゃいいかな。）

「磁場少年の対戦相手はB！轟、障子チームだ！今回は轟少年達は『敵組』をしてくれ！」
(えー!!?)

「そして磁場少年とチームになるのは… 葉隠少女！」

「えー、またですか先生!!?」

「確かに。だが葉隠少女！2回も訓練出来るのは滅多にない！それに相手は先程戦って負けた組。磁場少年と工夫して次は勝って来るんだ葉隠少女！」

「はい、分かりました。じゃあよろしくね磁場君。」

「こちらこそ。じゃ轟達が行ったら作戦会議しようか。」

「では轟少年達はビルの中へ！磁場少年達は5分後にビルへ行く様に。」

鉄也達は作戦会議のために屋外へ出てお互いの個性について話し合っていた。

「俺の個性は磁力でかくかくしかじかな事が出来る。確かに葉隠さんの個性は透明化？
でいいのかな？」

「うん。私の個性は透明化。でも自分の身体しか透明に出来ないからあんまり力にはならないかもよ？」

「いや、透明化は攻撃には向いてないけど潜入にはもってこいの個性だ。さっきは轟の氷結でやられちゃったけどあんなのは初見殺しだから仕方ないよ。それに俺と違ってあの初見殺しは効かないしね。実は考えてる作戦があるんだけど…。」

【モニター室】

「さあ5分経過だ！では最後の屋内訓練『敵組』轟障子チームvs『ヒーロー組』磁場葉隠チーム戦闘開始！」

「轟の奴すげー強いけど磁場達はどうゆう戦法で行くんדרな？」

「またあの氷結で一層されちゃうんじゃないの？」

「でも磁場も体力測定では凄い成績良かったしい線いくんじやねえの?」

【ビル内：敵組】

「どうする轟。時間的に2人は屋内に入ってきてるぞ。足音はきこえないがまた氷結で動きを止めるのか?」

「恐らく磁場の個性だろ。体力測定の際に見てたが磁場の個性は宙に浮く事も出来てたから氷結はきか無いと思う。それはあっちも分かっているだろうから今回は迎え撃つ。」
「てなるとは俺らのどっちかがあいつらに仕掛けにいくか?」

「こっちから行ったら葉隠に捕獲テープ巻かれる可能性があるからここで待ち伏せだ。だから障子は常にあいつらの位置をいつでも把握出来る様索敵し続けてくれ。」

「分かった。」

【ビル内：ヒーロー組】

鉄也と葉隠は鉄也の個性で集めた砂鉄の上に乗って移動している。これによって轟の水結による足留めは対策できる

「凄いね磁場君の個性!それも飛べるなんで!これなら轟君の水結も怖く無いね。」

「そうだけど轟もそれも分かかって氷結して来ないんだと思う。かと言って歩いてたら氷結されるかもしれないから一応こうやって移動するけどね。それよりも作戦忘れずね。この作戦の肝は葉隠さんなんだから。」

「プレッシャーかかるけど大丈夫！任せて！」

【モニター室】

「なんか静かだな。緑谷の時とは大違いだ。」

「嵐の前の静けさみたいだね〜」

「磁場の個性は体力測定で凄いつて分かってたけどああやって宙にも浮けるんだな。」

「多分それを分かかって轟ちゃんも初手での氷結をやめたのかしら。」

「それにしても凄い静かだね。」

「轟さん達は今の部屋で磁場さん達を迎え撃つつもりなのでしょう。ですから磁場さん達が轟さん達の部屋に入った瞬間お互い動きますわ。」

【ビル内：敵組】

「轟。磁場達がこの階にきたぞ。この階に上がった途端足音はしたが1人分だ。この階に来た途端に歩いているのは誘われてるな。葉隠が隠れて奇襲してくる作戦か？」

「多分そうだろうな。磁場が先に仕掛けて来てその隙に葉隠が入って来るって算段だろ。」

「という事はこつち向かって来てるのが磁場なのか。どうする轟。」

「… もう少し近づいできたなら氷結で牽制してみる。もうちよつと近づい出来たらまた教えてくれ。」

【ビル内：ヒーロー組】

「よし、行くぞ葉隠さん」

「了解。」

【ビル内：敵組】

「足音がすぐそこまで来たぞ轟。」

「分かった。」

轟が磁場のいる扉側に氷結しようとした瞬間「バリイイイイン」と急に轟達の背後の窓ガラスが割られ外から『黒い蠢めく何か』共に鉄也が入ってきた。

「さっさとお縄に付け敵共！」

第5話 戦闘訓練②

【屋内】

バリーイイイン!!?

「さっさとお縄に付け敵共！」

外から窓を割り豪快に屋内に潜入した鉄也。予想外の出来事に轟達は驚いたが冷静さは失わず即座に対処した。

「どけ障子！」

轟の合図と共に障子は轟のそばから離れた。轟は直様鉄也に向けて氷結を行うが砂鉄の横振りで遮られてしまう。

「それは聞かねえよ！次はこっちの番だ！」

轟達に向け上から砂鉄が振り下される。轟達はそれを避けるが鉄也の攻撃はこれだけでは終わらず次々と仕掛けてくる。

「チ、手数は向こう方が多いか。障子、葉隠に動きはあるか？」

「いや、今の所は無い。だがどうする、このままじゃジリ貧だぞ。」

「喋りながらとか余裕だな轟、障子！」

【モニター室】

「磁場の奴一旦外に出て何するかと思つたらまさか外から入つて来るとか予想外だな。」
「葉隠ちゃんはどこかに隠れて磁場ちゃんが2人を相手にしている隙を見て核を回収するのかしら。」

「しかしこうやって見ると轟君達が少し押され気味のように見えるが。」

「いや飯田少年、そうとも限らないぞ。轟少年達も常に核と磁場少年の間に自分達が入り核に手を出し辛い状態にしている。障子少年も常に葉隠少女を警戒している。」

「あ、ムツシユ障子が。」

【屋内】

「轟。俺が磁場の気をひく。その隙に磁場の動きを止めろ。いざとなつたら俺ごとやつてくれ。」

「分かった。だが捕まりそうになつたら引いてこい。」

「どうした轟！こんなもんか？…ん？」

轟が一步下がると障子が鉄也に向けて走つてきた。鉄也は砂鉄で障子を攻撃するが以外にも動きが速く避けられる。轟は鉄也が障子に構っている間に鉄也の死角に周り背後を取つた。鉄也はそれに気付くが轟の方が一步早かつた。

（貰つた！）

鉄也に向けて氷結を放った。しかし先程とは明らかに速い速度で氷結を避けた。鉄也の移動したところを見ると砂鉄がレールのように敷かれていた。

「50m? 走の時の応用か。目の前で見るとここまで速いのか。」

「クソツ：：障子一旦下がるぞ。」

「悪い抑えきれなかった。あれを回避されると流石に厳しいか。」

「いや、あれは磁場が一枚上手だった。それよりも葉隠はまだ動かないのか。」

「ああ、さっきの位置から動きはない。」

「そうか。次は俺が前に出る。障子は核を守っててくれ。」

【モニター室】

「凄いな磁場の奴あの轟相手にここまでなんて。漢だなあいつ」

「確かに凄いいけどなんで轟ちゃんは炎を使わないのかしら?」

「きつと何かまだ策があるので?」

「ふむ、轟少年が前に出るか。轟少年の個性は確かに強力だが範囲も広い為仲間を巻き込みやすい。確かにここは轟少年が前に出たほうが得策か：：）」

「!轟君が前に出たぞ!」

【屋内】

「：：次は轟が来るか。一層気引き締めないとな。」

轟が静かに前へとでてきた。障子は轟の個性の範囲外まで後ろに下がり核の前へと移動した。少し静かな時間が流れたがその時間もすぐに終わった。先に仕掛けたのは轟だった。さつきよりも速い速度での氷結。

「!?、あぶね! あんな速く氷結出来んのかよ。」

だが鉄也も先程同様レールの上を滑るように避ける。しかし轟は避けられる事を読んでいた。鉄也が移動してある先に氷結をして鉄也の退路を塞ぐ。

(あの移動方は速いがレールの上を移動する。レールの先を見れば動きは読める。)

「何度も避けれると思うなよ。」

(やっぱり移動先を突いてくるか。こうなったらそろそろ。)

レールでの移動を止め轟へ攻撃を仕掛ける。轟はそれを壁を作るように氷結でガードする。さらにその壁を登り上から鉄也へ飛び込んできた。一瞬轟の姿が壁で隠れて反応が遅れたがどうか体を転がし避ける。その一瞬を逃さず着地と同時に鉄也の方へ氷結が迫る。

「クソ! 一息つく時間もくれないうてかよ!」

レール内の鉄筋に磁力で自分の体を引き寄せさギリギリ回避する。

「…これも躲すか。本当に便利な個性なんだな。」

「自慢の個性なんでね。そっちも炎使わずともお強い事で。」

「…そろそろ時間も近えから終わらせるぞ。」

「お？核讓つてくれるなんて優しいじゃん。」

「…障子も来てくれ2人で畳み掛けるぞ。」

「いいが葉隠の方はどうする。」

「葉隠は無視していく。」

そう言うと轟はこの部屋のドアを凍らせた。

「これでもう葉隠は入ってこれない。」

「この野郎。」

「…」

パキイン！さつきと同じく速い氷結で轟が仕掛けた。それを砂鉄の横振りで破壊すると氷結の影から障子が鉄也へ接近してきた。

（こうも近いと無闇に砂鉄が使えない！）

鉄也の個性は中距離がメイン。相手が余りに近すぎると個性を十分に発揮できない。障子の大きな身体と6本の腕で鉄也を捉えようとする。

「ああ！鬱陶しい！」

自分身体を反発させ距離を取るとそこにまたもや轟の速い氷結が襲ってくる。それを間一髪で躲すが砂鉄が半分ほど氷結に巻き込まれた。

(危ねえ、〃一緒に凍らされてたらアウトだった。だけどこれじゃ2・3本分位しか作れないな。手数は減ったけど時間も無い。もうここしか無いな。)

鉄也は砂鉄を使わずに轟達に向かつて走り出した。轟が氷結してくるが砂鉄で破壊する。破壊されて飛んできた破片を顔を覆って反射的にガードしてしまった。その隙に轟の〃左足〃を砂鉄で掴み部屋の端へと投げた。

(しまった!)

(これで障子と一騎打ち。行ける。)

残りの砂鉄を一つに纏めそれを障子へと向けて振るう。まるで大蛇が這うように障子に向かつてくるがそれを6本の腕と巨体で受け止める。

「まじかよ!?!?」

「ぐう!今だ轟!やれ!」

障子もろとも最速の氷結で鉄也を捉えた。

「クソ、やられた。」

(勝った。これで後は葉隠だけだ。もし葉隠を捕まえられなくても磁場を捕まえれば時間切れでも俺たちの勝ちだ)

「やったな轟。これで後は葉隠だけだ。」

「ああ、思ったよりも手こずったけどな。どうせもう時間切れになんだから葉隠らしい

だろ。だけど念のために残りの砂鉄も凍らせ「やったよ磁場君!!?核回収したよー!」

「Beep」

【モニター室】

「いやー凄い戦いだっとな、磁場の奴轟相手によくやったな。」

「だけど葉隠ちゃんはまだ捕まってないわよ。」

「だがこの残り時間では磁場君達の勝利は難しいだろう。」

「うむ、流石にこの状況じゃ磁場少年も厳しいだろう。確かに時間も切れることだし

ヒーロー組の勝利は厳しいが『やったよ磁場君!!?核回収したよー!』

「何?!?」

「ん?どうしたんだ先生?」

「見てください。なんだか轟さん達の様子が変わってますわ。」

【屋内】

急に室内に葉隠の声が響きハリボテの核をバンバン!と叩く音がする。

「まさか本当に成功するとは思わなかったよ!凄いね磁場君!」

「まあ少し危ないところはあったけどね。」

「いつの間葉隠がこの部屋に入ってきた?!?」

「…葉隠が動いたら俺がすぐに察知する。一体いつどこから葉隠は入ってきたんだ。」

「いつも何も始めから俺と葉隠はこの部屋にいたぞ。」

「始めから磁場と? ? ?じゃああの足音は...!」

すると轟は何かに気づいたのか扉の方へと歩き出しドアの氷を左で溶かし廊下へと出た。そこには葉隠の靴がちゃんとあった。しかしそれを持ちあげると靴の中から砂鉄がサラサラと出てきた。

「どうした轟?」

「チツ、この葉隠の靴はダミーだ。靴の中に砂鉄が入ってた。多分この部屋に入ってから前に磁場の奴が歩いてるように見せ掛けるためにやったんだろ。」

「流石轟。当たってるよ。」

「でも葉隠がどうやってこの部屋に入ってきて障子にバレず核まで行って回収したが分からない。」

「まあネタバラしはモニター室でやろう。」

『ヒ、ヒーロー組! WIIIIIIIN!』

【モニター室】

「先生どうゆう事だ?!?あの状況で磁場達の勝ちなんて!」

「うーむ、実は私にもよくわからないが磁場少年が轟少年に凍らされた後、葉隠少女が核を回収したんだ。その証拠に核には誰も触れてないのにバンバン!と叩かれていて

ね。」

「葉隠ちゃんいつの間に部屋に入ったのかしら。」

「扉は轟さんが凍らせていたのでは。なのはどうやって」

「あ！磁場達が帰ってきたぞ！どうやって核を回収したか教えてくれよ！」

「そんなに知りたいなら教えてやろう！あれは……」

【屋内：ヒーロー組】（まだ轟達と会う前）

「実は考えてる作戦があるんだ…… 葉隠さんには俺と一緒に居てもらいたいんだ。」

「え？私の個性だったからこそり潜入みたいな感じじゃないの？」

「普通はね。今回はその考えの裏をかけた作戦なんだ。葉隠さんには俺が操る砂鉄にくっ付いてもらいたいんだ。そしたら俺が砂鉄を核の近くまでもって行ったら葉隠さんが砂鉄から離れて核を回収して欲しいんだ。」

「でもその作戦だと磁場君は砂鉄での攻撃ができないんじゃないの？」

「それは大丈夫。この位の砂鉄の束なら6本まで操れる。その内の1本に葉隠さんがくっ付くんだ。極力葉隠さんのくっ付いてる砂鉄は動かさないけど怪しまれない程度には動かさなきゃね。どうかな？大丈夫そう？」

「任せて！頑張ってくっ付いてるよ！けど私が居なかつたら怪しまれるんじゃないの？」

「それもちゃんと考えてあるさ。葉隠さんの靴に砂鉄を入れて俺が離れて部屋の前まで操って持っていく。そつちに目がいってる内に窓から進入する。」

「おう、凄い作戦だね。でも窓から侵入は少し怖いかな。でも私砂鉄になったぐらいの思いで頑張るよ！」

「ありがとう。じゃ作戦開始だ！」

【モニター室】

「… って感じで葉隠さんは核を回収出来たっていう訳。砂鉄を凍らされた時は焦ったけどどうにかなって良かったよ。どお？結構いい作戦だったろ？」

「…」

「あれ？みんな？」

「すげえな磁場！まさか葉隠か磁場と一緒に居たなんて思わなかったぞ。」

「私も騙されたわ。凄いのね磁場ちゃんって。」

「俺も葉隠さんは後から潜入して来ると思ったぞ。」

「透ちゃんも良くしがみ付いていられたね！」

「あの短時間で良くそのような作戦が思い付きましたわね。」

「今回の m v p は磁場少年達だな！轟少年達も良かったが磁場少年達のほうが個性の使い方が一枚上手だったな！」

「いやあ、ありがとうございます。けど一度轟の戦い方を見たおかげだけだね。」

「轟してやられたな。」

「…うるせえ。」

「うわ！怒ってるからって普通人の手凍らすかよ！」

「お疲れさん!!? 緑谷少年以外は大きな怪我もなし！初めての訓練にしちや上出来だったぜ！私は緑谷少年に講評を聞かせねば！着替えて教室にお戻り！」

「なんかいつも急いでるなオールマイト。」

みんな着替え終わると教室へと戻る。緑谷が遅れて教室へと戻るとそこには数人の人溜まりが出来た。

「いやー最初からあんな凄いの見れるなんて思わなかったぞ！しかも個性使わずにあそこまで出来るなんて凄いな！あ、俺磁場鉄也。よろしくな！」

「え!? あ、ああ。うん。」

一度に話しかけられ少し戸惑っている緑谷。

「そういえばみんなかつ… 爆豪君知らない？」

「爆豪なら先に帰ったぞ。」

緑谷は爆豪が帰ったと知ると後を追うように教室を出て行った。

「どうしたんだ緑谷？」

「訓練中にも爆豪となんか言い合ってたし、なんかあんだべ。じゃ俺も疲れたし帰ろ。じゃあなみんな。」

「じゃあな磁場。」

家に帰ると今日は母親が遅くまで出かけている為家には一人だ。夕ご飯と風呂を済まし何時もより早く布団へと入る。

（今日の戦闘訓練は面白かったな。だけど流石に疲れたわ。少し早いけどもう寝よう。）
今日の溜まっていた疲れが一気に溢れ出しすぐさま眠りに入ってしまった、

第6話 初めての『悪』

「ふあゝあ。まだ寝足りないや。」

屋内戦闘訓練の翌日。まだ昨日の疲れが少し残っていて眠気が抜けきれない。雄英が見えると校門の前に何やら人だかりが出来ている。雄英の制服ではないので気にはなつたが通り過ぎようとするとその集団に呼び止められた。

「君雄英の生徒だよね？オールマイトの授業を受けられてどう思う？」

（あーマスコミのやつらか。めんど。）

「さすがなんばーわんひーろーってかんじですね〜」

「え？なんか凄い棒読みな気が。」

「じゃ、先急いでるんで！」

「あ、ちよつと！」

マスコミの質問はさらつと受け流しきつさと教室へと向かう。

「お？磁場おはよ！お前も校門のところで質問されたか？！もしかして俺らテレビデビュー？」

「テレビじゃ僕は輝きは写しきれないさ！」

「オイラの格好良さが全国民に知れ渡って大変だな」

「峰田ちゃんはカツコ良くないから心配ないわ。」

「いや、俺ああゆうの嫌いだから適当に流してきたよ。」

「せっかくのテレビなんだからもつと」「おはよう」「ピタッ

話の途中だが相澤先生が入ってきた為、朝の賑やかだった空気が一気に収まりみんな大人しく席に着いた。

「昨日の戦闘訓練のお疲れ。Vと成績見せてもらった。磁場。個性の使い方は良かったがあんまり個性に頼りすぎるなよ。」

「分かりました。」

「さてHRの本題だ。急で悪いが君らに……」

（何だ？また臨時で何かやらされるのか？）ゴクツ

「学級委員長を決めてもらう。」

「学校つばいのきたー!!?」ホッ

「リーダー！やるやるー!」

「オイラのマニフェストは女子全員膝上30cm!!?」

「私がこのクラスを纏めますわ!」

「私も学級委員長やりたいわ。」

(学級委員長かあ。面倒いし俺よりもあいつの方が。。。)

普通の高校なら積極的に立候補するものは少ないがヒーロー科では人を導く力が鍛えられる為人気がある。

「静粛にしたまえ!!?多をけん引する責任重大な仕事だぞ!周囲の信頼あつてこそ務まる政務。民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるといふのなら。。。これは投票で決めるべき議案!」／

「とか言いつつ手上げてんじゃん!!?」

「いやいや飯田よお。まだこのクラスになつてばつかなのに信頼なんてまだ無いだろ。」
「だからこそここで複数票を獲った者こそが真にふさわしい人間という事にならないか!!?」

「確かにそれも一理あるな。」

飯田の説得もあり学級委員長は投票で決める事にした。結果、緑谷と八百万が3票獲得し更にその2人に投票し緑谷が学級委員長。八百万が副委員長になった。残りの時間で他の委員決めを行い昼休みになった。

鉄也は弁当を持ち中庭へと向かう。普段は上鳴や瀬路達と食べているが今日は二人共弁当なしなので購買にパンを買いに行っている。

「彼奴ら遅いな。先に食ってるか。」

2人の戻りが遅いので先に弁当を食べる。鉄也は食べるのが遅いのでこれ位のフライングをしても2人と同じくらいに食べ終わる。今日は天気が良く平和だなと思いつながら箸を進める。校門の方に目をやるといつもとは見慣れない壁が校門を塞いでいた。その向こうからはおそらくマスコミ達であろう声が聞こえる。よくやるなと思いつつ箸を進める。すると急に校門を塞いでいた壁が真ん中からポロポロと崩れ始めた。

「何だあれ？壁が急に崩れ始めた？」

崩れ始めてから30秒と経たないうちに壁が全て崩れ落ちた。そして崩れた壁からずっと雄英の校門にはついていたマスコミ達が一気に雄英の校内へ侵入してきた。

『セキュリティー3が突破されました。』

マスコミ達が校内に押し寄せると警報と共にアナウンスが校内に響いた。警報が鳴ると食堂の方が騒がしくなり大勢の生徒達が我先にと出口へ向かって混雑している。人混みに飲まれ押しつぶされてる生徒や中には転んでしまっている生徒もいる。

「おいおい上鳴達大丈夫かよ。にしても何で急に壁が……」

すると鉄也の携帯に上鳴から電話がかかってきた。

『あ、鉄也！何だこの警報？？それにセキュリティー3とか何なんだよ！』

「いや、俺にも何が何だか。でも急に校門の壁が崩れてマスコミ達が侵入してきたから多分それが原因だと……」

セキュリティー3は何のことだが分からないがおそらくこの警報の原因は崩れた雄英の校門が関係している。それは見てわかるが壁が崩れ原因はまだ分からない。上鳴と電話をしつつ視線を校門の方へ戻すと雄英に入っていたマスコミ達の中に1人の気になる男がいた。全体的に細くお世辞にも健康体とは言えない体だった。眼はボサボサの髪で隠れてよく見えない。だがその男は何かをボソボソと呟いてる。ここからじゃ何を言っているかよく聞こえずその男をじつと見ていた。口の動きが止まると男は口を三日月の様に開きニタアと笑った。その瞬間冷や汗が止まらなかつた。そこら辺にいるかチンピラやテレビで見る敵とは違う、憎悪や邪悪さが滲み出ていた。根拠や確信はない。だから直感的に彼奴が雄英の校内の壁を破壊した犯人と理解できた。

「何だ彼奴!? 根拠はないけど多分彼奴が雄英の壁を……。早く先生達に報告しないと！」

『くく……。也！オイ鉄也!??』

「!ご、ごめん。それよりも近くに先生はいるか! 多分この騒ぎの犯人が『大丈夫ー夫!!?』」

「な、何だ今のは?」

『おお! 飯田が非常口になってこの騒ぎ止めたぞ!』

「非常口? それよりも早く先生を見つけて早く校門に……」

もう一度校門の方に目をやるとそこにはあの犯人と思わしき男は消えていた。

「……いや先生はもういい。それより今から職員室行ってるから切島と飯食っててくれ。」

『ちよ磁場？おい』プツッ

半ば強引に上鳴の電話を切り職員室に向い相澤先生に先程見た男の話をした。

「じゃあそのボサボサ頭の奴が雄英バリアを壊したのか。」

「いや壊したところは見てません。ただあの状況だとそう見えましたしそれに……」

「それに？なんだ。」

「彼奴からは何かやばい感じがして。上手く言えないですけど。」

「……そうか。ありがとう磁場。先に教室戻ってろ。」

「はい。失礼しました。」

相澤先生に先程の状況を話した後教室に戻った。だがどうにもあの男の男の事が気になる。午後の授業はあまり身が入らなかった。

そして翌日の5時間目。

「今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト。そしてもう1人の3人体制で見ることになった。」

「せんせー。今日のヒーロー基礎学は何やんですかー。」

「災害水難なんでもござれ【人面救助訓練】だ!!?」

「救助かあこれまた大変そうだな。」

「コスチュームの着用は個人の判断に任せる。訓練場は離れたところにあるからバスに乗っていく。以上だ。」

「救助つてなると戦闘とはまた違った難しさがありそうだよな。」

「そうですか? 私はこちらの方がやりやすそうですが。」

「八百万の個性はなんでも作れて便利だよな。薬とか作れるんだろ? なんか八百万雑貨店とか開けそうだけだよな。」

「けれど磁場さんの個性も救助に役立てる便利な個性なのでは?」

「そんなんだけど裏を書くとか俺の個性は磁力に反応するもんが無いと何もできないからな。今の世の中なら困らないとは思うけど万が一って事があるからな。そう考えたら何でも作れる八百万と俺って結構相性良く無いか? 何なら卒業したら2人でヒーロー事務所でも立てるか? ハハハッ。」

「冗談はやめてください／＼／＼」

「え? ああごめん。」

「バスの席順でスムーズに行くよう番号順で二列で並ぼう!」

「飯田も委員長様になってるな。」

「こういうタイプだったくそう！」

訓練場までは少し時間がかかるため寝ようと思いい目を閉じると切島達の話し声が聞こえてきた。

「派手で強えつつつたらやっぱ轟と爆豪。それに磁場だな。」

「お？切島わかってんじゃん！」

「あれ、お前寝てたんじゃねえの？」

「俺の個性話してたら参加せざるを得ないだろう。」

「どんだけ自分の個性好きなんだよ。」

「爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気出なさそ。」

「んだとコラ出すわ!!？」

「ホラ。」

「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだ様な性格と認識されるってすげえよな。」

「アハハハハっ！クソを下水で煮込んだ性格とかどんだけだよ！」

「てめえのポキャブラリーは何だコラ！それにオメエも笑ってんな殺すぞ！」

「さらに口も悪いとか救いなしだな。」

バスで走ること20分。そこはまるで遊園地の様な訓練場だった。

(なんかUSJみたいだな。)

「水難事故、土砂災害、家事……etcあらゆる事故や災害を想定して僕らが作った演習場。その名も『ウソの災害や事故ルーム!』」

(USJじゃん!)

13号と言う災害救助で活躍しているヒーローが今回の演習を見てくれる3人目の先生らしい。その13号から改めて個性について教えてもらった。自分の個性がどうゆうものでどれだけ危険かを。忘れていたわけでは無いが個性を使う上で基本の事について話してもらった。紳士口調でとても分かりやすく心に響いた。

「そんじゃまは……」

途中で先生が言葉を止めこの演習場の中央の広場を見た。

「!!?」一かたまりになって動くな!」

「え?」

急な先生の言葉に皆訳が分からずみんな?を浮かべていた。

「13号生徒を守れ!」

「!!?」

相澤先生の視線の先には黒い霧からゾロゾロと沢山の人が出てきた。その中に見覚

えのある奴がいた。

(何で彼奴がここにいるんだ!?!?)

その男とは先日鉄也が昼休みの騒ぎの時に校門で見たボサボサ頭の不気味な男。

「何だありや? また入試の時みたいなものもう始まってんぞパターンか?」

「動くな! あれは敵【ヴィラン】だ!」

「先生! 彼奴だ! あの体に手が沢山付いてる男! 彼奴が昨日見た校門の壁を壊したかもしれない奴です!」

「何?!?! あいつが...」

命を救う訓練に現れた命を脅かす者共。ヒーローが何を相手にしているのが初めてわかった。それは俺たちが目指す対局の存在。【ヴィラン】

第7話 強大な力

「何で敵がここに…。。ここは英雄だぞ。それにいつでもプロヒーローが来てもおかしくないのに。」

「先生侵入者用センサーは！」

「もちろんありますが…。」

「現れたのはここだけか。何にせよセンサーが反応しねえなら向こうにそういう事が出来る個性がいるって事だな。」

「13号避難開始！学校に電話試せ！センサー対策も頭にある敵だ。電波系の個性が妨害している可能性もある。上鳴お前の個性で連絡試せ。」

「…もしかして先生1人であの人数相手にするんですか？」

「イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕獲！正面戦闘は…。」

「一芸だけじゃヒーローは務まらない。13号、生徒達を任せろ。」

すると相澤先生は階段を飛び降り一気に中央広場へ飛び降りた。数人の敵が飛び降りている相澤先生に攻撃を仕掛けようとするが個性を消されたのか何もせずに先生に捕縛されあつという間にやられてしまう。

「流石プロヒーローだな相澤先生。」

「だけど幾ら何でもあの数は……」

「何をしている！早く避難を！」

「させませんよ」

いつの間にか敵達を送り込んできた黒い靄が相澤の隙を見て生徒達の前に現れた。

「初めまして我々は敵連合。せんえつながらこの度ヒーローの巣窟雄英高校に入つて頂いたのは平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事でして。」

黒い霧を発している敵がオールマイトにを殺すと確かにそう言った。普通なら『あの』オールマイトが殺られるなんて考えない。だが今回のこの状況で敵連合が攻めて来たのにはオールマイトを殺せる手段があるからだろう。

「本来ならばここにオールマイトがいらつしやるはずですが何か変更が…… まあそれは関係なく私の役目…… は!?」 Boooooon! SKLIT!

すると爆豪と切島が黒い靄の敵へと先制攻撃を仕掛けた。だが目に見えるダメージはなく何も無かつたかのように平然としていた。次の瞬間自分達を囲むように黒い靄が生徒達を飲み込んだ。後ろの方にいた鉄也はかろうじて反応し後ろへ避けようとしたが靄の方が早く、飲み込まれてしまった。

「あああああああつ!?? いたつ！」

黒い靄が晴れると地面が見えてきたが態勢を戻せずそのまま落ちた。周りを見渡すとここはUSJのようだ。すると時間差で同じく2人の生徒が落ちてきた。

「おああああああ！」

「いたい！」

「大丈夫か！砂藤、青山！」

「いたた、磁場か。一体ここはどこなんだ？」

「多分中央広場の奥の方だと思う。土砂ゾーンと火災ゾーンの間辺りかな。」

「僕のまばゆいコスチュームに傷が。」

「それよりも早くみんなと合流して相澤先生の助けに入らないと。」

「こんなガキが俺らの相手かよ。」

「[[[?]]」

聞きなれない声の方に振り向くとそこには黒い靄から入って来たであろう敵達からゾロゾロと集まってきた。

「な、何だこいつら！」

「メ、メルシい……」

「俺たち生徒は散らして足止めって訳か。てなると他のみんなも同じか。」

「お前らに恨みはねえが一先ずぶつ倒れてくれねえかな。」

「どうする磁場！」

「どうするって倒すしかないだろう！」

「本気かお前！相手はオールマイトを殺すって言うてる奴らだぞ!!?」

「ボ、ボクはいけるけどここは引いた方がいいんじゃないかな。」

「ごちゃごちゃウルセエな！」

一番先頭の敵が待ちきれずに鉄也達に向かってきた。それに続き20人近い敵達も次々と向かってくる

「ああ！本当にやるのかよ！」

「うう！」

「基本3人で一塊で相手しよう！互いにカバーし合うんだ！」

（早く相澤先生に所に行かないと！他のみんなも平気なのか!!??）

「うああ。」

「クソ、痛え。」

「」

「… 何だこいつらそこら辺にいるチンピラ同然じゃねえか。」

「オールマイトを殺すなんて言つてた割には弱すぎるな。」

「ボクのネビルレーザーの前じゃどんな敵もイチコロさ☆」

「青山さつきまで足震えてなかつたか？」

「それよりも早くみんなと合流しよう。どこのエリアにいるかは分からないからしらみ潰しに行こう。」

「… いや、磁場は相澤先生の所に行つてくれ。」

「3人で行つた方がいいだろ？ 何で別れる必要が。」

「お前さつきから相澤先生の事心配してんだろ？ さつきからずつと広場の方氣にしてたし、俺も相澤先生の事だから大丈夫だと思ふけどあの人数差だしな。」

「だ、だけど。」

「この中じゃお前が一番強いし早く先生の所に行ける！ だからお前は先生の所に行つてくれ。他のエリアには俺たちだけで行くから。」

「どんな敵でもボクのネビルレーザーで一撃さ☆」

「… 分かつた。みんなの事は頼んだ！」

「お前も先生の事お願いな！」

クラスメイトの事は砂藤と青山に任せ鉄也は相澤先生の所へと向かつた。自分達に

当てられた敵は強くはなかった。この様子だと他の敵達も差ほど強くはないだろう。だがあのボサボサ髪の奴ともう一人、大柄敵が一人いた。その二人は他の敵達とは雰囲気がちがった。先生が少しでも戦いやすい様にチンピラ敵だけでも減らせばその分先生も集中出来る。個性で作り出したレールの上を滑り最速スピードで相澤先生の元へと向かう。

緑谷達は目の前の出来事をただ見るしかなかった。相澤先生はついさっきまで大量の敵達に相手にも押ししていたのにも関わらず一人の大柄敵の出現で戦況はガラリと変わった。見るだけでも両腕は骨折。顔面も地面に叩きつけられ無事では無いだろう。すると黒い霧の敵が死柄木というボサボサ髪の所へ合流してきた。何かをボソボソと話している。よくは聞こえないが確かに「帰る」と聞こえた。しかし雄英にここまでしておいて目当てのオールマイトに何もせず帰るのはただ雄英の危険意識が上がるだけ。敵連合の意図を考えていると一瞬だった。死柄木と言う敵が自分達に一瞬で近付き隣にいる蛙吹へ手を差し伸べた。この死柄木の個性を緑谷は先程の相澤先生との戦闘で見ていた。この死柄木の個性は触れているものを崩していた。もしその個性で蛙吹さ

んの顔に触れたらひとたまりも無いのは確か。そしてその手が蛙吹さんの顔に触れたが何も起こらない。

「!??!?… 本当にかっこいいぜ。イレイザーヘッド」

(ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!)

力の調整。自分への被害。相手へのダメージ。気にしている暇はなかった。優先すべきはいち早く死柄杓を蛙吹さんから離れさせること。

「手、放せえ!!?!」

「脳無」

「SMOSSH!!?!」

今打てるありつたけを放った。なのに自分はダメージを受けていない。ここに来て力の調整が上手くいった。この状況ではうでが折れてないのは大きい。あのオールマイトの力をありつたけを叩き込みダメージは無く、緑谷もこれはやったと確信した。

「え…」

さっきまでこの大柄の敵は相澤先生の所にいた。それがいつの間にか目の前にいて100%のSMOSSHを受けて平然としている。理解が追いつかなかった。あのオールマイトの力が効かない。

(まさか!)

「いい動きだね。SMASHってオールマイトのフォローかい？まあいいや、やれ脳無。」

緑谷は大柄敵にうでを掴まれ蛙吹さんにはまた死柄木。相澤先生は満身創痍で動けない。相澤先生が敵わない敵と緑谷達では勝負は目に見えている。SMASHも効かず自分よりも力のある敵になす術もなく絶体絶命。

(このままじゃ!!?まだオールマイトに教えてもらうことが沢山あるのに!)

走馬灯の用にオールマイトとの海浜公園での出来事が蘇ってくる。

(オ、オールマイト!)

「緑谷ああああああ!!?」

(あともう少しで中央広場だ!何もなきやいいけど)

砂藤達と別れて数分後。やっと中央広場が見えてきた。だがそこで目にしたのは大柄敵に馬乗りになされボロボロの相澤先生。最も恐れていことが現実になってしまった。そしてそこから離れて緑谷達が水辺に身を潜めていた

(よかった。緑谷達は無事か。だけど相澤先生はどう見ても重症。隙を見て早く助けだ

さないと危ない。」

すると一瞬で状況が変わった。ボサボサ髪の敵が緑谷達に接近し蛙吹さんが標的にされた。雄英の壁を破壊したのが本当にこいつなら蛙吹さんは無事では済まない。しかし何も起こらない。相澤先生が力を振り絞り個性を消したらしい。しかし敵達もそれを見逃さず相澤先生の頭を掴み地面へと叩きつける。緑谷がボサボサ髪の敵に攻撃を仕掛けた。SMASHと言う掛け声とともにものすごい衝撃が鉄也の所まで届くが大柄敵に遮られた。遠目で見てもあの大柄敵の動きは見えなかった。それに緑谷の攻撃に耐えていた。緑谷のあの攻撃は屋内戦闘訓練の時にその威力を見ていた。しかしあのビルを壊す程の威力の攻撃を微動だにせず受け止めてた。

（嘘だろ!? あのパンチ受けてなんとも無いって化物かよあいつ!）

緑谷の攻撃受けても平然としている敵は緑谷の腕を掴み緑谷に殴りかかろうとしている。蛙吹さんの方は再びボサボサ髪の敵が。このままでは緑谷と蛙吹の命が危ない。相澤先生の方も重症だが相澤先生なら緑谷達を助けろと言うだろう。

（すみません相澤先生! だけど緑谷の攻撃が効かない敵をどうすれば... 一先ず注意を引いて少しでも時間を稼ぐ!）

「緑谷ああああああ!!?」

「磁場君!?」

「チツ、生徒が1人逃げたか。やつぱり有象無象達じやダメだな。黒霧。先にあいつを片付けろ。」

緑谷達への意識は此方へ向き死柄木と脳無の攻撃は止められた。

(どうする！俺には緑谷以上の火力なんて出せない。ここで皆を連れてこの場から離脱するには……)

「くらえええええ!!??」

砂鉄の束で大柄敵へと叩きつける直前に個性を解き、ただの砂鉄へと戻す。

「クソ、目が！脳無早くあのガキ共を殺せ！」

個性を解き中に舞った砂鉄は敵達の目に入り2人とも一時行動不能になった。その際に緑谷達と相澤先生を砂鉄の束で回収し最速スピードでこの場から離れる。

「大丈夫かみんな!!??」

「すごいよ磁場君！敵の足を止めてさらに僕達を回収するなんて！」

「ケロオ。ありがとう磁場ちゃん。」

「磁場あああああ！」

「そんなことよりも早くここから離れて相澤先生を医者に見せないと！」

今回は上手くいったが次はもう無い。相澤先生がこんなになる相手は俺たち生徒がどうこうできる問題では無い。いち早くこの場から離れ相澤先生を治療しなければな

ら危ない状況だ。

「まず相澤先生を連れて外に出る！その後にはヒーローを呼んでこよう！」

「他のみんなは！」

「相澤先生を見てみる！どう見ても重症だろ！みんなも心配だけどもまず…」

気付くと脳無が自分たちの前に来ていた。そんなに時間が空いてなかったとは言えあの距離を一瞬で縮めてきた。既に拳を構えていだが一瞬の出来事過ぎて頭が追いつかない。気付いたら自分達と相澤先生を庇う様に放り投げられていて磁場君が脳無に吹き飛ばされた。

「磁場君!!？」

「磁場あああ！」

「最近の子供はすごいんだな。脳あの一瞬の間に仲間を庇って脳無の攻撃はガードするなんて。まああの脳無の攻撃をガードなんて無意味だ。これであのガキは終わった。やれ脳無」

「ど、どうするんだよ緑谷あ！」

（どうする！相手は格上、先生と磁場君は動けない。この状況で2人を助けて逃げられない…）

考える暇もなく脳無が緑谷達に向かってきてる。相澤を置いては逃げられない。立ち

向かうにも攻撃は効か無い上に素早い。相手は既に腕を振り上げ後はその腕を振り下ろすだけ。助けてくれる人も近くにはいない。

(このままじゃ本当に死…)

ヒーローを目指す前にまだ16歳の子供。迫りくる恐怖に目を瞑るとこしか出来ない。しかし待っても拳は降ってこない。目を開けて脳無を見ると分かりにくい体が黒い何かが脳無を縛り動き止めている。

「… イレイザーヘッドといいお前といい本当にかっこいいな。」

「磁場君?」

「さ、させるか…」

「脳無はそいつらをやれ。こっちのガキは俺がやる。」

脳無は体を縛っている砂鉄を無理やり振りほどき再び緑谷達に拳を向ける。鉄也にも敵が迫っているが先程の攻撃で身体が思う様動けずダメージが酷く先程の脳無の縛りで力を使い果たしろくに個性を使えない。本当に絶体絶命。この場も誰もが最悪の状況を想像した。誰もが助けを求めた。だが神は生徒達を見捨てはしなかった。強く助けを求めれば必ず応えてくれる『本物の英雄』が。

バン! USJの入り口のドアが壊されそこから1人の英雄が来た。

「もう大丈夫。私が来た!!?」

第8話 本当の英雄

「私が来た！」

敵が鉄也に手を出す寸前にオールライトがUSJへと駆けつけた。

「オ、オールライト……」

「待ってたよヒーロー。社会のゴミめ。」

一瞬だった。オールライトが階段から飛び降りると周囲のチンピラどもを倒し緑谷達の所へ移動していた。そのまま緑谷達を抱えたまま死柄木を殴り鉄也をも回収した。

「相澤くんだけでなく磁場少年まで……皆入り口へ。相澤ちゃんと磁場少年を安全な所へ。」

「ああああ駄目だ。ごめんなさいお父さん。」

死柄木は殴られた際に落ちた顔についていた手を拾いブツブツと言いながらそれを顔へと付け直した。

「オ、オールライト。あの黒いのは打撃は効かない、それに力と速さもオールライト並みです。だから……」

「磁場少年……でも大丈夫！だから君は安静にしてなさい！緑谷少年！磁場少年と相澤

君を連れて安全な所へ！」

グッと親指を立てオールマイトは脳無へと向かう。だがオールマイトの攻撃は効かず脳無の攻撃を避けるだけで有効打は与えられていない。

「マジで全然……効いてないな!!?」

「効かないのは『ショック吸収』だからさ。脳無にダメージを与えたいならゆつくりと肉をえぐるとかが効果的だね。それをされてくれるかは別として。」

緑谷達はオールマイトが敵を引きつけている内にその場から離れる。

「磁場ちゃん。その腕私達を庇った時に……」

「ああ、だけどみんなが無事で良かった。」

「ありがとう磁場ちゃん。」

「けどオールマイトも来たもう安心だな！ほら見ろよ！バックドロップであんな爆発だぜ!!?」

（いや……敵が1人ならオールマイトでも行けるかもしれないけどあの3人同時は危ない……）

「あ！おーい、デククーん！」

「麗日さん！皆！良かった無事で。それより磁場君と相澤先生を！」

「磁場両腕が！それに相澤先生も!!?」

「俺よりも相澤先生の方が危ない。」

「みんな先生と磁場君をお願い！」

「おい緑谷お前どこに…。」

（通勤中にも幾つかオールマイトは事件を解決している。ここに来た時13号先生が相澤先生と話してる時指を3本立ててた。多分あれは活動限界の事だ。僕だけが知っているオールマイトの秘密。嫌だ。まだオールマイトに教えてもらいたいことが沢山あるのに！）

「オールマイト!!??」

「やめろ緑谷！」

「どっけ邪魔だ!!??デク!!??」

緑谷がオールマイトのそこへ駆けつけると爆轟、切島、轟の3人がオールマイトの助太刀に来た。爆轟は霧の敵を拘束。轟は脳無に氷結。切島は死柄木へ攻撃するがかわされる。

「あいつら…。」

あそこに集まった3人はA組でも屈指の実力者だ。しかし脳無を目の前にした鉄也にあの脳無の恐ろしさ身を以て知っている。

（駄目だ。いくらあの3人でも脳無相手はそれにもし脳無が爆轟達を狙ったらその分

オールマイトが動きにくく….)

脳無に拘束されたオールマイトは轟の水結で生じた隙で脳無から離れた。轟の水結により体の半身が凍っているのにも関わらず脳無は体が割れながら起き上がる。

「体が割れてるのに動いてる?!? しかも凍って割れた箇所が再生してるなんて。個性の複数持ちなんて聞いたことが…」

体を再生させ元に戻った脳無はものすごい速さで爆轟に向かっていった。しかし爆豪はすでにその場から離れ脳無攻撃から免れていた。離れていた鉄也でもほんの少ししか見えなかったがオールマイトが爆轟を庇い脳無の攻撃を防いだ。しかし流石のオールマイトもあの脳無の一撃を防ぎきれずダメージを負っていた。

「子供相手に… 加減を知らんのか」ゴホッ

「仲間を助けるためさしかたないだろ? さっきだってその地味めの奴。あいつが俺に思いつ切り殴りかかろうとしたぜ? 他が為に振るう暴力は美談になるんだろヒーロー? 俺はなオールマイト怒ってるんだ。同じ暴力がヒーローと敵でカテゴライズされ良し悪しが決まるこの世の中に! 何が平和の象徴だ! 所詮お前は抑圧の為の暴力装置だ! 暴力は暴力しか生まないとお前を殺すことで世に知らしめるのさ!」

「滅茶苦茶だな。そういう思想犯の眼は静かに燃えゆるもの。お前は自分が楽しみたいだけだろ嘘つきめ。」

「アハツ、バレルの早……」

「これで3対5だ。」

「とんでもねえ奴らだが俺らでオールマイトのサポートすりや撃退出来る！」

爆轟達はその場を離れずオールマイトと共に死柄木達を倒すつもりのもりのようであるから離れない。

「駄目だ逃げなさい！」

死柄木達は既に戦闘体制に入っている。黒い靄と脳無はオールマイトへ。死柄木は緑谷達へとむかっている。

「生徒達を狙うなんて卑怯だな敵よ！」

「なら生徒を守ってみろよオールマイト！平和の象徴なんだろう？」

「やっぱりやるつきやないのかよ！」

（確かに時間はもう一分と持たない。力の衰えは思ったより早く敵との相性も悪い。しかしやらねばなるまい！なぜならわたしは……）

「さあオールマイト！生徒を守れず無様にしね！」

「平和の象徴なのだから!!？」

オールマイトを中心に肌に刺さる様な威圧を感じた。『N.O. 1ヒーロー』『平和の象徴』それらを十二分に感じさせられるプロの威圧がまるで重低音の様に体に伝わる。オールマイトか離れている鉄也にまでも鳥肌が立つほど感じられる。その威圧感に蹴落とされ死柄杓も堪らず足を止め後ろへ下がる。オールマイトと脳無の拳がぶつかるがさきほど同様脳無にダメージはない。

「シヨック吸収ってさっき教えたじゃんか。」

（駄目だ。やっぱりあのシヨック吸収がある限り物理攻撃しか出来ないオールマイトじゃ手の打ちようが…）

「そうだなーだが！」

するとオールマイトは連続で脳無と殴り合う。ドドドドドドドドドド！まるで爆心地にいる様な激しい殴り合いで衝撃波がここまで届き入る隙もない。

『『無効』ではなく『吸収』ならば限度があるんじゃないか!? わたし対策!? 私の100%に耐えるのならさらにその上からねじふせよう！』

（一撃一撃が100%以上…）

すると徐々に脳無が押され始めさらにオールマイトの方は激しさが増して行く。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの！敵よこの様うな言葉を知っているか

「!?」

「Plus Ultra! 《更に向こうへ!》」

『シヨック吸収』でも吸収しきれない程の力と数で脳無をUSJの天井を突き破り吹き飛んだ。その規格外の力とNo. 1ヒーローとしての力に圧倒され言葉が出なかった。死柄木と黒い靄敵はオールマイトの力を目の当たりに後ずさりをする。

「衰えただと? 完全に蹴落とされたよオールマイト。よくも俺の脳無を… このチートが!!?」

「どうした? 来ないのかな? クリアとかなんとか言っていたが出来るものならしてみろよ!!?」

(これがオールマイト。No. 1ヒーロー平和の象徴の実力。次元が全く違う。やっぱりここはオールマイトに任せて…)

おそらく今回の作戦の要であろう脳無がやられ中々攻めに行かない死柄木達だがあの力を見てもまだ引き下がる様子は見せない。何やら2人で話していると二人掛かりでオールマイトへ仕掛けてきた。しかしオールマイトは避ける素振りを見せずその場から動かない。実は既にオールマイトの活動時間は過ぎていて一步も動けずにいた。

それを知ってか知らずか死柄木達はオールマイトへと向かっていく。だがそれを知らない鉄也は動かないオールマイトみてもしやと思腕の痛みをこらえオールマイトのもとへ行こうとしたがクラスメイトに止められる。瞬間離れていた緑谷が驚く速さで死柄木達に飛んで行った。この距離でも目が追いつかずまるでその速さはあのオールマイトに匹敵する速さだった。

「は!? 緑谷!?」

「オールマイトから離れろ!!?」

黒い靄敵目掛けて腕を振りかぶるが相手も対処が早い。黒い靄敵の個性を使い離れている死柄木の腕だけワープし緑谷へと向ける。

「邪魔するな。」

「緑谷!」 バァン!

緑谷に死柄木の手が触れる間に死柄木の手が何者かに発砲された。そこから3回ほどの銃声が聞こえた。このタイミングで死柄木達を攻撃する者が現れたということ
は...

「ごめんよ皆遅くなったね。すぐに動ける者をかき集めてきた。」

「I—Aクラス委員長飯田天哉!!? くださいました!!?」

ヒーロー達を呼ぶ為黒い靄の敵を振り切りUSJから出た飯田が大勢のプロヒー

ローを連れて戻ってきた。プロヒーローがきた安心から麗日や芦戸は涙を流していた。「あーあ来ちゃったな。ゲームオーバーだ、帰って出直すぞ黒霧……」

BLAM! BLAM! BLAM! 1人のプロヒーローが逃げようとする死柄木達を逃すまいと手足を撃ち抜く。さらに追い討ちをかけるかの様に怪我を負いながらも13号が個性を使い死柄木を吸い寄せせる。

「クソ! 黒霧早く帰るぞ!」 ガシッ!

ただでさえ手足を負傷しプロヒーローもいるこの状況で死柄木の足が何かに掴まれる。これは死柄木が緑谷を殺そうとした時にも邪魔した生徒の個性だと即座に理解した。

「逃すかああああ!」

「あのガキまた邪魔を……!」

自分足を掴む砂鉄を掌で触り崩そうとする。だが初めは少し崩れるが元から決まった形を持たない砂鉄を固めている為崩れても即座に共に戻る。ギリギリと死柄木の足を離すまいとその力は強くこのままでは足の骨を折られてもおかしくない。

「今回は失敗したけど…… 今度は殺すぞ平和の象徴。オールマイト!」

プロヒーローの追撃と鉄也の拘束も虚しく黒い靄敵のワープで逃げられてしまった。

「これだけ派手に侵入されて逃げられちゃうなんて……」

「完全に虚をつかれたね。それより今は生徒らの安否さ。」

「クソ、何もできな……」フラッ

個性による疲労と両腕のダメージが重なり鉄也の意識はここで途切れしまった。地面に倒れ込む寸前にブラドキングに支えられた。

「腕がこんなになりながら敵を逃すまいと個性を……」

「ちよつとその子の腕大変じゃない！早く病院に！」

その後すぐに警察が駆けつけ生徒の安否確認の為外に集められた。

「重症の生徒2人を除いてほぼ全員無事か。」

「それに相澤先生は……」

「イレイザーベッドは両腕粉碎骨折顔面骨折。幸い脳系の損傷は見受けられません。ただ眼窩底骨が粉々なつてまして目に何かしらの後遺症が残る可能性があります。」

「だそうだ」

「ケロ……」

「13号は背中から上腕にかけて裂傷が酷いが命に別条なし。オールマイトも同じく命に別条なし。彼に關してはリカバリーガールの治療で十分処置可能とのことで保健室だ。」

「デクくん… 緑谷くんは!?？」

「ああ彼も保健室で間に合うそうだ。」

「あの磁場さんの姿が見えませんが彼ももしかして…。」

「そもそも1人の生徒は両腕粉碎骨折に左肩と左胸骨の骨折。命に別条はないがリカバリーガールの治癒では処置しきれないから彼は病院だね。」

「磁場ちゃん…。」

ひとまず生徒らは一度教室へと戻り确实USJ内でのことを細かく聞かれた。その後はすぐに皆家へと帰宅した。

日正午

「……………んあ。」

ふと目が醒めるとそこは見慣れない真っ白な天井だった。

「鉄也！大丈夫？痛いところはある？」

「母さん、父さんまで。ここは…。」

「詳しい話は僕がするよ。」

部屋の奥に立っていた男性がかぶっていた帽子を取り鉄也の前へと来た。

「僕は刑事の塚内だ。君はUSJの時の怪我で今入院中だ。だけど明日の学校には行けるから心配はないよ。」

「そうだ！相澤先生は?!? 無事なんですか!」

「ああ君のおかげでイレイザーベッドは重症だけど命に別条はないよ。」

「そっか、良かった…。」

「目覚めて早速で悪いんだけど昨日何があったか聞かせてもらってもいいかな?」

昨日の事を知っている限り話した後精密検査を受け退院をした。後で言われたが今日は臨時休校になったらしい。次の日になると初めに保健室に行きたいリカバリーガールに怪我したところを最終的に治癒してもらってから教室へと向った。

「おお！磁場平気だったか？入院って聞いたからヒヤヒヤしたぜ!」

「まあなんとか。」

「磁場ちゃんあの時は本当にありがとう。」

「お互い様ってことでそんなに気にしなくていいよ。」

クラスメイトから色々と言葉をかけられホームルームが近いので席に着いた。席に着くと隣の席の八百万が声をかけてきた。

「磁場さん怪我の方はもう大丈夫ですか？」

「ああ見ての通りね。」

すると包帯ぐるぐる巻きの相澤先生が教室に入ってきた。まるでミイラのような格好でよろめきながら教壇へと向かっていく。

(よくあの怪我で復帰となプロ意識高いな。だけどぜんぜん無事に見えねえな。)

「俺の安否なんてどうでもいい。何よりまだ戦いはおわってねえ。」

「まさかまた敵に侵入されたとかじゃ…」

「雄英体育祭が迫ってる！」

「めっちゃ学校つぼいのきたー！ー！」

第9話 放課後の特訓

「めっちゃ学校ぼいのが来たな。まあ雄英も一応学校だから当たり前か。」

「けど先生！敵に侵入されたばっかなのに平気なんすか？」

「逆に開催することで雄英の危機管理体制が磐石だと示すって考えらしい。だが警備は例年の5倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は…最大のチャンスだ。敵ごときで中止していい催しじゃねえ。」

「いや、そこは中止にしようぜ。」

「なんだ峰田雄英体育祭見たことないのか？」

「あるに決まってるけどそうゆう事じゃなくてよ。」

『雄英体育祭。』

個性の出現後衰退、形骸化してしまったオリンピッククの代わりとなるのが『雄英体育祭』。その様子は全国中継されプロヒーローも将来の相棒《サイドキック》となる卵を観戦しにくるため体育祭での活躍出来ればプロヒーローからスカウトされる事もある。

「まあ普通は卒業してからプロ事務所相棒《サイドキック》として入るしな。プロヒーローもいい生徒探しにくるからな。」

「けれどそこから独立しそびれてずっとサイドキックのままの方も多いらしいですね。」

「まじでか。そうならないよう気をつけないとな。」

「当然名のあるヒーロー事務所に入ったほうが経験値も話題性も高くなる。じかんは有限。プロに見込まれればその場で将来の選択肢が増えるわけだ。年に一回。計3回のチャンス。ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ！」

く 午前の授業が終わり昼休みく

「知こう迫って来るとテンション上がるな！ここで活躍すればプロへの道も一歩踏み出せる！」

「それに絶対中継だから活躍すれば女子からもモテそうじゃね？？」

「上鳴それメインで体育祭出る気じゃねえよな。」

鉄也、上鳴、切島の三人は中にはで昼ご飯を食べながら体育祭について話し合っている。

「でもそれで女子からも声かけられたら嬉しいだろ？切島はどうよ？」

「確かに嬉しいけど出るからにはやっぱり上を目指したいな。」

「ほらな？ 磁場だつて声掛けられたら良いだろ？」

「… まあ確かに嬉しいけどやっぱりな。」

「なんだかんだ嬉しいんじゃない！」

「けど上鳴と同じだとは思われたくないな。」

「確かにな。」

「なんだよお前ら酷くねえか!!?」

「あ、そうだ。体育祭までまだ一週間あるからみんなで学校残つて個性の練習しね？」

「お？ なにそれ面白そうじゃん！」

「面白そうつてなんか軽いんだよな上鳴は。でもそんな事できるのか？」

「まだわからないから昼休みが終わる前に相澤先生に聞きに行つてみるよ。」

「じゃ分かつたら教えてくれよ。」

「了解だ。」

「昼」飯を食べ終え相澤絶対を探しに職員室へと向かう。

「失礼しまーす。相澤先生いますかー？」

「… なんの様だ磁場。あと伸ばすな。」

寝袋に入りながらいつものゼリー飲料を飲んでる相澤先生がいた。

「… いつものそれ飲んでますけどちゃんとしたの食べな「様はなんだ」

「… 放課後学校に残ってクラスの何人かで体育祭に向けて個性使った練習したいんですけど校庭使つて良いですかね？」

「ああ残つても良いが個性使うなら程々にしとけよ。あと6時には帰れ。」

「ありがとうございます。失礼します。」

「磁場、放課後いいって？」

「ああ6時頃までならいいってよ。」

「聞いてみるもんだな！なあみんな放課後残つて体育祭に向けて練習しねえか！」

切島がクラスみんなに放課後の練習を誘いかける。一緒に残る事になったのは緑谷、飯田、峰田、麗日、芦戸、耳郎、八百万と鉄也、上鳴、切島の10人。5・6時間目、HRを終わらせ体操着に着替えグラウンドへ向かう。

「でも体育祭に向けての練習なんて何すりゃいいんだ？」

「何つてお前あれだよ… 練習すんだよ。」

「磁場もしかして当てもなく練習しようなんて言ったのか？」

「…」

「凶星かよ?!? じゃどうすんだおい？」

「体育祭でなんの競技をやるか分からないなら自分の苦手分野を反復練習でやるのが得

策じゃないか？」

「おおさすがクラス委員長！磁場と違っている案だすな！」

「フツ、クラスメイトを導くのもクラス委員長の役目だからな！では各々分かれて練習を始めよう！」ビシッ

（俺の苦手分野か……もつと砂鉄を器用に細かく手みために操れたらもつとできる事が増えそうだな。それと動きながらの砂鉄の操作だな。）

「なあ八百万ちよつといいか？」

「どうしましたの？」

「積み木を作つて欲しいんだけどいいか？」

「わかりました。ちよつと待つててください。……出来ましたわ。けれどこれでどの様な練習を？」

「砂鉄を手みために操れたらいいかなって思つてその積み木を先ずは積んでみようかなって。八百万はなにすんだ？」

「私は創造するまでに少して時間が掛かってしまうのでその時間短縮を。」

「確かに色んなものを早く作れたら大分いいな。まあお互い頑張ろうや。」

「上鳴は何練習すんの？」

「そーだなあんま考えてなかったけど放電した雷を操れたら強えかなって。耳郎はなにすんだ？」

「私はイヤホンジャックの力を上げようかなって。」

「ふーん。」

「何それ。興味なさそうな返事。」

「て訳じゃないけどな。さつきから中々放電しても操れなくてさ。」バリバリバリ！

前方に放電するもそのまま操れず消えてしまう。

「そんだけやって無理なら無理なんじゃないの？」

「やっぱり無理なのかな。オラ！オラ！曲がれ曲がれ！」バリバリバリバリ！

すると放電した雷が急に曲がり始めた。

「やった曲がったぞ！」

「ウソ！凄いやん上鳴！」

しかし曲がついていった雷は磁場の方へと吸い込まれる様に向かっていた。磁場はそれに気付かず……

「うーん、結構難しいnあ… あ… あ… ああああああ…？」バリバリバリ！

「磁場さん！！？」

「は！！？磁場に当たっちゃまった！！？」

「な、なんで？もしかして上鳴操り損ねだでしょ？」

「確かに曲がれつつ念じだけとまさか本当に曲がるなんて…。」

「磁場さん！大丈夫ですか！！？」ユツサユツサ

「」

「… どうすんのよ上鳴。」

「と、とりあえず磁場をどうにかしないと！」

「… う… う、なんだ。急に雷に打たれたみたいな痛みが。」

「磁場さん大丈夫ですか？」

「上鳴が放電した雷があんたの方に吸い込まれていったんだよ。」

「は？上鳴の？そうかそうか…。」

フラフラしながらゆっくりと磁場が立ち上がる。雷のせいで身体が痺れているのか少し無理をして体を起こす。そして…

「じ、磁場？大丈夫か？… いだだだだだだだ！」

アイアンクローをお見舞いする。

「全然大丈夫じゃねえよオイ。それでなんで俺に電撃浴びせたのかな上鳴君？」ギリギリ

「痛い痛い痛いって！俺もよく分かんねえんだよ！急に曲がったと思っただらお前に当たったんだって！悪かったって、だから離してくれよ！」

「よく分かんない？お前の個性だろうがよ。あ？俺はもつと痛かったぞ。」

「本当にわかんねえんだって！マジで頭割れるって！」

「どうせ割れても中身ねえから大丈夫だ。」

「大丈夫ぢやねえよ!!？」

「た、多分これのせいじゃないかな？」

上鳴の叫び声でうるさい中緑谷が入ってきて鉄也は力を緩めた。その隙に上鳴は鉄也から離れ頭を摩っている。緑谷はさつきまで鉄也が練習していた積み木を指差す。

「もしかして砂鉄が避雷針の役目をして？」

「うん。上鳴君が雷を曲げたんじゃないやなくて磁場君が操ってた砂鉄に引き寄せられたんじゃないかな？」

「成る程。確かにその可能性が高いな。」

「ホ、ホラ俺のせいじゃ無いだろ！」

「イヤイヤ、だけど上鳴の放電が当たったんだから100%悪く無い訳じゃないでしょ。」

「スペシャルランチ定食で許してやるよ上鳴。」

「は!? さつきアイアンクローかましたじゃねえか、それでチャラだろ!?」

「スペシャルランチ定食な。」

「だからさつきのアイアンクローでチャラだろ! それにスペシャルランチ定食って普通の定食の倍以上もす「スペシャル! ランチ! 定食な!」

「... あーもう! 分かったよ!」

「まあそれで許してくれるならいいんじゃない。磁場は雷喰らってあんたはアイアンクローで済んだんだからさ。」

「お前あのアイアンクロー喰らって無いからそんな事言えんだぞ。あれマジでヤバイかな、その上スペシャルランチ定食だぞ!」

「しかしこれからは磁場君と上鳴君は距離を取って練習した方が良さそうだな。」

「当たり前だ。二度とあんな思いしてたまるかよ。」

「まあ今回は運が悪かったんだって。」

「あ、もう6時になるよ。」

「何!? では皆速やかに帰宅の支度をするんだ!」ピシバシッ

「飯田はどこで何しても委員長なんだな。」

その日の練習はこれで終わりにし皆家へと帰った。放課後の練習はそれから体育祭の前日まで続き体育祭が近づくにつれ皆はクラスメイトながらライバルとしても見ていくようになっていた。そして…

日！

雄英高校体育祭当

第10話 雄英高校体育祭開催!!?

ピピピピピピ！バン！無機質な機会音が室内に響き渡る。重たいまぶたと身体を起こしまだ完全に目覚めてない頭で『今日』が何の日かを思い出す。

(そっか・・・今日体育祭か。)

「今日はとうとう雄英体育祭だ！頑張るぞ！」などと特に張り切る様子も無くいつも通りノソノソと制服へ着替えリビングへと向かう。

「おはよ。」

「おはよー、今日の体育祭頑張んなよ！ちゃんと録画してお父さんと二人で見てるんだからビシツとしてなさいよ？ハイ朝ごはん。弁当も今日の為に元気が出るもんいっぱい入ってるからね！」

「・・・またカツ系なんだ。」

「今日はカツサンドだから丼よりはいいでしょ。さつさと食べな。」

「いただきます。」

母の気合い注入朝食は食べ終え歯を磨くと支度を終えて玄関へと向かう。

「絶対に1位取ってきて帰ってきな！」バシツ！

「痛つ。分かってるよ。1位取ってくるからご馳走作つといて待っててよ。行ってきます。」

「いつてらっしやい！」

入学式の日の朝を思い出した。母はいつも自分に元氣と勇氣をやや強めに背中から与えてくれた。これ程自信が溢れるおまじないは無いだろう。鉄也の目には絶対的な自信に満ちていた。

「いいかお前ら、前にも行ったが雄英体育祭は年に一回しか無い自分をプロに見てもらおう大事な場だ。恥ずかしい所は見せるなよ？じや更衣室で着替えて時間まで待機しろ。」

朝のHRが終わると男女で別れ更衣室へと向かった。

「とうとうこれから体育祭だなく。でも出るからには1位を狙うぜ！」

「確かに1位は取りたいけどうちのクラスには才能マンがいるからな。」

「確かに轟は行くところまで行くだろうな。爆豪もいい個性持つてるからな。1位目指すなら彼奴らとも当たるだろうな。」

「いやいやお前も十分才能マンだろ磁場。」

「え？俺も？」

「だって屋内戦闘訓練であの轟を負かすなんてお前も十分強いもんな。」

「それに峰田から聞いたけどお前USJで身を挺して峰田達を助けたんだろ？それ聞いた時お前えのこと『漢』だって思ったしな。」

「そうそうお前もA組トップ3の一人だかんな。」

「いやいやそんなんじゃないって。」ニヤニヤ

「…ニヤニヤしながら否定すんなよ。」

「緑谷、お前に勝つぞ。」

「…！」

緊張感がありながらもある程度に賑わっていた更衣室が轟が緑谷に向けた一言でしずまりかえった。

「おお？？クラス最強が宣戦布告か！？」

「なんかいつも以上にピリピリしてんな轟。怖い怖い。」

「急にどうした轟！？体育祭直前にやめろって…！」

「仲良しごっこじゃねえんだ何だっていいだろ。それに磁場。お前もだ。そうやってヘラヘラしてられんのも今のうちだぞ。」

「だからやめろって轟…！」

「… 本当に怖いな。確かにヘラヘラしてたかもしんねえけどさ…」

「お、おい。磁場まで…」

切島の忠告を振り払い轟を挑発するかのようになら席を立ち轟へ振り返り目の前へ立つ。

「俺だつて負ける気はねえぞ?」

さつきまでとは違い強い執念を持った目で轟をみる。

「それにクラスのみんな、他の科も同じに決まつてるだろ? 一つばっか見てると見てないものに足元すくわれるぞ轟。」

控え室に入場のアナウンスが流れた。各自それぞれの思いを胸に抱き体育祭の会場へと進んでいく。

「選手宣誓!!?」ピシャン!

雄英高校一年生が全員集まり今年の一年の主審は18禁ヒーロー『ミッドナイト』が務める。

「流石ミッドナイト。こういう場でもあの過激なコスチュームなんだな。」

「でもミッドナイトって『18禁ヒーロー』って呼ばれてんに学校いいの?」

「いいのよ！それより静かにしなさい！選手代表。1—A爆豪勝己！」

体育祭で選手宣誓に選ばれる生徒は雄英高校の入試試験で1位通過したものが行く。なので選手代表に選ばれた爆豪は入試試験1位通過ということだ。

「爆豪あんなヤンキーなのに実技試験ならわかるけど筆記もいいのかよ。見かけに寄らずつてのはこの事だな。」

「オイ！聞こえてんぞクソ砂鉄野郎！」

「しかも地獄耳かよ。」

「本当才能マンやだ。」

「…せんせー」

（うわあ、すげえ棒読みでやる気無さそうだな。けどいくらあの爆豪でも雄英体育祭だから棒読みながらもちやんとした事は言うよな…）

「おれが1位になる。」

（うつわあ。やりやがったよ爆豪の奴。）

あまりに身勝手な選手宣誓に他の生徒たちの反感をかいブーイングが飛び交う。しかし爆豪はそのブーイングを気にもせずさらには親指を立て首の前で横に振りさらにブーイングは多さを増した。そしてミッドナイトから体育祭の第1種目が発表される。宙に映し出されたモニターはルーレットが回るかのようにして『ドウルル！』と

焦らすかのように音楽まで鳴っている。そして映し出された第1種目は…

『障害物競走』 バアン！

「計1ークラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外周約4km！我が校は自由さが売り文句！コースさえ守れば《何をしたらって》構わないわ！」

（障害物競走！いきなり俺に有利な種目だな！機動力では飯田の方があるけど個性の自由度なら俺の方が上だ。けど他クラスの個性が分からないから注意しないと。）

全クラスがスタジアムの出口まで集まると大きなゲートが音を立てて開き始めた。雄英高校体育祭の大事な第1種目。『第1種目』という事からおそらくここで上位をキープすれば次の第2種目では少からずのメリツトはあるのだろう。中位でゴールし他の生徒の個性を観察するという手もあるだろう。多分頭のいい生徒ならそう言う考えを持っているかもしれない。しかしその逆。絶対的な自信のある生徒や向上心のある生徒は他なのどお構いなくにこの予選種目でも1位を狙うだろう。鉄也の頭の中にも前者の考えも浮かんだが朝の母との約束を思い出した。『絶対に1位とって帰ってきな。』

（そうだ。1位取ってきて帰るって約束したもんな。だったら他の奴の個性なんて気にせずに俺が狙うのは…）

ゲートについている信号が赤からスタートを知らせる青へと変わった。

『スター………ト!!?』

「1位しかないだろ!」

青に変わった瞬間全生徒が一斉にスタジアム出口へ走り出した。しかし出口と言ってもスタジアムの一部に穴が空いたトンネルの様な出口に11クラス。200人以上の生徒がそこに一気に突っ込んだらどうなるか…:

「せつま!すでにここで厳選されんのか!」

(このすし詰め状態から抜けないと。けどどうすれば…)

このスタートを地点の厳選から抜け出す為辺りを見渡す。

(つて言っても前後左右抜け道がない!…:。そうか!前後左右がダメなら『上』を行けば!)

トンネルの天井を見上げ個性を発動する。すると天井に引き寄せられるように天井にへばりつく。そこから一人だけ重力が逆さに働いているかのように天井を走り抜ける。天井に上がった瞬間トンネル内が急に冷気に包まれた。下を見ると。トンネルの床が凍結しており生徒たちの足を止めていた。

「危ねえ?!?轟のやつか!」

トンネルを抜け地面に着くと少し先に轟が走っているのが見えた。鉄也がトンネルを抜けた少し後から轟の水結を避けた生徒が次々とトンネルから出てきた。トンネル

を抜け少し走ると地鳴りが聞こえてきた。ズウン！ズウン！と何時ぞやの入試試験で聞いたような巨大なものが歩くような音。

「…まじかよ。」

そこには入試試験で色々とお世話になった大型仮想敵が『複数体』いた。少し前方にいる轟はそんなのお構いなしに地面から腕を振り上げ大型を凍らせた。とつきの判断に少し感心していたがそんな時間はない。自分も個性を発動させ砂鉄を集める。

（今回は倒す必要はない。こいつはデカさだけでスピードは亀並みだ！）

何体もの大型仮想敵の巨大な足が上から来るが今の鉄也には関係ない。砂鉄のレールの上を滑る。大型仮想敵は鉄也を捕らえきれずただ地面を踏むだけだ。いくら強力な個性でも今は競争。機動力が無い轟に対しクラスでもトップクラスの機動力を持つ鉄也。轟の少し後方にいたがあつという間に追いついた。

「じゃーな轟！」

「チツ！本当厄介な個性だ。」

『オオー！！？ここで1位の轟を抜いて磁場がトップだあー！』

トップが入れ替わる歓声が湧き上がる。鉄也が轟を抜いてすぐつぎの難関。《綱渡り》。しかし雄英がただの綱渡りを出すはずもなく50m程の綱が橋の様にいくつも掛かっておりさらに下は暗くなつて見えない。だが鉄也にはそんなのや関係無い。鉄也

の個性『磁力』はその汎用性の広さが売りだ。

「こんなの障害物にならねえな！」

いつもの移動法と変わらない。綱に砂鉄を纏わせその上を滑る。いつも通りのやり方でトップを狙える。

『磁場が止まらない止まらない！一体なんなんだあの個性は——？！』

轟は自分の個性、身体能力、判断力には自信があった。それはすでにプロヒーローも顔負けレベル。その自信は雄英に来ても変わらなと思っていた。しかし上には上がいる。屋内戦闘訓練で轟は初めて敗北した。自分の個性が相手に割れていたとしても負けるとは思わなかった。だが油断はしてなかった。相手の個性は身体測定テストで2位の記録を出している。轟の個性『半燃半冷』もかなり強力な個性だが汎用性にかける。その点磁場の個性は汎用性に優れていてかなり強力な個性だ。しかし轟は負けるわけにはいかない。クソ親父に右だけでも昇りつめられる事を証明する為。親父の因縁の相手のオールマイトと何らかの繋がりのある緑谷に勝つ為。そして屋内戦闘訓練での磁場による敗北のリベンジの為。その為にも轟は負けられない。

轟が磁場に抜かされ数分後次の障害《綱渡り》。先の方には磁場が既に次の島へたど

り着こうとしている。しかし轟の個性ではここから磁場に直接妨害が出来ない。(どうする。このままじゃ差は開くばかり…。多分この下は見えないが落ちてもいい様になにか仕組みがしてあるだろな。だったら…)。

(このまま行けば余裕で1位いけるぞ！)

後ろの方に何人か生徒が見えるが差はかなり開いており綱を渡っているの生徒は鉄也ただ一人だけ。しかし余裕は持つてもゆだんはしない。緊張感を保ちつつあと縄を半分程行ったところで急に違和感を感じた。さっきまで波打っていた縄に違和感を感じ後ろを向くと縄が凍りながら鉄也に迫ってきている。氷結がすぐそこまで来ていて間に合わず上へと飛ぶが急な事でその氷結に砂鉄も殆ど巻き込まれ殆ど凍らされた。飛んでいる間際縄のスタートを見ると轟が縄を氷結させていた。さらに凍っている縄を割って谷底へと落とした。

「あいつ！」

着地するものがなく鉄也はそのまま凍った縄と一緒に谷底へと落ちていった。

『オオー！ツト!? 轟が磁場へ妨害！磁場はそのまま谷底へダー！ダー！イブ！磁場に容赦無いぞ轟い！』

第11話 予選通過！

雄英体育祭は今は無きオリンピックピックに代わる行事と言っても過言ではない。故にその様子はTVによって全国中継されている。

「ちよつと！幾ら何でもあんな谷底に落とすのは反則でしょ！それにあんな高さから落ちたら大怪我がじゃ…」

鉄也の母恭子は轟の妨害によって谷底へと落ちた鉄也の心配をしていた。

「二応ルールでは何をしてもいいって言ってたし反則じゃないしね。それに落ちても大丈夫なように何かしらの事はしてると思うよ。」

「うっ、それはそうだけど貴方は鉄也の心配じゃないの？」

「そりゃ心配だけど鉄也なら大丈夫。そうだろ？」

「…： そうね！私達の自慢の息子を信じましょう。」

轟は鉄也を谷底へと落とし『綱渡り』を抜け次の障害、『地雷原』へ着いた。地雷と言っても人を空高く飛ばすだけで死ぬことはない。しかし踏むとかなりの時間はロスして

しまう。地面をよく見ると地雷のある所はわかるが地面に気を取られ全速力で走れない。

(…なるほど。先頭ほど不利になるなこれは。磁場はまだ来てないか…)

「俺には関係ねえ!」

磁場とは違うまた厄介な奴が轟に追いついてきた。爆豪だ。彼も入試一位通過というかなりの力を秘めた警戒すべき一人。

(ここにきて追いついて来やがった。スロースターターか。)

「てめえ戦線布告の相手を間違えてんじゃねえよ!」

『ここで爆豪が轟に追いついたあー!みんな大好きトツプ争いだ燃えるぜえ!』

轟と爆豪が周りとかかなりの差をつけトツプ争いをしている。片方がリードするともう片方が邪魔をし入れ替わる。それを繰り返していると二人のはるか後方からずまずましい爆音と共に緑谷が爆風に乗って二人に向かって来ている。そのまま緑谷は二人の頭上を通り過ぎていった。

『ここでもさかの緑谷が二人を抜いたあー!?!?』

「緑谷?!?」

「デクう?!?」

(勢いすごつ!てか着地考えてなかった!)

急に割って入ってきた緑谷に抜かれまいと轟と爆豪も距離を詰めてくる。

(どうする!このまま着地したらまた追い越すのは絶対無理!だけどここでワンフォーオールは使えない。どうする、考えろ!)

ここでワンフォーオールを使えば次の競技に支障が出る。しかしこのまま着地をすれば二人に抜かれ今後二人の前に立つことは出来ない。一瞬の間に頭をフル回転させるが案が出てこない。着地まであと少し。途方にくれていると。

「轟いいいいいいいい!」

「クソっ、磁場まで!」

『ココで谷底に落ちていった磁場が戻ってきたー!あ?けどなんであいつ地面を掘りながら進んでんだ?』

まるで鬼の形相で磁場は轟のいるトップ勢へと距離を詰めていく。その最中で緑谷が地面を掘り地雷を集めているのを見て鉄也も真似をした。砂鉄をシヨベルカーのようにし地面を掘りながら轟達へと向かい追いかける。

「ヤっっきの仕返しだあ!」

轟達と10mほど距離を詰めたところで地面に埋まつてる砂鉄を轟達の方へと掘りあげる。すると地面に埋まっていたかなりの量の地雷が轟達めがけて降ってきた。

「あいつ!」

「馬鹿か砂鉄野郎!!?」

「磁場君!!?」

ドドドドドドドドドドドドドドドドオオオオオオオン!!!

緑谷の時よりもすぎましい爆音を鳴らし先頭組の一体が大爆発した。

『緑谷の次は磁場が大爆発うー!!? 一体どうなってんだおまえのクラスは!』

『俺に聞くな』

『次々と大爆発が起きた波乱の地雷原! 序盤からトップの入れ替えりの繰り返し! 誰が予想できた!!? そして1番にスタジアムへ帰ってきたのは… 緑谷出久だあー! そして2位は磁場だあー!』

「あー! 緑谷に先越された!」

結果磁場は2位。轟と爆豪は3位。4位とゴールし他の生徒もゴールした後障害物競走は終わった。上位42名までがが予選通過とし第2種目への参加権を得る。

(危なかった。あれが無かったら絶対に二人に抜かされてた。)

緑谷はゴールする前。大爆発で轟達を抜かした時を思い出した。

—————

(勢いすごつ!てか着地考えてなかった!)

一先ずは二人を抜くことしかかんがえず着地以降の事は考えてなかった。一時的には轟達を抜いたものの失速し空いた距離が徐々に狭くなつていく。

(どうする!このまま着地したらまた追い越すのは絶対無理!ただどこでワンフオーオールは使えない。どうする、考える!)

「轟いいいいいいいい!」

「磁場君!?」

緑谷は宙返りの状態で鉄也が自分たちに向けて大量の地雷を投げてきたのが見えた。しかし今の緑谷にはこれを回避する手立ては無く鉄也の地雷の雨を喰らうしかなかった。しかしこの地雷の雨が緑谷を一位にする助けとなった。差が追い詰められたがまだ少しの距離があつた轟達と緑谷間にちようど鉄也が掘つた地雷が降つてきた。その爆風で緑谷は加速し轟、爆豪は吹つ飛びさらに差をつけられ緑谷は一位となった。

—————
(あそこで磁場君の妨害がなかったら絶対に抜かされてた。)

「そして次からいよいよ本戦よ!!?ここからは取材陣も白熱してくるわ!キバリなさい!!?!さーて次は第2種目よ!」ドウルルル!

『騎馬戦』バアーン!

「へえー騎馬戦か。」

「参加者は2〜4人でチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ! 基本ルールは騎馬戦と同じだけど一つだけ違うのが先程の結果にしたがい各自にポイントが振り当てられることー!」

「て事は組む騎馬をよってポイントも変わってくんのか。」

「入試の時みてえなポイント方式か。分かりやすいな。」

「あんたら私が喋ってるのにすぐ言うね!!? ええそうよ! 与えられるポイントは下から5pずつ! 42位が5p。41が10pと上がって1位に与えられるp... 1000万p!!?」

「はあ!!? い、1000万!!?」

「ええ、上を行くものには更なる受難を。雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ。これぞ"Plus Ultra" 《更に向こうへ》!」

ルールは騎馬戦とほぼ同じ。制限時間15分。各自に振り当てられたpの合計が騎馬のpになり騎手は合計pのハチマキを付ける。とったハチマキひ首から上にまく。そして通常の騎馬戦とは違うルール。それはハチマキを取られても騎馬が崩れても失格にならない。という事は10〜12組がずっとフィールドに残っており何時でも気

が抜けない状況ということだ。それにここは雄英高校。個性の発動もOK。だがあくまでもこれは騎馬戦。悪質な崩し目的は即退場となる。

「それじゃ今から15分チーム決めの交渉スタートよ！」

「は？15分？」

（どの個性と組んで作戦とかを考えんのに15分は短いだろ！…けどあの二人を取れば…）

「磁場！俺となろうぜ！」

「ぼくと組もう！」

「私と組もう！」

誰と組むか悩んでいるとクラスメイト達が鉄也と組もうと群がって来た。しかし鉄也には自分の知ってる限りで相性のいい生徒の目星はついている。

「あ、ありがとう。でも組みたい奴は決まってるんだ。だからみんなとは組めないな。」
「えーマジかよ。その組みたい奴って誰なんだ？」

「詳しいことは消えないけど上鳴と八百万だ。だからみんなみんなとは…。」

「その二人なら轟に取られてるぞ。」

「え？」

「ホラあそこ。」 m 9

」

「な? だから俺と組もう...」

(また轟か! なんてこうも俺の邪魔しやがるあいつ! でもどうするあの二人以外で俺と相性のいいやつは...。 トントン。 後ろから肩を叩かれた。 十中八九騎馬組みだろう。 本来取りたい奴は取られたなら潔く諦め次の仲間を見つけた方が賢明だ。 気持ちを切り替え背後を振り返るとそこには...)

第12話 第二種目 騎馬戦

「緑谷?」

後ろを振り向くとそこには予選を一位で通過した緑谷がいた。

「磁場君ちよつといいかな?」

「ああ、どうした?… って聞くのはまあこの状況なら何の話かなんてわかるか。」

「分かっていると思うけど単刀直入に言うね。磁場君に僕達のチームに入って欲しいんだ。」

今は騎馬戦のチームを決める作戦会議時間。そんな時に予選を2位で通過した鉄也に声をかける理由は一つしかない。鉄也をチームに入れて戦力の強化。それ自身鉄也も分かっていたがまさか予選を1位で通過した緑谷から声をかけられるなんて思わなかった。普通ならライバルである鉄也はこの騎馬戦で倒しておきたい生徒の一人。それを自分のチームに加えようとするのは予想外で顔には出さないが内心驚いていた。

「いいのか緑谷? 1位と2位じゃポイントでは圧倒的差はあるけどお前からしたら俺は負かしておきたい奴の一人じゃ無いのか?」

「普通ならそうなんだけど。今の僕達のチームには足りないものを磁場君は持っている

んだ。だからそんな君を『敵』としてじゃなくて『味方』として一緒に戦いたいんだ。」

正直鉄也的には美味しい話だ。緑谷は個性を使うと反動で大ダメージを負うがその威力はクラスでもピカ1。さらに土壇場での頭の回転が速い。その緑谷が作るチームに入れば1位も1十分に狙えると思う。しかし鉄也にも自分の考えがある。

「でも緑谷の作戦も知らずにチームにはあるのは緑谷には得でも俺にはリスクでしかないぞ?。」

「それは分かってるよ。僕も自分の味方になって欲しい人に何も言わないって言うのはやだからね。」

そこから緑谷は『まだ』味方になつていない鉄也に自分のチームの構成と作戦を教え てくれた。正直鉄也は緑谷が作戦の内容を話さなかったら味方になるつもりは無かった。しかし緑谷は全てを話してくれた。けれど鉄也は気になることが一つあった。

「作戦は分かかった。けど一ついいか?俺が作戦を聞いた上でお前の味方につかないって考えはなかったのか?。」

「無かつたって言ったら嘘になるけどUSJの時の磁場君をみて思ったんだ。磁場君ならそんなことは絶対にしないうて。」

「.:. そこまで言われたら断れないな。分かった緑谷。お前のチームに入るよ。」

「うん！ありがと磁場君！」

「よろしくな緑谷。それと緑谷の作戦を聞いて俺も一つ思いついたんだけど…」

『15分のチーム決め兼作戦会議も終わって12組の騎馬が並び立ったぞ！さあ上げてけ聞の声!!？血で血を洗う雄英の合戦が今狼煙をあげる！』

「麗日さん！発目さん！磁場君！よろしく！」

「うん！」「フフフフ！」「ああ！」

『さあ！準備はいいかなんて今更きかねえぞ！行くぜ残虐バトルロワイアル…』

2. 1. スターーーートオ!!？』

「実質その争奪戦だ！」

予想通り周りの組は獲ってしまえば1位通過確実の1000万P目掛けて鉄也達に攻めてくる。

「あの騎馬、前方の騎馬の奴B組の推薦だぞ！どうする緑谷!!？」

「もちろん逃げの一手！」

「けっ！逃すか！」

おそろくB組の推薦の奴の個性だろう。地面が沼の様に変化し足が沈み始めた。

「何これ!??地面が沼みたいに!??」

「多分あいつの個性だ！緑谷！」

「うん！麗日さん発目さん！顔避けて!!?」p

サポート科のへ発目 明 考案のバックバックで沼から抜け出したがただ逃すだけでは終わらず近くにいた耳郎のイヤホンジャックとB組の後ろの騎馬の女子からツルの様なもの空中にいる緑谷たちに追撃してくる。

「磁場君！」

「分かってるよ！」

イヤホンジャックとツルの追撃を鉄也の砂鉄ではたき落とし回避する。

「流石磁場君！やっぱり君の個性は凄いや！」

「当たり前だ！」

「みんな着地するよ！」

「けど凄いな。麗日の個性で麗日以外は重さがないからこんなに軽々動けるなんて。」

「えへへまあね。」

「まてや1000万P！」

「来たよ磁場君！」

「あいよ！」

追いかけて来たB組の騎手目掛けて砂鉄でなぎ払おうとすると金属同士がぶつかる様な高い音がなった。

「そんなのきかねえぞ！」

「なっ！切島と同じ個性か！」

「デクくん！左から障子君が来とるよ！」

「奪い合い？違うぜこれは……一方的な略奪よお！」

「障子君!?一人!?騎馬戦だよ!?？」

「流石に挟まれるのはキツイ！一旦距離を取ろう緑谷！」

「分かった！麗日さん！」

「うん!……あれ!?何これ、取れへん!?？」モギッ!

「それ峰田のじゃねえか！」

「峰田君!?言つたどこから！」

「ここからだよ緑谷や……ズギヤアン！」

「なんだそれ!?まるで戦車じゃねえか！」

「うわあ！」 SWIP!

「流石ね緑谷ちゃん。」ズギヤアン!

「梅雨ちゃんまで!?」

そこには障子の巨体と触手で背中の中にすっぽりと収まった峰田と梅雨ちゃんがいる。巨体を持つ障子と小柄な峰田、梅雨ちゃんがなせる騎手戦車だ。

「ああ!仕方ないけど行くしかない!二人とも顔避けて!」P

峰田のもぎもぎによつてくつ付いたメカを無理矢理使い離脱した為破損してしまつた。

「ベイビーが引き千切れたあ!」

「Pが無くなるよりマシだろ!それよりも...!?緑谷!」

「調子乗ってんじゃねえぞクソが!」BOOM!

「磁場君!」

「全く忙しいな!」

爆豪が騎馬を離れ爆破を使って空中までやって来た。予想外な攻撃だったか爆破音で同じ高さに来る前に対処でき爆破を砂鉄でガードした。

「うぜえなこの砂鉄野郎があ!」

「相変わらず口が悪いな爆豪!」

そのまま次は鉄也が爆豪に向けて二方向から砂鉄でPを取りに行くが急に爆豪が何かに引つ張られ空振りに終わる。

「瀬呂の個性か。厄介だな。」

『おおお!? 騎馬ら離れたぞいいのかアレは!??』

「テクニカルなのでオツケー! けど地面に足ついたらダメだけど。」

「…へえ、地面に足が着かなきゃセーフか。」

既に開始から半分ほど過ぎたがやつぱり1000万Pも狙いに他の組に狙われ続け一息つく間もない。ここで現在の組の持ちPがディスプレイに表示された。

「みてテクくん! 爆豪君がB組の人に…」

「成る程ね。クラスぐるみでの作戦って訳か。どうする緑谷、あの爆豪の様子だとP取られた騎馬に勝つまでこっちに来なさそうだぞ。」

「みんな、少し逃げ切りやすく…」

「そう上手くは行かないみたいだぞ緑谷!」

「…フウー。そうみたいだね。」

鉄也達の目の前に現れたのはA組屈指の強さを持つ轟が率いる騎馬が居た。

「そろそろ奪るぞ。」

「思ったより来るのが早かったな。どうする緑谷。」

「時間はもう半分！足を止めないで！それに仕掛けて来るのは1組だけじゃない！」

轟達の後ろから何組か迫って来るが轟の指示のもと八百万が何かを創造している。

(なんだあれ、シート?… まさか!?)

「緑谷！距離をとるぞ！そしたらすぐに目を塞げ！みんなもできるだけ目をそらすんだ！」

「磁場君!?!」

「早く！」

鉄也は砂鉄を分離させ棒のようにして地面に突き刺して後ろに下がった。その瞬間バリバリ！と電気の音と共に閃光が辺りを包んだ。轟目掛けてやってきた他の組は電撃を食らったが先程刺していた鉄棒が避雷針の役割をし鉄也達までは電撃は届かなかった。

「磁場君どうして電撃が来るって!?!」

「あんな分厚いゴムシートが出て来たからもしやと思つてね。それに上鳴の電撃は俺も色々とあつて対策済みだったんだよ。」

「チツ、磁場の野郎が厄介だな。」

「だつたら思つたよりも逃げやすそうだね！」

「いや、相手が相手だからそう簡単には行かないだろうな。」

「磁場君は上鳴君の電撃をガードしつつ回避をお願い！何としても10000万は持ち続ける！」

『残り時間約1分！轟氷結でフィールドをサシ仕様にしてあつという間に10000万び奪取！……とか思ってたよ五分前までは！緑谷この狭い空間で五分間逃げ切っている！』

(にしても緑谷位置どりがうまいな。飯田の位置をみてこの距離と位置をキープして。このまま何もなきや逃げ切れそうだな。だけど……)

「どうする緑谷。今は逃げ切れてるけどこのままこのフィールドにいる意味もないし隙みてここから抜け出すか？」

「そうだね。上鳴君の電撃は磁場君で防げるしこの距離なら八百万さんの創造も届かない。どこかで隙を作っ「DRRRRRRR!!?」は?」

緑谷も鉄也も話していたものの轟達からは目は離さず気も抜いていかなかった。しかし爆音が鳴り気付くと頭のハチマキが獲らていた。その余りの速さに轟が鉄也達を通り過ぎてからハチマキが獲られたことに気付いた。

「は!!?なんだあの速さ!!?」

「言つたる緑谷くん。君に挑戦すると!!?」

1000万Pからの急な0P。一瞬の出来事に緑谷も焦り急いでPを取り返す。

「突っ込んで!」

「でも突っ込んでしまったらあの創造とやらの範囲に入ってしまうのでは!!?」

「Pの散り方を把握できない!上位に入るならここしかない!」

「: : だったら緑谷!最初に言つた俺の考えを使うぞ!あれなら可能性はある!いいか!」

「時間ももう無い: : お願い磁場君!麗日さん!」

「分かった!行くぞ麗日!!?」

「うん!」

「なんですの今の速さは?!?!」

「飯田今のは…!」

「トルクと回転数を無理矢理上げ爆発力を生んだのだ。反動でしばらくエンストするがな。」

「て事はこの騎馬戦では飯田の個性は使えないのか。でも時間ももう少し。全力で逃げ切るぞ。」

『おおおおおー!?!?!?大つきい!多い!デカイ!なんなんだその規模はー!?!?!』

『ちゃんと実況しろよ。』

「:.. な、なんなんだあの砂鉄の量は?!?!」

「イヤイヤイヤ、こんなの無理だろおー!」

実況につられ緑谷の方を見るとそこには磁場の個性で集められた砂鉄があつた。しかしそこには今までとは量も規模も違い過ぎる程の砂鉄が集められていた。その量に観客も驚き目を丸くしている。

「磁場君はあそこまでの量を操れるのか!?!?」

「こ、これが磁場さんの全力ですの!?!?」

「いや違う。麗日の個性で軽くしてるんだ。にしてもこれは多過ぎるだろ。」

「全力で取り返すぞ緑谷!」

「う、うん!」(まさかこんな凄いななんて思ってた。)

その合図と共に大量の砂鉄が濁流のごとく轟達に迫って来る。飯田の個性が使えない今この砂鉄から抜け出すのは不可能に近い。

「おいおいどうるんだよ轟! こんな量の砂鉄を避けれんのかよ!」

「… 八百万! 何かをこの状況を抜け出せる打開策はないか!?!?」

「わ、私ですか!?!? しかし私なんかの策で…」

「八百万『なんか』じゃなくて八百万『だから』聞いてるんだ! お前はこういう時いい判断が出せると思ってるんだ!」

「… 一つだけありますわ! けれど少々時間が欲しいのでその間は磁場さんの個性に捕まらない様をお願いします!」

「時間稼ぐったって行けんのかよ!?!?」

「やるしかないだろ! そうだろう轟くん!」

「ああ、八百万の策が完成するまで全力で逃げ切るぞ!」

「時間稼ぎなんてさせるかよ！」

大木の様な砂鉄の塊が6つに別れ轟達に迫つて来る。それを轟の氷結で防いだり上鳴の電撃を地面に流し、回避の為に避雷針を作らせ砂鉄の量を減らすが無効なものとならない量で轟を追い詰める。ここで轟と緑谷の騎馬を囲んだ氷のフィールドが仇となつて次は轟達の動きを狭める。

「このフィールドから抜けた方がいいのではないのか！そうすれば他の騎馬もいてある程度は逃げ切りやすくなるぞ！このままでは捕まるのも時間の問題だぞ轟君！」

「自分で作つた有利な状況が逆に相手に有利な状況になつたか。このフィールドから出るぞ！壁を越えなきゃなんねえから着地気を付けろよ！」

「ああ！」「分かつています！」「おうよ！」

迫り来る砂鉄を氷壁で足止めしその隙に広いフィールドへと脱出した。

『さすがにたまたまらず轟チーム広い方のフィールドへ戻つてきたー！しかし緑谷チームは轟チームしかし見えておらず他のチームは気にもしてないぞー！』

『今の緑谷達はOPだからな。それにあの様子だとPの散り方を把握できないんだろ。だから確実な目の前のPを狙つてるんだろ。それに磁場もあの量は上手くは操り切れないんだろ。動きがぎこちないな。』

『しかし広い所に出ても轟チームの不利は変わらず今にも捕まりそうだ！このままでは緑谷チームにPを取られるのも時間の問題かー!!?』

「まだなのか八百万！」

「もう少し、もう少しです！」

「早くしねえとヤベエってコレ!!?」

「追いつかれるぞ！」

「… 出来ました！轟さん合図したらこの金属を氷結して下さい！」

そういうと八百万の腕から大量の金属の塊が作られ地面に落ちていく。その金属が出終わると轟達はその場から離れる。そして撒いた金属の上を砂鉄が通り過ぎる瞬間。

「今です轟さん！あの金属を凍らせて下さい!!?」

「今更そんな氷結なんて！」

八百万の指示通りその金属を凍らせた瞬間、大量にあった鉄也の砂鉄が鉄也の個性のコントロールから外れ一箇所に集まっていった。

「なんだコレ!!?急に何かに引つ張られて!!?」

『おおおおおー!!?緑谷優勢から一転！轟が氷結した途端大量にあった砂鉄が急に集まって全く微動だにしないー!… なんかへまっ〇ろくろすけ〓みたいだなあれw』

『だからちゃんと実況しろよ。にしてもあの金属。もしかして…』

「うおー！すげー八百万!!？ 一体何したんだ!!？」

「あの金属はリニアモーターカーにも使われているニオブ合金ですわ。ニオブ合金は冷やすと電気抵抗が0になって協力的な磁石になりますの。」

「流石だな八百万くん！」

「クソツ！こんなの無理矢理！」

「うぷつ！ごめん磁場くん、私もう無理かも…」

「クソつ。麗日の限界か！」

「まさか八百万さんは麗日さんの許容数がもう持たないことも分かっていて！」

「じゃこのまま逃げ切れば俺たちの…」

「こうなったら最後の作戦だ緑谷！お前が行ってこい！」

「え!!？行つてこいつてどういう… ってええー!!？」

鉄也は自分で操れる砂鉄で緑谷を掴んで轟へ接近させる。

「そんなのありかよ！ずりいだろ！」

「さつき爆豪がやってたのと同じだよ！地面に足が着かなきゃセーフだ！」

「そんなの聞いてないよ磁場君!!？… でもこの手なら!!？」

緑谷を目掛けてくる攻撃も鉄也が操り次々と回避して行く。そのまま緑谷は轟に接

近し頭のハチマキへ手を伸ばした。その瞬間鉄也はUSJ感じたオールマイトの様な迫力を感じた。轟もそれを感じ取り焦ったのか始めて「左」で対応した。しかし緑谷はそれを受け流し轟の首に掛かっている1000万Pであろうのハチマキを獲っていった。

「とつた!とつたあああ!」

「待って下さいそのハチマキ… 違いますか!?!?」

緑谷の手に握られていたハチマキは70P。これだけでは上位4位どころが圏外。それに時間ももう1分を切っている。

「磁場君!もう一回お願い!」

「そんなの分かってる!絶対に獲ってこい!」

残り時間も少なく緑谷だけでなく騎手の鉄也達も轟達に接近し少しでもプレッシャーを掛ける。だがこっちの策も使い果たし有効打も無く時間だけが過ぎていく。

『そろそろ時間だカウント行け!10.9.:.』

「1000万よこせクソがあ!」

カウントダウンが始まると自分達のPを取り返した爆豪チームが只でさえ忙しい時にこちらに接近してきている。

『7.6.5.:.』

「ちよつと砂鉄の人いいですか！」

「なんだこんな時に！」

「だからこそです！」

『… 2. 1.:. TIME UP!!? 早速上位4位を見てみようか! 1位 轟チーム

2位 爆豪チーム 3位 鉄て.:. アレエ!!? オイ!!? 心操チーム』

(心操チーム? 確か鉄哲って奴も結構P持ってたと思つたけど獲られたのか?)

「ごめんみんな。本当に…。」

「デクくんそれが…。」

悲壮感に浸っていると麗日が何か言いたげに発目を指差す。

「いやあまさかあの土壇場でうまく行くとは思わなかつたよ。」

「え? 何のこと?」

「ほら。」

鉄也も麗日同様発目を指差ししている方を見てみるとドヤ顔で仁王立ちしている発目があった。

「フフフフ。やはり私のベイビーは凄いですね! 流石に1000万とは行きませんでしたでしたが持ち点の方を頂きました!」

発目が後ろから取りどしたマジックハンドの様なアームには轟の持ち点であったへ5

19) のハチマキが握られていた。

『そして最後！4位は緑谷チーム！以上4組が最終種目へ進出だああー！』

その瞬間緑谷は壊れた水栓の如く涙をぶちまけ崩れ落ちた。しかしなぜ発目は轟のPを取ることができたのか。それは試合が終わる数秒前…

「ちよつと砂鉄の人いいですか？」

「なんだこんな時に！」

「だからこそです！今から私をあของทีมの後ろへ運んで下さい！」

「運ぶつたつてあんた一人でどうにかできるのか!?？」

「フフ私のベイビーを舐めないで下さい。今ならあの人の隙をつけるかもしれないです！」

「こうなつたらヤケだ！頼んだぞ発目さん！」

「私のベイビーを信じて下さい！」

「まさかあのギリギリの時間にそんな事してたなんて…」

「俺も本当に取つてくるとは思わなかつたよ。」

「言つたでしょう！あなたにもメリツトはあると！」

「まあ何はともあれ最終種目に行けたんだ。一先ず今から昼休憩だし飯食い行こうぜ。」

「そうだね！私お腹減つたよお〜」

「発目さんもお？」

「すみません。私はベイビー達のメンテナンスがあるのでここで！」

「ああじゃ最終種目でな！」

第13話 最終種目 トーナメントガチンコ勝負!

第二種目の騎馬戦が終わり今は昼休憩。体育祭で疲れた身体に燃料〈ご飯〉を入れる為鉄也達A組一同は食堂に来ていた。

「いやー、まさか最後麗日との合わせ技をまさかあんなアツサリ止められるなんて思わなかったな。」

「それな！俺もアレばかりは終わったって思ったもんな。」

「磁場のあの攻撃もすげえ迫力あって凄かったけどあれを止めた八百万もすげえよな！」

「流石推薦入学者だな。やつぱり八百万は取っとくべきだったな。」

「ですが私もあの規模は驚きましたの。轟さん達が時間を稼いでくれなければ今頃私たちは騎馬戦を通過できていませんもの。」

「でもよく緑谷ちゃん達最後の最後で轟ちゃん達からPを奪えたわね。」

「午前中のことを振り返りながら席に着き皆自分の昼食を食べ始める。」

「… 八百万って結構食べるんだな。」

目の前には大盛りカレーにコンソメスープ。大盛りサラダにフルーツの盛り合わせ

をお盆にのせた八百万がカレーを頬張っていた。

「ええ、私の個性は身体の脂質等を分子などに変換しているので蓄えれば蓄えるほど多く創造できますの。」

「へエ〜」

（『なんかうんこみたいだな』『おい磁場！うんこ食ってる時にカレーの話すんなよ！』『磁場！あんたカレーの時にやめてよ！それに上鳴あんたは逆よ！』って事になりそうだから言わないでおこう。）

「じゃ沢山食っても個性使えば太らないのか。本当に八百万の個性は便利だな。」

「はっ！だからヤオモモはもんな発育の暴力ボディーに!?!?」

「暴力? なんのことですか耳郎さん?」

「な、なんもないです:~:」

「て事は自分で造ったもの食ってけば食費が0!?!?~:~: 便利過ぎるな『創造』」

『もうそろそろ昼休憩も終わりだぞ! 会場に集まってこい!』

空腹を満たし万全の状態で最終種目に向け会場へ向かい始める。

「:~: あれ八百万達は? さつきまで一緒だったろ?」

「さあな? 腹の調子でも悪いんじゃないね?」ニヤニヤ

「まあオイラ達だけでも先位に行こうぜ?」ニヤニヤ

「ああ。なんかニヤニヤしてお前からキモいぞ?」

「別にいつも通りだよ。」ニヤニヤ

ニヤついている峰田と上鳴をスルーし会場の席に着くとそこには本場アメリカのから来たチアリーダー達が応援をし盛り上げている。その中の一部に見慣れた者達が混ざっていた。

「:・: なあ切島。気のせいだと思っけどあのチアの格好したのって八百万達だよな?」

「いや気のせいじゃないぞ磁場。」

「A組の女子は何やってだ一体。」

「ひょー」グツb

チアリーダー達の応援も終わり次はいよいよ最終種目。雄英体育祭の締めとなる競技で観客の盛り上がりも最高潮。その中で行われる最後の種目とは。

『最終種目は進出4チーム総勢16人から行われるトーナメント式! 一対一のガチバトルだ!』

「やっぱり今回も最後はサシでのバトルか。」

雄英体育祭の最終種目は形式は違えど最終的にはサシでの戦いになる。すると尾白が組み合わせ決めの途中で急に辞退すると言い始めた。話によると騎馬戦の最中普通科の奴の個性のせいで終盤まで記憶が曖昧らしくそんな状態でこの場上がるのは許

せないらしい。それ聞いた主審ミッドナイトは『そういう青臭い話は好み!』と自分の感性で辞退を認めた。その繰り上がりでB組の2人が穴埋めで入って来た。その後トーナメントの組が決まった。

「俺の一回戦の相手は… 八百万か。なんか色々やり辛いな。」

なんと鉄也の一回戦の相手は同じクラスの八百万。只でさえ相手が女子でやり辛いのと同じクラスとなると更にやり辛い。

「さてどうしたもんかな…。」

「磁場さん。ちよつといいですか?」

「や、八百万。」

「一回戦は私達が当たるようなので一つ言いたいことがありますの。」

「なんだ?」

「先程磁場さんが私との試合がやり辛いと呟いていたのを不本意ながら聞いてしまつて…。」

「い、いやあれは変な意味じゃなくて…。」

「私が仰りたいのは試合では手を抜かないで下さいという事ですわ。先程の尾白さんではないですけど私も磁場さんも競い合つてこの場にいるので手加減されるのは私にとっての侮辱ですわ。」

「…」

「で、ですから私が言いたいのには正々堂々と試合がしたいという…」

「ごめん八百万。八百万が女子で同じクラスの仲間って事で少し引き気味だっけど今のでケジメがついた。わかったよ八百万。俺は全力で八百万に勝ちに行くよ。だからその時が来たらお互い頑張ろう。」

「はい！わたくも負けませんわ！」

「でもその前に体操着に着替えた方がいいんじゃないか？」

「え？こ、これは峰田さんと上鳴さんに騙されて着たのであって私の意思でこんな格好は…」

「分かってるよ…。… だけど結構似合ってるぞその格好。じゃ客席でな。」

「な？！何を言ってますの／＼／！」

『色々やってきましたが結局これだけ！ガチンコ勝負！！？！』

「ふうーいよいよ始まったな。一回戦は緑谷か。相手は普通科のなのか。」
「相手が普通科なら余裕なんじゃねえの？」

「しかし相手はどのような個性が分からないので油断はできませんわ。」

「それに普通科にはヒーロー科に落ちる生徒もいるらしいぞ。」

「でも緑谷にはあの個性があるからチョチョイといけるんじゃないぞ。」

「緑谷の個性は強力な分反動が凄いからな。そのたびにリカバリーガールに治してもらってたら体力尽きてあとあとと厳しいぞ。」

「お前ら緑谷の味方じゃねえのかよ!!?」

「ということは緑谷くんはできるだけ個性は温存しながら勝ち続けなければいけないのか。」

「デクくん頑張れー!!?」

『そんじや早速始めようか!!? レディイイイイイSTART!!?』

「緑谷はどう仕掛けるか:..? どうした緑谷? 叫んで走り出したと思っいたら急に止まりやがって。」

『緑谷完全停止!!? ビクともしねえけど心操の個性か!!?』

「デクくん!!?」

「一体どうしたんだ緑谷くん!!?」

「…相手の動きを止める個性か?」

『さらに緑谷振り返って場外に向かって歩き出したー! 良く分かんがこのまま場外に出て終わってしまうのかー!?』

「デクくん引き返してー!」

「このままではない場外だぞ! 本当にどうしたんだ緑谷くんは!?」

「足は動いてるのに思考は働いてない…。もしかしてあいつの個性『洗脳』か?」

「せ、洗脳!?? それが本当なら緑谷に勝ち目ねえじゃん!?」

「でもいつ緑谷さんは彼の個性にかかったんでしようか?」

「さすがにそこまでは分からないけど試合の前に何か話してたから〈彼奴と喋る〉とか〈特定のワード言ったら〉とかじゃないかな。まああの洗脳解かないとこのまま場外で負けるぞ。」

「デクくーんーん!」

後一步で場外と言うところで急に緑谷から突風が吹いの様なものが吹いた。すると場外へ進んでいた緑谷の足が踏み止まり意識を取り戻した様に見えた。

「な、なんだ急に!?」

「もしかして洗脳が解けたのか!?」

「凄いな。個性を暴発させて洗脳解くなんて。」

「でもまた洗脳食らったら意味ないぞ！」

「多分それないな。」

「なんで言い切れんだ？」

「おそらくまた洗脳させられるのならもう既に洗脳にかかってもおかしくないですわ。今の緑谷さんは正常に見えることから洗脳は回数制限があるか洗脳に掛かる条件を満たしていない。先程の磁場さんの仮設が正しければ緑谷さんはこの試合では喋る事がないでしょう。・・・と言う事ですわよね磁場さん。」

「・・・おっしゃる通りです。だけど緑谷も個性の温存があるから多分個性を使わないで勝たないところが厳しいからな。」

鉄也の予想通り緑谷は心操とは個性を使わずに取っ組み合いをした。掴み流され殴り殴られお互い引かずに掴みあっていると緑谷が待っていたかの様に心操の腕を掴み背負い投げで心操を場外へ追いやった。

「なんとか勝てたな緑谷くん。しかしどうやってあの洗脳を解いたのだろうか。」

「それにしても洗脳なんて凄い個性だね。あれで普通科なんて勿体ないのに・・・」

「まああの試験内容じゃ自分じゃPは取れないからな。仕方ない所はあるけどヒーロー科に編入して来てもおかしくないな。」

「そして次試合は・・・」

『そして次の対戦は轟対瀬呂！同じヒーロー科同士の試合だ!!？それじゃレディイイイSTART!!？』

轟はクラスどころかヒーロー科でもトップクラスの実力者だ。このトーナメントで優勝するを目指すならおそらく戦うであろう敵だ。その為にもこの試合で出来るだけ轟の動きを見え置く必要がある。なのだが…。一瞬。ほんの一瞬で勝負が決まった。瀬呂の早業で轟を拘束し場外へ投げつけるが今までで見たことの無い規模での氷結で勝負が決まった。その規模は観客席どころかドームをはみ出すほどの大きさだった。あまりの迫力に観客席どころか実況までも静まり返っていた。

「強力な個性なのは知ってたけどまさかこんなに凄かったのかよ…。」

「さ、流石轟くんだな…。」

主審により勝負が決まったところであの大規模な氷結を左で溶かし届きは二回戦へ駒を進めた。そして試合は進みついに鉄也の番が回って来た。

『第6試合目!!？その便利な個性は騎馬戦で猛威を振るったイケメンボーイ 磁場 鉄

也！そしてこつちも便利な個性で騎馬戦を一位通過の八百万 百！」

「磁場さんさっきの事は覚えてますわよね？」

「分かつてるよ。全力で勝ちに行くから覚悟しろよ八百万！」

「私も全力でいきます！」

『レディイイイイイイSTARR!!?』

（磁場さんの個性は応用の効く強力な個性。けれど砂鉄を集めるのに少し猶予がありません。しかし正面から立ち向かったのでは勝ち目はありません。なのでまずは……）
「行くぞ八百万！」バチバチっ！

鉄也は八百万を拘束し場外へ出し作戦だったため砂鉄を集める。すると八百万は何かをステージの中央へ投げ後ろへ下がる。その瞬間ステージが強力な光に包まれた。

「クソッ！目くらましか!!?」

（目が効かなくなつた次は騎馬戦同様ニオブ合金を使って砂鉄を使えなく……!!?）

「キャッ!!?」グイッ！

ニオブ合金の原子配列を思い浮かべ創造しようとしたとたん横から衝撃が来たと思つたらいつの間にか磁場の操る砂鉄に捕まっていた。

「……流石八百万だ。何かしてくるとは思つてたけどまさか閃光弾とは思わなかつたな。」

「な、なぜ?!? 閃光で目は見えない筈では…。」

「確かにまだ目は見えないけど『ステージから八百万が居なくなった』訳じゃ無いんだ。だったらステージの端から砂鉄を横に振ってやれば捕まえられる。」

「そ、そんな。けれどもまだ!」

「捕まえられればあとはこつちのもんだ!」

八百万を掴んだ砂鉄をそのままステージ外へと持っていく個性を解除する。

「イタツ!」ドサツ

「えーつと、場外って今のことら辺であってんのか?」

「八百万さん場外! 寄って磁場くん二回戦進出!!?」

『八百万場外負けだあ! それにしても八百万を優しく場外へ出すなんて流石イケメンだ!』

「… 完敗ですわ磁場さん。」

「だけどあんなに創造が早いなんて思わなかったよ。」

「放課後の練習の成果が出ましたわ…。磁場さん。勝手にですけど私の分まで頑張ってください。」

「ああ、必ず優勝してくるよ。」

そして一回戦は終わってトーナメントは二回戦へ突入する。

第14話 トーナメント戦 その2

『さあこれで1回戦は一通り終了だ！小休憩挟んだらすぐに2回戦行くぞー！』

1回戦が無事に終わり小休憩に入った磁場はトイレへ向かった。

(ふう無事に2回戦進出か。次の相手は芦戸か。)

「おう2回戦進出だな磁場！」

「切島も2回戦進出おめでと。確か次は爆豪だっけか？」

「ふう、ああ爆豪は強敵だけど負けないぜ！磁場は芦戸だったよな？行けそうか？」

「まあ対策は考えてあるから多分行ける。互いに2回戦勝ったら次当たるな。」

「爆豪の次は磁場も倒してやるから覚悟してしとけよ！」

「俺もそんな時はボッコボコにしてやるからな。」

『小休憩も挟んだし早速始めようか！2回戦1試合目は両者トップクラスの成績 緑谷

対轟 !!?』

おそらくこの試合はトーナメントで注目すべき試合なのは確かだろう。待合室での轟が緑谷にした戦線布告。それが今言葉通り行われようとする。

(緑谷は轟の水結をどう攻略するかが肝だな。)

『START!!』

始まりと同時に轟は緑谷に氷結をした。しかし緑谷も想定済みなのか『個性』を使ったデコピンで氷結を相殺した。だがその反動で恐らく緑谷の指はもう使い物にならないだろう。

「あの二人相性悪過ぎだろ。」

「磁場さんはどちらが勝つと思いますの?」

「多分轟だろうな。今はああやって氷結を防げてるけどその度に緑谷はポロポロになってるしそれを続けたら緑谷の限界がくる。そしたら緑谷の負けだな。」

「しかし本当に緑谷くんの『個性』は不思議だな。まるで『個性』と身体が馴染んでないみたいだ。」

いまこうして喋っている間にも緑谷はダメージを負いながら氷結を相殺し続けている。その度に緑谷に『個性』による余波が観客席まで届いてくる。すると轟が離れての氷結は意味無いと見たのか緑谷に接近してきた。氷結を使い緑谷に近づくと轟。接近してきた所で氷結をするが緑谷はさっきよりも高威力の攻撃で氷結を防ぐ。

「うわっ寒!」

「もう緑谷くんの腕がポロポロでは無いか。このままでは...」

「チツ、轟のやつムカつくな。」

「どうしてですか?」

「あいつこの体育祭で『左側』は全然使っていない。作戦なんか知らないけど氷結しか使わないのは気に入らねえ。」

「…」

「やっぱりこのまま緑谷が負けちゃうのか?」

「もう緑谷ちゃんは戦える状態じゃなさそうね。」

それは誰がどう見ても圧倒的だった。No. 2ヒーローの息子で強力な『個性』判断力などが学生としてのレベルを超えている。恐らくこの試合を見る誰もが轟が圧勝しているように見える。しかし緑谷の目にはまだ闘志が見えている。轟の氷結を既にボロボロの指で相殺する緑谷。そして轟の意図に気付いたのか緑谷は轟や向かって何か言っているが観客席までは届かないけれどこの一言だけははっきりと観客席までとどいた。

「全力でかかって来い!!?」

その叫びが響いた後からボロボロの緑谷は攻勢に出てきた。轟も氷結で反撃するが連続使用の反動か氷結の勢いも弱まってきている。緑谷は使い物にならないだろう左腕を無理やり動かし氷結を破壊して轟に攻撃する。すると観客席から見ても分かるほ

ど轟の右半身が霜焼けの様になり震えている。その間も緑谷は轟に向かって叫び続けている。轟は『個性』による反動と緑谷の叫びによる心の揺れによって初めて膝をついた。何を言っているかは分からないし例え分かつても意味は分からない。けれど緑谷の叫びは轟の心を揺さぶり動かす。それはまるで緑谷が轟の間違いを直す様に見える。…そしてその瞬間はきた。ゴオオオオ!!? 轟を中心にとてつもない炎が上がりその熱は観客席まで届いた。

「… やつとか。」

「と、轟くんが炎を出した!!?」

「どうして今更!!?」

「さつきから緑谷がなんか叫んでたのと関係あんじゃねえの?」

「やつぱりすげえな轟。」ニヤ

轟から湧き出る炎は今まで塞がれていたのが一気に漏れ出すよに出て来ている。これで轟は両方の力を使い全力の状態になった。反して緑谷はボロボロで既に闘える状態ではない。けれども緑谷は全力の轟に引かず立ち向かう。そして決着の瞬間が来た。激しい爆発がステージを中心に起きアリーナ全体を襲った。その余りにもすぎましい衝撃波に観客全員顔を覆った。

「な、なんだ今の爆発!!?」

「やり過ぎだろあいつら!」

「それにしても今の爆発は何なのかしらね?」

「恐らく轟さんの氷結によって冷やされた空気が炎で熱せられて膨張させられて起こったものでわすわ。」

「そ、それよりもどつちが勝ったんだ?!?!」

ステージは蒸気と土煙りで見えないが徐々に晴れていった。そして激しい攻防の末ステージに残っていたのは轟。緑谷は衝撃で飛ばされ場外へ出ていた。

「緑谷くん場外。轟くん三回戦進出!」

全身ボロボロの緑谷はオートロボットが回収しリカバリーガールの元へ運んでいく。轟は対戦前とは違う少し穏やかな顔でステージを去って行った。緑谷が心配になって見にいこうとしたが鉄也の試合が近いので緑谷の事は飯田達に任せ待合室へ向かった。次の試合飯田 対 塩崎は飯田がツルが追い付かない程のスピードで翻弄し塩崎を場外へ追いやって飯田の勝利で終わった。そして鉄也の試合の相手は同じクラスの芦戸。この勝負に勝てば準決勝へ駒を進めベスト3入りが決定する。

「よろしくね磁場くん!全力で行くからね!」

「こつちも手加減しねえぞ芦戸?」

『こつちまで全員女子と対戦して来たハーレムボーイ 磁場鉄也!ほして対戦相手は何で

も溶かすピンクレディ 芦戸三奈！それじゃ早速！START！」

芦戸の『個性』は身体から酸性の液体を出すことができる。酸性の濃度が調整できそれを応用してスケートのように滑って移動するなど溶かす以外にも使える『個性』だ。しかし調整出来るとはいえ酸性ということもあり対人では調整が難しい。鉄也は芦戸が人の身体に直接液体を掛けて来ないと読んで真正面から芦戸に向かって走って行った。予想通り芦戸は真正面から向かって来る鉄也に驚き液体を掛けて来る様子はなくどう対処するか考えていて足が止まっている。その間に砂鉄を集め芦戸の両サイドから芦戸を攻める。芦戸も砂鉄ならと液体を掛けるが一瞬で溶ける訳でもなく結局砂鉄に捕まってしまった。そしてそのまま八百万と同じく場外へ持って行来き鉄也が勝利した。

『磁場またも相手を場外にして勝利ー！』

「うー！磁場くん私の『個性』対人には向かないって分かってたでしょ！」

「芦戸の個性は調整が難しそうだったからな。正面突破が一番かなって思ってたな。」

「くやしー！」

『それじゃ早速次の試合も始めようか！』

次の試合は爆豪 対 切島。結果から言うところの対決は爆豪の勝利で終わった。爆豪の『個性』は汗を爆発させるので切島は短期決戦へ持ち込んだが爆豪の爆発ラッシュ

に耐え切れず敗退した。これで爆豪、磁場、轟、飯田のベスト4が揃った。

『これでベスト4が揃った！てか全員A組の生徒じゃねえか！それじゃ早速準決勝始めようか！おつかない顔に派手な個性！爆豪 勝己！紳士で便利な個性 磁場 鉄也！』

「これってある意味A組の最強どうしの対決だよな？どっちが勝つんだ一体。」

「爆豪ちゃんの『個性』は接近向けみたいだし近づかせなければ磁場ちゃんが有利じゃないかしら。」

「でも爆豪も一筋縄じゃいかなさそうだしな。」

「けれどリーチや手数などを見るとやはり磁場さんの方が有利ではないでしょうか。」

「よお爆豪。お互い頑張ろうや。」

「ハッ！瞬殺してやるよクソ砂鉄野郎。」

「本当口悪いなお前。悪口しか言えない呪いでも掛けられてんのか？」

「悪口以外言えるわクソ野郎があ！」

「はいダウト。」

『さあ行くぞ！レディイイイイSTART！』

「死ねやクソ野郎！」BOOOM！

「くそっ、やっぱり近づいて来るか！」

爆発を使い鉄也に近づいて来る爆豪。それを読んでいた鉄也は横へ飛んで回避する。しかし爆豪も鉄也の個性を警戒してか回避をしても鉄也とは距離を開けないようしつこく近づいて来る。恐らく砂鉄を集める時間を与えないつもりだろう。

「しつけえなお前！」

「うるせえ！さつさとふつ飛べや！」

「こうなつたら！」

騎馬戦前に緑谷から爆豪の『個性』や癖などを対策として話してくれた。

へかつちゃん焦ったりすると癖で右の大振りや攻撃してくるから一応頭に入れておいて。それとかつちゃんの『個性』は掌から出る汗がニトロみたいな物質でそれを爆発させてるんだ。＼

（緑谷の話が本当なら焦ったりしたら右の大振りが……）

「大人しく死にやがれ！」

なかなか捕まらない鉄也にイラついたのか緑谷の言っていた通り右の大振りが多くなってきた。徐々に距離を詰められたふりをして大振りが来た瞬間右腕を掴み背負い投げの要領で爆豪を場外へ投げつけた。

「緑谷直伝背負い投げ！」

「なっ！デクの!??… ナメんなクソ野郎が！」

しかし爆豪もこのくらいでは場外へ行かず爆発を使ってステージへ戻って来た。

「やつぱこんなんじやダメか。だけど時間は取れた！」バチバチ

「チツ。デクから聞いてたのか。」

「まあな、ちゃんと成功して良かったよ。さあこつからが本番だ爆豪！」

砂鉄が集まると爆豪を四方八方から捕らえようと襲って来る。しかし爆豪もここま
で残って来た実力者だ。『個性』と身体能力で砂鉄を上手くかわして行く。爆発で砂鉄
を吹き飛ばそうとするがいくら砂鉄とはいえそれが集まればかなりの強度になる。生
半可な爆発では破壊する事は出来ずにこのままでは防戦一方になってしまう。いくら
爆豪がスロースターターだとしてもこのままでは部が悪い。

（チツ、めんどくせえな。このままじゃ近づけねえ。。。？あいつもしかして。。。）

「どうした爆豪！防戦一方じゃねえか！」

「うるせえ今すぐブツ殺してやるから待ってろ！」

「やってしろよ！」

爆豪もエンジンが掛かってきたのか動きにキレが出てきて先程よりも動きに余裕が
出てきた。

（動きが早くなってきた。動けば動く程のキレが増して来るって言うってたのは伊達じゃ
ないな。だけどこのまま距離を保てば勝てる！）

「舐めてんじやねえぞクソが！」

爆豪が一旦距離を開けると地面から腕を振り上げるよに爆発させステージの破片を鉄也へ飛ばして来た。しかしそれ如きでは鉄也も崩れず砂鉄前へ展開して防いでいく。その間も爆豪は爆発し続け攻撃して来る。このまま防ぎ続けでもらちがあかないので上空へ回避して頭上から爆豪へ攻めたせる。

「そんなんじやヤラねえよ！」

「んなもん分かってやってんだクソ野郎が！」

鉄也が空中に來た瞬間爆豪は両腕を振り上げるとそのままステージに向け大爆発を起こした。あまりの衝撃に鉄也も飛ばさせるがどうかステージ内に留まった。しかし爆発による土煙で視界が効かず爆豪が見えない。すると前方から爆発音が鳴るとまたステージの破片が鉄也に襲いかかって来た。しかも爆発で自分の居場所を悟られないよう移動しながらの攻撃で爆豪の居場所が分からない。爆発の度に土煙が上がりお互いに視界が効かない状態での攻防。…だと鉄也は思っていた。

(この状況なら爆豪も目が効かない。攻撃が止んだら横振りで爆豪をぶつ飛ばせば…)。すると爆発が止みステージは土煙が舞い上がっているだけで急に静かになった。

(爆発が止んだ。ここだ！)

爆発が止みガードを解いてステージを一掃する横振りをしようとした途端。

「死ねえ!!?」

「!!?」

お互い視界が効かない状態なのに爆豪はいつの間にか鉄也の後ろに回り込んでいて攻撃体制に入っていた。

『…なんか爆発と土煙でよく見えねえな。』

BOOOOOOOOM!!

『なんだ!!? 土煙の中から磁場が飛び出して来たー!』

『いや、あれは吹き飛ばされだんだろう。』

『それにしてもかなりの高さまで飛んでるぞ! このまま観客席までホームランかー!!?』

「ガハッ!」

爆豪の攻撃を寸前で辛うじ砂鉄で体を覆ったが咄嗟だったのでダメージは殺しきれずに吹っ飛ばされた。それでもこの高さまで飛ばされたという事はガードで防げたのはほんの気持ち程度だった。

「なんか磁場こっち飛んで来てねえか!!?」

「みんな直ちに落下地点から避けるんだ!」

「ていうかあの高さから落ちて平気かよ!!?」

「磁場さん!!?」

観客席まで後少し。誰もが磁場の場外まけ思った瞬間、鉄也の後を追うようにステージから砂鉄が流れるように鉄也の所へ向かっていく。

そして観客席へ落ちる瞬間に鉄也にクッションのように観客席との間に入り場外負けを防いだ。

『おー！磁場ギリギリで留まったー!… てかこれってセーフなのか?』

『『個性』で宙に浮いてる状態なのでセーフ!』

「… おい磁場大丈夫か?」

「じ、磁場さん?」

「あー！いつてえなあ!」 ムクリ

立ち上がり観客席からステージにいる爆豪を見下ろした。こう自分の目で見るとどれだけ自分が飛ばされたかがよくわかる。立つてから数秒鉄也は爆豪を見下ろしていたが砂鉄を移動させまるで筋斗雲に乗る孫悟空のようにステージへ戻っていった。

「チツ、あんなんじやくたばんねえか。」

「… いや十分痛かったよ。ガードが遅れたら気失ってたかもしんねえし。だけどあの状況で俺の居場所が分かったネタがわかんねえな。」

「ハッ！オメエの個性』の弱点なんてちよつと見ればわかんだよクソが!」

「そんなに時間経ってねえのにもうバレたか。さすが入試一位通過のだ。けど俺もあんな派手にやられたんだ。タダやり返すだけじゃつまんねえから倍返しにしてやつから覚悟しとけよ爆豪！」

第15話 衝撃の結末

鉄也が爆豪に吹き飛ばされる少し前…

(チツ。めんどくせえな。このままじゃ近づけねえ…。？あいつもしかして…)

「どうした爆豪！防戦一方じゃねえか！」

「うるせえ今すぐブツ殺してやるから待ってろ！」

「やってみろよ！」

試合が始まって時間が経ちスロースターターである爆豪もそろそろ100%を發揮できる頃だ。しかし鉄也も一筋縄では行かず中々近づけない。けれど先程よりも砂鉄を避けるのに余裕が出来始めた。

(思った通りだ。あいつ砂鉄を操ってるときはあいつ自身は動けねえ。けどまだ近づけねえ…。あと一つ何かあれば。)

「舐めてんじゃねえぞクソがあ！」

爆豪は腕を振り上げるようにステージを爆破させ破片を武器として鉄也へ攻撃を仕掛けた。しかし鉄也は砂鉄を前方に壁のように展開し簡単に塞がれる。

(「?」) ニヤ

だがこの攻撃で爆豪の策は組み上がった。防がれるのは承知で爆豪は爆破を続ける。それにシラを切らせた鉄也は上へ回避し爆豪の頭上から攻めてきた。

(キター！)

「そんなんじやラレねえよ！」

「んなもん分かってやってんだクソ野郎が！」

鉄也が頭上に来た瞬間にステージに向け先程より強目の爆破で鉄也を吹き飛ばす。しかしこの爆破は鉄也を吹き飛ばす為では無く鉄也の視界を塞ぐ為。普通なら爆豪も視界を塞がれていて鉄也の位置を把握できない。だが目がダメなら『耳』で相手の位置を知ればいい。爆豪は予想で鉄也がいるであろう方向に向け爆破させステージの破片を飛ばす。鉄也もこの状況での攻撃を読んでいて前方に壁を展開する。ガガガガガン！だが目で見えないこの状況でも爆豪の攻撃は防がれてしまう。しかし爆豪は『防がれる』のが目的で攻撃を続ける。そう、爆豪は鉄也が爆豪の攻撃を壁でガードした時の音を頼りに鉄也の位置を確認していたのだ。鉄也の位置を確認したら移動しながら攻撃を続け鉄也のへ近づいていく。そして攻撃をやめた頃には既に爆豪は鉄也の後ろを

取っていた。

「死ねえ!!？」 BOOOOOOOOM!!!

（俺が砂鉄を操ってる時は脚が止まるのがバレたか。）

「けど俺だつて自分の弱点をほっとく程バカじゃねえよ！」

すると鉄也の操っている砂鉄の束が6本から2本へと減り始めた。

「てめえ舐めんのか!!？」

「いや全然。むしろさつきよりも本気だよ！」

鉄也は爆豪に向かって走り出すと爆豪に向かって砂鉄の横払いをして来た。それを躲すが鉄也は爆豪に接近しながら次々と砂鉄での攻撃を仕掛ける。しかし先程よりも攻撃の手数が減り、突き入る隙が多くなった。その隙を爆豪は見逃さなかった。

「やっぱ舐めんじゃ…!!？」 ガッ!

隙をついたはずが逆にカウンターを食らった。辛うじてガードしたが体制が崩れ逆
にその隙を鉄也に突かれ横払いで吹き飛ばさせる。

「くそが!!？」

『ワーオ！凄いい反射神経！けどなんで磁場は砂鉄の数を減らしたんだ？』

『多分自分の弱点を克服してる最中だろ。』

そして立て続けに鉄也は爆豪へ接近戦を仕掛ける。砂鉄で左右から攻めて空いたところに自身で攻撃。距離を詰めたがついていた爆豪はまたもや守りに入ってしまった。いる。

「こいつ動きながら!?」

「言つたら!いつまでも弱点はほつとかないって!」

(けど動きながらだと2本が限界か……。それに2本じゃ捕まえきれないし肉弾戦じゃ負かせるのは厳しい。)

「めんどくせえな!」

「お前もな!」

そこからは互い攻めては守り掴んでは投げけるの両者引かず長い攻防が続いた。

「二人ともすげえな。でも磁場の方が若干押してるのか?」

「磁場君は爆豪君の爆破を食らってから磁場君の攻め方が少し変わってきているな。」

「磁場自身も攻撃に参加し始めて爆豪はいまいち攻めきれないな。」

「どっちが負けるか予想が全然つかないわね。」

「お二人の『個性』からして場外はないでしょう。なので降参か気絶かのどちらかではないでしょうか。」

「これはどっちが勝つてもおかしくないね！」

「実力が近い戦いは少しのことのでひっくり返るって聞いたことがある。多分この勝負は少しでも隙ができた方が負けるんじゃないかな。」

お互いに疲弊して来たが鉄也の攻撃で状況はひっくり返った。

(このままじゃキリがない。やっぱり数で押して隙を突く！)

すると鉄也は2本へ減らしてた砂鉄を6本へと戻し再び爆豪へ攻める。時間が経ち爆豪のエンジンも温まって来たが6本同時に来られると中々攻めには出られない。しかし爆豪も簡単には捕まらず未だ攻めには転じられないが逆転のチャンスを伺う。そこで一瞬爆豪は鉄也の方へ視線を向けると先程までいた位置に鉄也の位置が見えない。周囲を探そうとした瞬間急に視界がグルリと周り爆豪が地面にうつ伏せの状態に地面に押さえつけられた。さらに上に乗られた状態で喉を腕で締められた

「ガハツ！いつの間に!?？」

「捕まえたあー！」ギリギリ

「あーあ！離せクソ野郎が！」

「暴れんなー！」ギリギリギリギリ

(や、やべえ。息が……)

首を絞められながらも必死に抵抗するが背中に乗られている上に首まで締められたら十分に酸素は肺へ入らず徐々に爆豪の意識は薄れていく。

俺はここで一番になつてやる！

上に上がりや関係ねえ。

俺が一位になる。

取るのは完膚なきまでの一位なんだよ！

(まだだ……こんなところで負けてらんねえ！)

「クソがあああああああああ!!?」

「さっさと落ちろ！」

「まだだあああああああ！」

爆豪が声を上げるとともに爆豪がステージに爆破をした。至近距離での爆破でダメージを負ったものの磁場の拘束から逃れられた。

「ゴホゴホッ…… 往生際が悪いな爆豪。」

「こんなところで負けてらんねえだよ俺は。」

「あそこで気絶しときゃ良かったって後悔すんぞ?」

「ハッ。俺が勝つんだから後悔なんてしねえよ！」

爆豪が爆破による加速でこちらに向かってくる。鉄也も砂鉄を集め半身になり構える。ここで話が逸れるが今鉄也達がいるステージは爆豪と鉄也の激闘の余波のせいでステージにはヒビ割れや陥没している所などがステージ全体にある。そして先程の爆破で鉄也はステージ端、爆豪はステージ中央部分へ吹き飛んだ。更にこのステージの形状は凸状になっていてステージ内と場外には段差がある。現在鉄也は今全体がヒビ割れた凸状のステージの端に位置する。そのステージ端で半身に構え左足を後ろへ下げた。それによつて鉄也の左足はステージ端ギリギリの所にある。ここでステージ端のヒビ割れた所に重さを掛けるとどうなるだろう？答えはこうだ。

「勝つのは俺「ガラッ!」…だ?」

左足が沈み気付くと自分は場外へ落ちていた。余りにも急な事で何が起こったか磁場は理解出来なかった。

「…は?」

『…あ。』

「…え?」

「…は?」

「…じ、磁場君場外…」

「…え……………?!?」

『な、なんだこの結末はー!??あまりに斜め上過ぎて一瞬理解出来なかつたー!』
「いやいやいや!??これ無しですよね!??ノーカンですよね!??」

「けど左足はステージから出ちやつてるし…」

「て、てめえふざけんなよ!こんなんで勝ったとか俺は認めねえぞ!」

「俺だつてこんなだせえ負け方だよ!無しつて言つて下さいよミッドナイト!」

「でも君だけ特別つて訳もいけないし。実際に左足は場外に出てるでしょ?」

「ぐつ…。確かにそうですけど…」

「この納得の行かない負け方に相澤先生に救済を求めた視線を送るが…」

『……………ハア』

「…マジで?」

「磁場場外。決勝戦進出は爆豪くん!」

「ふざけんな磁場!こんなの認めねえぞ!」ユツサユツサ

「ハハハ、マケタ?コンナダサイマケカタデ?ウソダロ…」ブンブン

第16話 雄英高校体育祭終結！

「」

『死んだような顔ってどんな顔？』と聞かれたらこの顔の事だと説明すれば万人に分かるほど表情が死んでいる。頭の中をフラッシュバックするのは先程の爆豪との準決勝。瓦礫に足を取られ場外負けをした時の映像が何度も頭の中をループする。決して油断はしてなかった。決して不利な状況では無かった。決して負ける気など無かった。それでも接戦をした挙句に負けるのならまだ割り切れる。だがたった一つの事故。いや事故というのにも小さ過ぎる出来事で鉄也は負けた。

自分を鼓舞していた八百万、母との約束が今となつては鉄也の心に塩を塗る。

『それじゃあステージの修復も終わったし準決勝二回戦を始めようか！…え？その前にトイレ休憩だつて？？ナイスタイムング！俺もぶつちやけ我慢の限界だつたんだぜ！』プルプル

『我慢せずにいけよ。』

(…！)

マイクの放送で我に帰る。ここでクヨクヨしてもしょうがないと重い腰を上げ

A組の観客席へと向かう。

~~~~~

「さつきトイレ行く途中で磁場とすれ違ったけど顔が死んでたぞ。」

「いや、誰だつてあんな負け方したら落ち込むだろ。」

「やはり相当落ち込んでいますのね……」

「どうしよ、磁場にあつたらなんて言えばいいか分からないよ私。」

「け、けど負け方はアレだったけどいい勝負だったし……」

「麗日さんそれ磁場君に言ったら絶対ダメだよ……」

「なんか俺胃が痛くなってきた……」

「…… あ、磁場さん。お、お疲れ様です。」

(((?!?!?!)))

「ああ、ありがとう。」

「「「「………」」」」

(き、気まずい?!?!?)

声、顔、動き、全てから『凹んでいる』オーラが出ている鉄也に皆かける声が見

当たらずなんとも重い空気が漂う。この空気をなんとか晴らそうとクラスの盛り上げ担当の上鳴が試みる。

「ど、どうしたんだよ磁場！ 負けたのがそんなに悔しいのかよ！」

アレだろ？ 爆轟の強張った顔で引きつった俺らを笑わそうとワザと場外に出たんだろ？」

(( (?!?) ))

「あんた何最大級の爆弾投げ込んでんのよ！」 ヒソヒソ

「だってこの空気を耐えられなくてよ！」 ヒソヒソ

「だからって言葉選べよお前！ 磁場に殺されるぞ！」 ヒソヒソ

「……」

「あ、これはダメだな上鳴。お前死んだな。」 ヒソヒソ

「逆に何も言わないのが怖いよ……」 ヒソヒソ

「何か磁場さんの頭上に黒い線が見える様ですわ……」 ヒソヒソ

すると鉄也がゆっくりと顔を上げ無理に口角を上げ少し溜めた後。

「はは、そうだな……」

(怒ってくれないのが一番申し訳ない！)

「あら磁場ちゃん戻ってたのね。お疲れ様。」

とてつもなく重い空気の中手洗いから戻ってきた蛙吸が席へと戻ってきた。

「… ああ、情けない結果で終わったけどな。」

「（とうとう自分から降ってきた!?!?）」

「……」

「……」

「（そして何も言わないの!?!?）」

「… そうかしら?」

「え?」

「確かに磁場ちゃんは負けてしまったわ。自分の納得がいく負け方をしなかったかもしない。」

「… っ」

「けれどそれでも磁場ちゃんは頑張ったんでしょ? 精一杯戦った磁場ちゃんを誰も情けないなんて思わないわ。もしそんな磁場ちゃんを情けないって思う人がいたら私が怒ってあげるわよ。」

「!」

死んでいた鉄也の表情が戻ってきた。その顔はまるで絶望の淵で女神にあったかのような顔をしている。



「だからそんなに落ち込まないで磁場ちゃん。大丈夫よ磁場ちゃんカツコよかったもの。ちゃんと見てくれる人は居るはずよ。」

「あ、蛙吸…」

((流石梅雨ちゃん!))

「梅雨ちゃんと呼んで磁場ちゃん。」

「…梅雨…様。」

((『様』?!?))

「…?梅雨『ちゃん』と呼んで磁場ちゃん。」

~~~~~

『さあトイレ休憩も終わったことだし準決勝二回戦行こうかあ!飯田天哉v.s.轟 焦凍!レディイイイイイイ… スタアト!!?』

準決勝二回戦、これで勝った生徒は決勝へと進み爆豪との戦いになる。先程まで果てし無く落ち込んでいた鉄也だが聖母梅雨ちゃんのお陰でメンタルは持ち直した。

「なんだかんだでもう準決勝なんだな。しかしこうもA組の奴が残ってた言うのはクラスメイトとしてなんか鼻が高いな。」

「お前はあいつらの親かよ…。それにしてもこの試合どうなると思う?」

「やっぱり轟じゃね?飯田も弱くは無いらうけど飯田の個性だと轟の氷結に対応出

来なさそうだしな。磁場は？」

「まあ同じ考えだな。飯田の個性は単純に言えば『足が速い』だ。地に足が着いてないといけないのに轟はその地面を伝って攻撃して来るからな。俺や爆豪のみたいに空中機動が出来ない飯田には相性最悪だな。：。けど勝ち目が無いって訳ではないと思うけど。」

「氷結される前にかたをつけるって事か？」

「短期決戦って奴？」

「そ、けどそれは轟もわかっているとと思うから問題なのは…。」

「『レシピプロバースト』をどこで使うか、ですわね。」

「てことは飯田が『レシピプロ』を使った所で勝負が決まるって事か？」

鉄也達が飯田達の戦いを考察していると動きがあった。轟の氷結を飯田が加速を用いた幅跳びで氷結と轟を飛び越えた。それを見逃す轟でも無く着地に合わせ氷結を行う。飯田の足が地面に近づくにつれ氷結も迫ってくる。二人には緊張が走りまるでスローモーションの様に時間が進む。そして飯田が地面に着地した。

(取った！)

轟自身も観客もそう思った。しかし氷結が飯田を捉える瞬間飯田と目が合った。

その目は飯田が轟にこう言っている様に見えた。

『まだだぞ轟君!!?』

「っ!!?」

刹那、着地と共に飯田が轟の視界から消えた。そして轟は根拠もなく反射で身を屈めた。その瞬間に頭上を『ブオンツ』と重いものが高速で通り過ぎる風切り音が聞こえた。その音を捉えた瞬間に頭に強烈な痛みが走った。頭を蹴られたと理解する間もなく次には首根つこを掴まれ引つ張られている。一つ一つ自身に起きた現象を理解する前に次の現象が重なり思考が止まる様だ。一瞬の攻防の入れ替わりからの逆転。観客も『決まったか?』と思い始めた時急に飯田が失速した。

「!!?」ガクンツ

「派手なのばつかしてたからこういうのは抜けてただろ。」パキパキツ

脚を見るとふくらはぎのマフラーの排気口に氷が張っていて穴が塞がれていた。

「な!!?いつ氷結を!!?」

「頭けられた時だ。警戒してたけどやっぱ速えな。」

「ぐうっ!」

すかさず飯田の体を氷結で動きを止め飯田の行動不能により轟の決勝戦進出が決まった。

「一瞬飯田の勝ちか? って思ったけどやっぱ轟かあ。」

「けれど飯田さんも後もう一步でしたわね。」

「個性の相性とかもあるけどさすが飯田だな。…これで決勝戦決まったな。」

「轟と爆豪か、どっちが勝つんだろうな。」

「やっぱ轟じゃね? いくら爆豪でもあの範囲攻撃はきついだろ。なあ磁場?」

「けど爆豪には轟には無い機動力と空中機動があるからな。攻撃範囲では負けるけど機動力では買っている。火力は…轟が左を使い始めたら押し負けるだろうな。まあ俺は機動力も範囲攻撃も火力もあるから爆豪より優位に戦えるけどな。」

（(やっぱりまだ根に持つてるんだ。)(）

『10分休憩の後決勝戦始めるぜお前ら。試合途中にトイレ行かない様今のうちに行つとけよ!俺も行ってくるぜ!』

「つと、俺も行ってくるか。」

次の試合を見逃さない為にもトイレへと向かう。その途中で爆豪が向こうからやってくる。こつちに気付くと聞こえる大ききで舌打ちをし鉄也の横を通り過ぎた。

「…」

「…なあ爆豪。」

「…あ、あ?」

「俺の分まで頑張ってくれよな。」

「誰がお前の分なんて背負うかよクソが！あんな試合勝つても意味ねえだろ！俺が取るのは完膚無きまでの一位だ。あんな勝ち方まわりが認めても俺が認めねえ！」

「じゃあ引き分けか？」

「なんで俺がお前と引き分けんだ！」

「じゃあ俺の勝ち」「なんで俺がお前に負けんだよ!!？」

「あんなクソ試合ノーカンだノーカン！」

そういうと爆豪は機嫌が悪そうに振り向きそのまま待合室へと向かう。

「；・； 来年だ！」

「は？」

「来年の体育祭で全力で戦おう！そしてその時は俺が勝つ！」

「バカが、勝つのは俺だ！；・； 次あんなダセエ負け方したらぶつ殺すからな！」

くくく

『さあ！なんだかだでもう決勝戦！この一戦で雄英一年の最強が決まるぞ！決勝戦!!？』

轟 焦凍 v.s. 爆豪 勝己！レディイイイイイイスタアト!!？』

その氷結が逆にスタートの合図かと思うほどにフライングじみた大氷結。その氷結に爆豪の姿が見えない。まさかも勝負が決まったかと観客は思っただろう。し

「緑谷の時に比べて攻撃が単調になったと言うかなんというか。」

「確かになんか『上手さ』見たいのが緑谷戦の時に比べて見えないよな。」

「緑谷戦では『左側』使ったのに飯田、今の爆豪戦じゃ使っていないからな。かと言って温存してるようにも見えないし。」

爆豪は爆豪らしくガンガン攻めているが轟は氷結で牽制などどうにも攻めに転じられない様だ。先程から爆豪の接近を氷結で防ぎ爆豪が氷結を爆破。流石の爆豪もしびれを切らしたのか攻撃の手を止めて轟へ怒鳴り散らす。

「舐めてんのかこの半分野郎！俺が取るのは完膚無きまでの一位なんだよ！只でさええクソみてえな結果で勝って納得してねえのに手え抜いたお前なんかに勝って取った一位なんか価値があるかあ！やる気がねえならここに立つなクソがあ！」

その爆豪の言葉も届かないのか轟は両腕を下げ、まるで戦いを放棄したようにも見える。

「負けるな！！？轟君！！？」

ステージに向け爆破し爆豪は地面から離れて行く。轟は緑谷の言葉で何かを決心したのか『左側』に炎を灯す。それと同時に爆豪は空中で連続で爆破を起こし回転しながら轟に向け接近して行く。轟の炎も勢いが増し誰もが緑谷戦で見せた大爆発が起これると思いき身構える。勢いが増す炎を見て爆豪は待ってたと言わんばかりに口角が上

がる。炎の勢いが増す轟、回転とスピードが増す爆豪。

「榴弾砲（ハウザー）！」

爆豪の増して行く勢いに連れ轟も炎の勢いを増して行く。しかし炎の勢いが増して行くに連れ『父親の事』『母親の事』『緑谷の言葉』様々な感情、思いが困惑して炎が気持ちの揺れと重なり揺らめく。そして炎は消えた。

「着火（インパクト）！」

まさに人間榴弾。ステージに爆弾が落下したと錯覚させるほどの爆発が起きた。吹き荒れる爆風と捲き上る爆煙、氷やコンクリート片でステージが見えない。ステージからは何かがパラパラと崩れる音しか聞こえず2人の状況が掴めない。やがて煙が止みステージ全体が見えるようになっていた。ステージ内端には爆豪が氷とステージの瓦礫の上に仰向けで倒れているが意識はあるように見える。しかしステージ上に轟の姿が見えない。何処かで見渡すとステージ外に自身の氷の残骸の上に気絶している轟がいた。

（…轟の奴最後炎を出さなかったのか？）

爆豪も轟の『最後』の事に腹を立て瓦礫を上を進んで轟に怒鳴る。何を言っているかここからは聞こえないが怒っているのは分かる。ミッドナイトが『個性』を使い

爆豪を眠らせたあと轟の状態を確認して爆豪の勝利が決まった。

くくく

ステージ真ん中では今体育祭の上位3名が表彰台の上に3人違った表情で立っている。

「ん

”———!!?”

1

「……………」

「はあ…」

2

3

表彰台左側にいる3位の磁場は狙えたで有ろう1位を小さな事故で逃し納得のいかない表情だ

表彰台右側にいる2位の轟は今回の体育祭で様々な考えが困惑して今はまだそれを頭の中で整理している途中だ。しかしその表情は以前と比べ柔らかくなっている。

表彰台真ん中にいる1位の爆豪は特設の礫台に体と口を拘束されてまさに鬼の様な形相で左右にいる2位、3位に向かって何か叫んでいる。

「うわあなんだよあれ。爆豪めっちゃ暴れてるよ。まるで重罪人の処刑前みたいだよ。」

「爆豪さんは1位という自覚がないのですか?」

「なんでも結果に納得がいけないからメダルは要らないって言ってたらしいよ。」

「あいつ折角の1位なのに贅沢だな。それに比べて磁場は表彰台に立つたらまた落ち込んでねえか?」

「多分表彰台に立つて試合の事思い出しちゃったのかな。」

「3位でも十分凄いな。轟はなんか浮かねえ顔だしなんかトップ3縮まらねえな。」

「さっ! それではこれよりメダル授与式に移るわよ!」

叫ぶ爆豪をスルーしてミッドナイトは司会として式の進行を務める。

「そして今年のメダルを贈呈するのはもちろんこの人!」

「ハーハッハッハ!!」

盛り上げるようにミッドナイトが声色を上げ空に指差した瞬間、高らかな笑い声を上げながら姿を現す影。スタジアムの照明がある高所に仁王立ちとなる男は、手を腰に当て、そのV字に逆立つ髪の毛を風に靡かせつつ、徐に飛び上がった。

「私が、メダルを持って来!」「我がヒーロー、オールマイイトオ!!」

「…………た」

((ええ…))

見事なまでに台詞が被り自身の十八番の登場が台無しになった。煮え切らない様なのかプルプルと震えるオールマイト。その横では手を合わせペコペコと頭を下げるミッドナイト。どうも教師陣も締まらないようだ。

「さ、さあ気を取り直してメダル授与に移るわ！まずは3位！A組 磁場 鉄也！本当は飯田君も同立で3位なんだけどお家の事情で早退しちゃったみたい。」

「おめでとう磁場少年!!?やはり君の『個性』は万能だな！中でも騎馬戦での一戦は私も目を丸くしたよ！トーナメント戦では…その…うん…。すまない磁場少、年掛ける言葉見当たらない…」汗

「オールマイト。分かっているんでもういいです。」泣

「し、しかし！磁場少年！君の実力なら十分にここでもトップを狙えるはずだ！来年期待しているぞー！」

「〜っ！任せてください！来年こそは1位とって金メダルをぶら下げてみせます！」

「続いて2位！A組 轟 焦凍！」

「おめでとう轟少年！決勝で自ら『左側』を使ったのには、ワケがあるのかな？」

「…………緑谷戦でキツカケをもらって、わからなくなってしまいました」

これまで『右側』しか用いなかった轟の心境の変化をくみ取ったオールマイトは、あえてその理由を問いかける。すると轟は、ポツリポツリと器から溢れるように語り出す。

「思えば……今迄はずっと、自分の為だけに力を使っていました。強迫観念みたいに、自分を押し潰すように。でも、誰かの為に使おうと思っただらほんの少し心が軽くなった」
俯いていた顔を上げオールマイトへと語りかける。

「俺には清算しなきゃならないモノがあります。その一步の為には、誰かの手を借りて前に進まなきゃダメだった。俺は弱いです。誰かを救うっていう理由をこじつけて、対価に救って貰おうとしなきゃ前に進めなかった。それでも……それだけ俺には大事な一步だったんです」

「……顔が以前とは違う。だが、自分の弱さを認めることは決して悪い事ではないよ。ここは学校。級友と助け、助けられ合う場なのさ! 一人で乗り越えられぬ壁は友人と一緒に……超えた時、君は掛け替えのない物を手に入れられる筈だ。Plus Ult raだよ、轟少年!」

「……はい」

「そして1位! A組爆豪 勝ち!」

「さて、爆豪少年! ……つと、こりやあんまりだ」

ガツチャガツチャと鎖を鳴らす爆豪を見かねたオールマイトが、嵌められていた轡を取る。

「伏線回収とは凄いいじゃないか、見事な成績だ！ 次は——」

「オールマイトオ……こんな順位、何の価値もねえんだよ!! こんなんでも取った1位なんて俺が認めなきや全部ゴミみたいなもんだよオ!!」

異形型と見間違ひそうなほどに目を歪ませる爆豪。それだけ、今回この様な結果で勝ち取った1位という順位に不服なようだ。元々、プライドの高い方であり、尚且つ完璧主義的な一面も存在する男。それが普段のストイックさに繋がっているという良い面もあれば、このような悪い面も存在すると言う訳だ。

「うむ！ 相対評価に晒されるこの世界で、不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそう多くない！ 受け取つとけよ！ 忘れぬよう！」

「要らねつつつてんだろぅが!!」

「まあまあ……セイツ」

頑なに金メダル授与を拒む爆豪であったが、悔恨と激怒に満ちている故に凄まじい咬合力を発揮する口を逆手にとられ、カミツキガメにわざと咬ませる要領で口に掛けた。

「まあまあ爆豪。雄英体育祭で1位取るのはこれが最後なんだから今のうちに喜んで

「けって。来年からはそこ俺専用になるんだからさ。」

「んだとこのダサ場外野郎があ！来年も再来年も1位は俺だあ!!?」

「ダサ場外!!?てめえ俺が場外負けじゃ無かつたら俺とお前の位置変わってたんだぞ！そこんとこちやんと理解して喋ろよ！」

「あんなダセエ負け方するよう奴の本気なんてたかが知れてんだよ！そもそもガチでやつても俺がお前なんかには負けるかよ！」

「じゃあもう一回やるか？次は『完膚無きまでに』ボコボコにしてるやるよ。」

「ハッ！笑わせんなクソが！なんで俺がお前えみみたいなダセエ奴のリベンジを受けなきゃなんねえんだよ！」

「ははあくん。お前俺に負けるのが怖いのか？」

「あ"あ!!?」

「確かにリベンジ受けて負けたらダサイもんな？」

「んだとこの砂鉄野郎！その安い挑発買ってやるよ！ミッドナイト！この拘束解いてくれ！」

「俺からも頼みます。ちよつくら爆竹野郎滅多打ちするんで。」

「いい度胸だなダサ砂鉄野郎——」

「次はお前負かしてやるから——」

「リースステージに來い」「はい、そこまでね。」フワア

「……スヤア」zzzz

ミッドナイトの『個性』によつて眠らされた2人を置いて最後はオールマイトが締めてくれるようだ。

「ギア!! 今回は彼等だった!! しかし、皆さん! この場の誰にもここに立つ可能性はあつた!! ご覧いただいた通りだ! 競い! 高め合い! さらに先へと登つていくその姿!! 次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!」

ヒーロー科だけでなく普通科やサポート科までもが決勝戦へ参加した。誰もがヒーローとしての資質を蓄え近い未来名を轟かされるよう牙を磨いている。

「てな感じで最後に一言!! 皆さん、ご唱和下さい!!」
拳を天高く掲げるオールマイト。

『このタイミングでの一言と言つたらアレしかない!』生徒の考えが一致し誰もがその時を待ちかねてウズウズと体を揺らす。

「せーの」

「[[プルス——]]」

「おつかれさまでした!!!」

「ウル……えッ!?!」

先程は被ったが次はズレた。オールマイトと観客が叫ぶ言葉の齟齬が生じ、グダグダな唱和となってしまうた。

「そこはプルスウルトラでしょ、オールマイト!!」

「ああいや……疲れたろうなと思って……」

満場一致のブーイングが、平和の象徴へ遠慮なく向けられる。てつきり観客は、皆の母校である雄英の校訓『Plus Ultra』を叫ぶものだとばかり思っており、他でもない生徒もまた、その言葉を叫ぶべく身構えていた。結局、表彰式は終始締まらずに終わってしまった。

「……ス

ヤア」

「はあ」（騒がしい奴ら……）

「……スヤア」

第17話 ヒーロー名を決めよう！

「でさ！結構来る途中で声掛けられてさ。なんかちよつと有名人になったみたいだな。磁場なんて三位だから俺よりも凄かっただろ？」

「まあそれなりには声掛けられたな。俺は少し恥ずかったけどな。」

「お前らはトーナメント出てるからだろ？オイラなんて二回戦落ちだったから全然無かったよ。」

雄英体育祭も終わり振替休日明けの火曜日。生憎の雨だが教室では体育祭の生中継での反響の話題で盛り上がっていた。

「それにトーナメント出てたやつは『トウィッター』に結構載ってたしな。」

「マジで?!?超気になる!」

「雄英体育祭で調べれば出て来るぞ。」

「だから知らない人からフォロワーが来てたのか…。」

「上鳴君カッコいいとか書かれてたらどうしよう俺。」

『上鳴 瞬殺』『ウェイってて面白い』

「ブフウッ!」

「なんだよウエイってるって!てか笑うなよなお前ら!

「いやもう、そのまま過ぎて。あー腹痛い。」ケラケラ

「でもなんも乗らないよりいいだろ?」

「いや、そうだけど。けどこれはなあ。」

「フフツ、『ウエイってる』とか.:」プルプル

「ただだけハマってるんだよお前!そういう磁場はどうなんだよ!どうせ『ダサ場外』とかで載ってるぞ!」

「あー確かにそれはありそうだな。『あれ』だもんな。」

「あ? 『あれ』ってなんだよ峰田!」

「どれどれ...」

『磁場 負け方ダサイ』

「なっ!?!?」

「ほら見ろ! やっぱりあんな負け方話題にならない方がおかしいな!」ゲラゲラ

「磁場が場外に落ちた時は時間が止まったみたいだったからな。」

「なんも乗らないよりいいだろ!」

「あ、もう一つ出てるぞ。」

『磁場 結構かつこよかった。』

「……」

「……」ドヤア

「嘘だろ！あんなのどこがカツコイイんだよ！」

「あれでカツコいいならオイラも決勝さえ出てれば！」

「見てる目のある人もいるって事だな。」ドヤア

「もう終わり終わり！ここまでくると爆豪と轟も気になるな。」

「爆豪は表彰の時、轟は容姿で話題になってそうだな。」

「轟はともかく爆豪が俺より良い風に乗ってるのはやだな。」

「お前爆豪との勝負引きずり過ぎだろ。」

「爆豪もあんな勝ち方認めないって言ってたしな。」

『爆豪 怖い』

「まあそのままって感じだな。」

「初見で見たらそりゃ怖いな。」

「オイラ達ですら怖いって思ったからな。」

「次は轟か。どうせマイナスな事は書いてないだろうな。」

「それな。轟の奴お前らみたいな話題になるような事してないもんな。」

「悔しいけどそうだな。」

「お前マジで悔しそうな顔するなよ。さてさて轟は……」

『轟君 イケメン』『個性が派手でかつこい』『少し冷たい目が良い』『クールだけでなく熱い一面もあつて良い』『家柄、容姿、個性、将来性全てを持つてる。』 e t c : .

「……そろそろ相澤先生来るから終わりにするか。」

「「そうだな。」」

磁場達が席に着くと同時に相澤先生が教室に入ってきて教室が静まり返った。USJ事件の傷を癒えたのかミイラの如く巻かれていた包帯が取れいつもの相澤先生の姿だった。

「それより今日の〈ヒーロー情報学〉はちよつと特別だぞ。」

（特別？法律系は苦手なのにいつもと違うのはやだな。）

『「コードネーム」ヒーロー名の考案だ。』

『「胸膨らむヤツきたああああ!!?」』

先生曰く今回の体育祭後の「プロからのドラフト指名」が関係して来るらしい。本来は経験を積んで即戦力とみなされる。2・3年から指名が本格化される。つまりは今回来る指名は自分達への「将来性に対する興味」に近いそうだ。故に2・3年までにその興味が削がれたら一方的にキャンセルなんて事もザラではないらしい。

「例年はもつとバラけるんだが今回は3人に注目が偏った。」

轟 4, 123 爆豪 3, 556 磁場 2, 809 e t c. .:

「俺にこんな指名が!?」

「まあ何だかんだ障害物競走とか騎馬戦で目立ってたもんな磁場。」

自分でもあの結果は情けないと自覚しているが何処かで期待はしていた。けれどこれは期待していた以上の指名の数に思わず席を立ってしまった。指名の数に感動しているとふと視線を感じその方向に目をやると蛙吸が親指を立て微笑んでいた。

「...!」

『ちゃんと見てくれる人は居るはずよ。』

体育祭で蛙吹にかけられた言葉を思い出し目頭が熱くなるがそれを堪えて自分を親指を立て蛙吸に笑顔で答えた。

「それを踏まえて個人の指名の有無に関係なく俗に言う『職場体験』に行ってもらおう。」

「成る程、それでヒーロー名決めんのか。」

「ヒーローの活躍を生で見れるのか!」

「まあ仮ではあるが適当なもんは「付けたら地獄を見ちゃうよ!」

派手な衣装で派手な登場をし注目を集めたのはへー8禁ヒーローミッドナイト。

「この時の名が世にそのまま認知されプロになつてる人多いからね!」

「俺はこういうのは出来ないからその辺はミッドナイトさんに査定してもらおう。将来の自分がどうなるか。名をつける事でイメージが固まり近付いていく。それが『名は体を表す』って事だ。『オールマイト』とかな。」

『それじゃさっさと決めろ。俺は寝る』と言い残し寝袋に籠り各々自身のヒーロー名に着いて考えていく。

〜15分後〜

「じゃあそろそろ出来た人から発表してね!」

(発表形式なのかよ!?)

発表形式で先陣を切るのは勇気が要る。皆手をあげるの躊躇している中いち早く教壇へと青山が先陣を切った。

「行くよ、… 輝きヒーロー『I can not stop twinkling☆』
キラキラが止められないよ☆」

「『短文!?!?』」

「そこは『I』を取って『can, t』に省略した方が呼びやすいわね。」

「それねマドモワゼル☆。」

(そこかよ!!?)

「次は私ね！」

次に芦戸が自信満々に教壇へと立ちタンツ！とフリップを勢い良く立てた。

「リドリーヒーロー『エイリアンクイーン』!!」

「2!! 血が強酸性のアレを指摘してるの!? やめときな!!」

「ちえ〜……」

(こ、これは……)

(（なんか大喜利っぽくなってる!!?)

(これは先陣を切るより出しにくい!)

フリップに書いて発表形式という形と青山と芦戸のせいで大喜利のような雰囲気になってしまった。既に2人発表を終えたのにも関わらず自分のヒーロー名が発表しにくい空気の中蛙吹が手を挙げ教壇へと立つ。

「実は前から決めていたの。梅雨入りヒーロー『FRIPPY』フロツピー」

「可愛いヒーロー名ね。親しみやすくお手本のようなヒーロー名だわ。」

ここに来て蛙吸がまともな(青山、芦戸には悪いが)ヒーロー名が来た事で空気が変わりやつと普通のヒーロー名発表が出来るようになった。この空気を変えた蛙吹を称えるようにFRIPPYコールが止まらない。

「うおおおおお！FRIPPY!!?」

「流石にうるせえよ磁場。」

「実は俺も前から決めてて… 剛健ヒーロー『烈怒頼雄斗』レッドライオット」

大喜利雰囲気から抜け出し3人目は切島が発表した。

「紅の狂騒。これはあれね?!? 漢気ヒーロー『紅頼雄斗』のリスpektね。」

「そうっす! だいぶ古いけど俺の目指すヒーロー像は『紅クリムゾン』そのものなんす。」

「憧れの名を背負うからにはそれなりの重圧がついてまわるわよ。」

「覚悟の上っす!」

(すごいな切島。俺はそんな重圧持つのは無理だな。確かにヒーローに憧れて雄英に来たけど誰かのヒーローネームを真似るほどリスpektしてるのは居ないからな。なら俺は個性由来でヒーロー名決めるか。)

自分のヒーロー名を考えてる間にもクラスメイト達のヒーロー名が発表されていき皆んなのもじりなどを参考に鉄也のヒーロー名が決まった。

「じゃあ次は俺で。磁力ヒーロー『マグネージ』!」

「磁力や磁気の『マグネイズム』と操るの意味の『マネージ』の組み合わせともじりね。まさに個性から来るヒーロー名ね。」

「俺は切島みたく目指すヒーロー像ってのがまだ無いんで個性由来で考えました。」

「あら、個性由来でヒーロー名を決めてるヒーローも多いわよ。雄英で言うとなタイプス先生とかね。」

その後全員のヒーロー名が決まりヒーロー情報学が終了した。その後相澤先生から職場体験についての説明があった。

「職場体験は一週間。肝心の職場だが指名のあったものは個別にリストを渡すからその中から自分で選べ。」

「うえ、この数の中から選ぶのか。」

「職場はどこにするんだ？」

「この中から選ぶのは相当時間必要だな。尾白こそどういこうとこに行くの？」

「俺は救助系よりも対人系がいいかな。」

「やっぱ得意とする方向性を決めてからの方がいいよな。」

「それとこの書類は今週末までに提出しろよ。」

「2日しかねえ!?!？」

「あと職場。お前を指名した事務所からお前宛に手紙が来てる。あとで渡すから職員室に来い。」

「俺に?分かりました。」

その後今日の授業を終わらせ手紙を受け取りに職員室へと向かった。

「これがお前宛に送られた手紙だ。」

「ありがとうございます。ここで読んでも?」

「静かにしろよ。」

「はい。」(手紙読むのにうるさくなるかなあ。)

封筒を見るとそこには『マスターハンド事務所』と書かれていた。

『 拝啓 磁場鉄也君へ。』

こんには。僕は君を指名させてもらったハンドヒーロー『マスターハンド』こと浮手 操士。体育祭での君の活躍見してもらったよ。あの雄英体育祭で3位なんて凄くないか。いつもは2、3年生を指名してるんだけど君の活躍と『個性』をみてすぐに君を指名しようと決めたよ。前置きは置いて本題に入るけど君の活躍なら他にも色んなところから指名が来てると思うけど是非君にはうちの事務所に来て欲しいんだ。なぜかという君に惹かれたつてもものあるけどそれとは別に僕なら君の『個性』について色々教えられるものがあると思ってる。この手紙を出したんだ。まあ強制はしないからこの手紙を読んで少しでも来たいと思ってくれたらいいな。

p s 決勝でのあの負け方は『色々』と凄かったね。

ハンドヒーロー『マスターハンド』浮手 操士より。』

「最後が余計だけど俺の『個性』について色々教えられるか。…先生俺このマスターハンド事務所に行きます。」

「本当にいいんだな。職場体験選びで3年になって後悔してる奴もいる。真剣に選べよ。」

「大丈夫です。ここにします。」

「…分かった。それじゃこつちから連絡しとくから今日はもう帰れ。」

「お願いします。失礼しました。」

家に帰ってマスターハンドの事を調べて驚いた。なんとNO14ヒーローの凄腕ヒーロー。サイドキックも大勢いるヒーロー事務所だ。こんな人から指名があつてきてほしいなんて言われたら行かない理由が見当たらない。その後もう少しマスターハンドの事を調べて寝る事にした。

くく職場体験当日くく

「コスチューム持ったな。本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ。絶対に落としたりするなよ。絶対にだ。」

「…先生、それってフリで「磁場、もう帰りたいのか?」

「すみません。」

その後各々電車の時間が来るまで雑談をして方向が途中まで同じな飯田とホームへと向かう。

「なあ飯田。その…『大丈夫』か？」

体育祭後にニュースで聞いた事件は世間を騒がせた。数々のヒーローを殺害又は再起不能に陥れたヒーロー殺し『ステイン』に寄つて飯田の兄、ターボヒーロー『インゲニウム』がステインの手により下半身麻痺という重傷を負わされた。まだ若くこれからというところでステインの手によつてヒーロー生命を閉ざされ日常生活にも大きなハズレを背負うことになった。それ以降飯田は普段と同じように接していたようだがどこか違つていた。

「ああ。」

飯田はただ『ああ。』だけ返事をしてそこからは会話は無かった。しかしこのままではクラスメイトとしてほつとけない。だが自分は飯田にとつてはクラスメイトであつても只の他人だ。余計な事を言えば飯田を傷付けてしまう。

「飯田。俺は所詮飯田のクラスメイトでしかない。けど何かあつたら頼つて欲しい。クラスメイトでも出来ることはあると思ぞ？」

「…ありがとう磁場君。しかし大丈夫だ。」

そこからお互いに会話は無かった。やがて鉄也の目指す駅に着いたので飯田と別れた。

「ここがマスターハンド事務所。」

駅から歩いて10数分で目的のマスターハンド事務所に着いた。思っていたよりも建物の規模が大きく緊張してしまうが空をこらえ中へと入る。

「すみません。雄英高校からきましたーA磁場ですけど。」

「あ、雄英の生徒さんですね。ちよつと待っていて下さい。」

受け付けの人に話しマスターハンドさんに連絡を入れてもらった。

「はい、わかりました。：。：。それではそのエレベーターに乗ってもらって3階へ。その前に廊下を真っ直ぐ進んで貰うとお部屋がありますのでそこに入って下さい。そこのお部屋でマスターハンドさんが待っていますので。」

受付嬢の説明を受けマスターハンドがいる部屋の前まで着いた。中からは話し声が聞こえて来る。現実味が増し緊張で手汗が出て来るがそれを拭い扉を開けるノックする。

「あの！雄英高校からきました磁場 鉄也です！」

「お？来た来た。入ってイイよー。」

「し、失礼します。」

扉を開けるとそこには6人ほどの大人達がよくあるオフィスの真ん中で固まっていた。その中からマスターハンドを探しながらその集団へと歩き再度挨拶をする。

「磁場 鉄也です!1週間よろしくお願ひします!」

「そんなにかしこまらなくていいよ。僕がマスターハンドだ。これから1週間よろしくね磁場君。」

「お願ひします!」

「よし!じゃあ早速一仕事行こうか。」

事務所に来て早速プロヒーローの仕事の間近で見れる。そう思うと緊張と期待が同時に込み上げてきた。これから長い職場体験が始まろうとしている。

第18話 職場体験

『いいかいマグネージ？もうすぐ目標がそっちに向かうよ。』

『は、はい！』

『緊張しなくても大丈夫。君の個性なら落ち着けば成功するよ。自身をもって。』

『フウー…わかりました。』

『ヨシ、それじゃあ合図するからそれに合わせて君は目標を…いくよ。3・2・1来たぞ！！』

「クソ！しつこいな！」

無線で通信していたマスターハンドの合図とともに路地の角から大金の入ったバッグを背負った強盗が出てきた。

「そこまでだ！おとなしく捕まれ！」

「チツ?!先回りしてか!あ?スーツを着た子供?あのマスターハンド事務所も人出不足か?」

「マグネージ。お前を捕まえるヒーローだ!」

「ヒーロー気取りか。・・・子供だからって容赦しねえぞ!」

強盗が走り出すと同時に鉄也は個性を発動させ砂鉄を集める。すると強盗が右手を鉄也に向けはじめた。

「吹き飛ばしヒーロー気取りが！」

すると強盗の右手から『ボシユン!』と何かの塊が放出された。少し驚くもそれを砂鉄で防ぐ。

(マスターハンドさんの言ってた通りこいつの個性は:~)

初見で自身の個性をあつさりと呼ぶと防がれた強盗はそれに驚き鉄也はその隙を逃す筈もなく拘束しようと砂鉄を操る。しかし砂鉄が強盗を捉えようとした瞬間強盗がその場から消えた。いや、正確には個性の反動を利用して高速移動して砂鉄を避けたのだ。

「こいつ!爆豪みたいな使い方を!!?」

「舐めるなよ!今度こそ吹き飛ばし!」

隙を突いた筈が逆に隙を突かれるかたちになってしまった。しかし雄英体育祭3位は伊達ではない、砂鉄とコスチュームを反発させ危なげながらも避けてみせた。

「こいつ二度も俺の個性を!!?」

「お前の個性は割れてんだよ。掌から空気の砲弾を発射する個性だろ?けど連発はできない。それに似たような個性の奴とは戦ったこともある。お前なんかの個性は俺には通用しないよ(今のは少し危なかった:~)」

「舐めやがって！」

自身の個性が通用しないと知って焦ったのか両腕を突き出し個性を連射してきた。

「はっ!?」

予想外の攻撃に流石に声に出る程驚いてしまった。結果として先程と同じくコスチュームと砂鉄を反発させ回避は出来たが加減を少し誤り壁にぶつかってしまった。

「なんだ？俺の個性は割れててお前に通用しないんじゃないのかよ。マグネージさんよ？」

（くそっ、聞いてたのと違うぞ！）

「オラァ！行くぞヒーロー！」

「…フウー」

（大丈夫。避けれない速さじゃないし防げない威力でも無い。落ち着け…）

深呼吸で気を落ち着かせ改めて強盗に集中し直す。自分の個性が通用すると思ったのか個性を連発し攻撃してくる。しかし鉄也はそれを交わし防ぎ相手の個性に完全に対応していた。すると焦りからか攻撃が大雑把になりその隙を逃さず相手の裏を取り反撃にでる。今まで束ねていた砂鉄をレール状にいくつも展開してその間に球体状に変化させた砂鉄を大量に設置する

「レールガンー！」ガガガガガ！

「ガハっ!?？」

一つではたいしたダメージは与えられないがそれを全身に何度も受ければかなりのダメージになる。強盗も膝をつき明らかにダメージを負っているながらも右手を両腕を突き出し反撃を試みる。しかしダメージを負い動作が遅くなりダメージを受けていない鉄也が出遅れる筈も無く…

「させるか！」

次は逃げられないよう相手を覆うように全方位から砂鉄を操り強盗を捕らえにかか

~~~~~

「流石マグネージ！いくつか危ない所もあつたけど結果良ければ全てよし。お疲れ様  
！」

「ちよつとマスターハンド！相手の個性聞いてたのと違つたんですけど！連射出来るなんて聞いてないですよ！危うく吹き飛ばされる所でしたよ！」

「あれは君を試したのさ。まあ結果として怪我なく捕らえられたんだしさ。それに本当

に危なくなったら助けに行くから安心しなさい！」

「いやいや、結果論でしょそれは…。」

鉄也がマスターハンドの事務所に来てから早くも3日がたった。主にパトロールやマスターハンドの強盗や敵の確保手伝い、鉄也の個性の鍛錬だった。この3日マスターハンドと過ごし最初は「プロヒーローの仕事を生で見れるなんて！」と張り切っていたが鉄也の中でマスターハンドのイメージは変わりつつあった。

（結構適当な所とかあるけど敵制圧とか指示力とかはすごいからなんか複雑なんだよな）

鉄也の思っていたヒーロー像とは思っていたよりも違いマスターハンドは悪く言うとは少し能天気な所がある。先程のようにアドリブを入れて来たりサイドキック達に結構間違いを指摘されている。しかしサイドキック達への支持、個性の使い方や戦い方。鉄也への指導などは的確なのでそのギャップさがなんだか鉄也の心をモヤモヤさせる。

「ヨシ、それじゃあ後のことは君達に任せるから僕達は運動場に行ってくるよ。じゃ行こうか鉄也くん。」

「はー。」

マスターハンドに連れられ来たのは事務所から歩いて数分のところにあるマスターハンド事務所の運動場だ。ここではマスターハンドやそのサイドキック達が個性の鍛

鍊などをしている場所だ。ここで鉄也は職場体験に来て毎日マスターハンドに個性の練習を見てもらっている。

「今日の強盗との戦いを見てるとだいぶ君の苦手分野は結構克服出来てるみたいだね。」

「自分でも思ってたより上手くできてビックリしました。」

「これも僕の指導があつての成果だね。」

〜3日前〜

職場体験初日はヒーローの公務についての軽い説明とパトロールで終わりその後マスターハンドに運動場へと連れてこられた。

「ヨシ、手紙でも書いた通り、君を指名した理由に君の個性についての話をしたよね。」

「はい。けどあれってどう言う今なんですか?」

「ズバリ!君の個性は砂鉄を操りながらだと自分が動けない。何故なら砂鉄の操作に集中し過ぎて体を動かすと集中が切れてしまう。違うかい?」

「そ、その通りです。けどどうして分かったんですか?。」

「君と僕の個性は少し似ているからね。僕の個性『念手』って言って簡単に言うと『手』が6個出てきてそれを操れるのさ。まあ百聞は一見にしかず!説明するより見せる方

が分かりやすいかな。」

するとマスターハンドの周りに薄黄緑の『手』が現れた。

「とまあこんな感じ。君と僕の個性の共通点は『体から離れているものを操る』って言う点さ。そして学生の頃僕も君と同じで念手を操るのに気を取られ過ぎて棒立ちになっちゃったからね。」

『体から離れているものを操る』か。」

（成る程、確かに尾白や常闇。障子とかは体から生えてるor出て来てるものだから簡単に操れるのか。）

「じゃあマスターハンドさんはどうやって動けなくなるのを克服したんですか?」

「ん〜答えを教えるのは簡単だけどそれじゃ君の為にならないしなあ。…例えば砂鉄で何か物を取る時、具体的に何を考えて物を取る?」

『何を考えて?』?… 砂鉄を集めて、集めた砂鉄を操って物を取る。です。」

「じゃあ普通に手で取るときは?」

「普通に手で取る時ですか?… その『物』を取る事。ですかね?」

「今鉄也君が答えた『砂鉄』で物を取る時と『手』で物を取る時。何か違いはわからない?」

「違い… 『砂鉄を集める』『砂鉄で物を取る』って工程ですか?」

「ん〜違うな。鉄也君は砂鉄で物を取る時『砂鉄を操る』って考えて取るんだよね？」  
「はい。」

「じゃあ手で物を取るときは『手を動かす』って考える？」

「いやいや、手で物を取るときに『手を動かす』なんて考えないですよ。」

「分からない？」

「？」

「要するに、手は体の一部で動かし方の感覚を赤ん坊の頃から知っている。けど砂鉄は体の一部ではないし砂鉄を操れるようになったのは個性が発現してから。鉄也君は砂鉄を集めて操ってる時『砂鉄を操っている』って認識でしょ？」

「はい。」

「それじゃダメなんだよ。」

「・・・え？」

「砂鉄も『身体の一部』だと思つて動かすんだ。手、足、何でもいい。君は『砂鉄を操っている』んじゃないくて砂鉄を『身体の一部』を動かすように！」

「そんな事何ですか？」

「その『そんな事』つてのが大事なんだ。つて事で君には今から手は使わずに砂鉄を手としてこの職場体験中は過ごしてもらおうかな。あ、お店の中とかはダメだからね。そこ

らへんは臨機応変に。」

「手の代わりに砂鉄で生活ですか…。」

「どう?できそう?」

「プロヒーロー目指すからこの位はやってみせますよ。」

「最初はかなり大変だけどこれも君の能力上昇の為!けど君は体育祭で既にある程度の克服は出来てるからあの時の感覚を忘れずにね。頑張つて行こう!」

「はい!」

〃〃現在〃〃

(今じゃ砂鉄の束が6本の状態でもある程度にはうごける様になったけどまさか意識を変えるだけでこうも変わるなんて思わなかったな。)

「よし、今日の仕事はここまでかな。どうする鉄也君。また運動場に行く?」

「あ、丁度見てもらいたい技があつて…」

「見てもらいたい技?」

「はい、この前マスターハンドさんが拳銃について少し話してくれたじゃないですか?その時に思い付いて実践で使えるか見てもらいたくて。」

「全然いいよ。そういう『技』っていうのはヒーローをやっていく上で大事だからね。」  
「はい。お願いします！」

〜〜次の日〜

「おはようございます。」

朝、マスターハンド事務所に顔を出すと何故か事務所内がいつもよりも少し騒がしい。

「あ、おはよう鉄也君。ちょっと悪いけどそこで座って待つてくれ。」

「？、分かりました。」

マスターハンドの指示通り座って待つ事数10分。用が片付いたのかマスターハンドが鉄也の元にやって来た。

「いや〜ごめんね。急に予定変更があつてさ、それでバタバタしちゃつてたんだよね。」

「予定変更？」

「そう。いま保須にステインが出没してるのは知ってる？それで保須市の知り合いのヒーローから応援で来てくれてって頼まれてね。って事でこれから鉄也君と俺で保須に向かうよ。」



(保須つて飯田のいるところか。)「分かりました。」

最近世間を騒がせている敵『ステイン』。ステインは少なくとも現れた町で3人のヒーローに手をかけている。未だに保須市での被害はインゲニウムだけだ。ステインはあと2人のヒーローと接触するまではまだ保須市にいる可能性が高くマスターハンドと鉄也は保須市へと向かう。保須市に着くとプロヒーローや警察とよくすれ違う。すれ違う回数が多さがいかにステインを警戒してるかが素人の鉄也でも分かる。

「緊張しなくても大丈夫だよ。ステインに会ったら相手は僕がするしこんなにプロヒーローもいるんだ。いくらステインと言えどもプロヒーローに囲まれば逃げられないぞ。」

「そうですねステインがいる街に自分もいるってなるとやっぱりどうしても。」

「まあそれは仕方ないね。けどもしも君一人でステインと対峙したら絶対に逃げるんだよ?君の個性なら逃げれるとは思うけど絶対に捕まえようとは考えない事。」

「はい。流石に自分もステインと戦おうとは思ってないですよ。」

「今までプロヒーローが何人もステインに再起不能にされているからね。それだけは絶対に守ってよ。」

「分かりました。」

「それじゃパトロール行こっか。」

ステインの警戒にヒーローや警察が多いせい、か街にはチンピラ一人も居ず何事も無く。パトロールをしてから約30分が経っていた。

「保須市って結構栄えてるんですね。もう少し静かめの街にだと思ってました。」

「いつもこの時間ならもつと人はいるんだけどね。けど流石にステインのせいもあつて人は少ない方だよ。」

「このまま何も起きないといいんですけどね。」

「鉄也君そういうのはフラグって言うんじゃないの?」

「いやいやまさか。そういうのは漫画とかだけ「ドッオオオオオオン!」

「!??!」

「え…?!?嘘でしょ?」

「行くよマグネージ!」

「え?!?は、はい!」

さつきまでの雰囲気とは一変しあたりは騒然としている。マスターハンドも先程まではと笑いながら話していたのに今まで見たことのない顔付きになっている。恐らくこれがプロヒーローマスターハンドとしての本当の顔なのだろう。鉄也も頭を切り替え爆発源へと向かう。

「何だよこれ…。」

現場に着くとそこはまるで戦場のようだった。車からは火が上がり辺りには人の叫び声が響き渡っている。その元凶たる敵がヒーロー達に囲まれている。その敵は脳が剥き出しで屈強な身体。鉄也はこの敵とUSJの人命救助で遭遇したことがある。

「… あ、あれは脳無?!？」

(何での脳無が保須市に?!? てことは敵連合がここに?!? スティンが出るならまだ分かるけど…。まさか敵連合にスティンが?)

USJでの記憶が蘇りその時脳無から受けた傷が痛たむ様な気がした。

「マグネージ! 君は辺りの市民の誘導。負傷者が居たら安静な所へ移動させて重傷なら救護を呼ぶ事。それと敵、スティンに遭遇したら応戦しない事、分かった?」

「は、はい!」

「大丈夫。落ち着いていけば君ならいけるさ。これでも僕は君の力を買ってるんだから。」

「分かりました!」

マスターハンドは脳無の所へ。鉄也は周辺の住民の避難誘導へと向かった。

〜

「落ち着いて避難してください!」

避難誘導を始めてどれくらい経ったかは忙しくて分からない。感覚的には既に1時

間以上は過ぎた様な気がするが携帯を見ると10分程しか経っていなかった。始めての街中で敵と遭遇し避難誘導と慣れないことの連続で精神的に疲れてきた。

(ここら辺はこんなもんかな。)

周りを見渡すと1人30前後の男性が逃げ遅れているのを見つけた。男性が鉄也に気付き早歩きでこちらへ向かってきた。鉄也も男性の元へ向かっていると男性と反対の路地から脳無が出てきた。しかもその脳無はその男性をまるで標的を見つけたかのように見つめている。

「マジかよ!?」

個性を発動しレールを創り最高速度で男性を抱えその場から離れた。鉄也が男性を抱え離れた瞬間脳無は男性がいた所へ身体ごと砲弾の様に突っ込んできた。

(あと一瞬遅かったら危なかった。)

男性を下ろし、1人で歩けることを確認し避難させた。脳無は地面へめり込んだ身体を起こし次は鉄也をじっとみつめる。

「オア”ア”ア”ア”ア”ア”アアア、！」

まるで自分の獲物を奪われ怒っていると思わせるような叫び声を上げる。

(こいつをこのまま野放しにすれば更に被害が増える。それにあの様子だと逃してもらいそうにも無い。)

「すみませんマスターハンドさん。約束破ります。」

この時鉄也は初めて職場体験で1人で敵と対峙した。  
ツイラン

## 第19話 脳無襲撃

めり込んだ体を起こしパラパラと瓦礫を落として脳無は鉄也を睨む。再び身体を丸め鉄也へ飛んできた。しかし溜めがあり足が膨らむのでタイミングをはかりやすく脳無の突進をかわすと束ねた砂鉄を脳無の横っ腹に叩き込む。鉄也の攻撃で吹き飛ばす脳無だがさほどダメージを受けていないのか体を起こし呻き声をあげながら鉄也を睨む。

(脳無は複数『個性』を持っている。他の『個性』を警戒しながら立ち回らないと。)

再び脳無は体を丸め鉄也へと突進して来た。鉄也は脳無の突進の勢いを利用してすれ違いざまに砂鉄を叩きつけた。しかし甲高い音が鳴り少し突進の軌道がズレただけで終わった。

(切島みたいな硬質化も使えるのか。多分あと、1、2個位『個性』は持つてそうだな。はやく倒して避難誘導に戻らないと。：。：)

「イイイイイア アアアアア！」

攻撃が当たらなくイラついたのか脳無の背中が盛り上がりそこから音をたて6本の腕が生えた。次は突進ではなく走って鉄也へ向かってきた。大きい体に似合わず速く不意をつかれ距離を詰められた。予想以上の速さに驚いたがこの職場体験で培った経

験は鉄也を成長させた。慌てる事なく脳無の振りかざす8つの拳を全て束ねた8つの砂鉄で受けその拳を砂鉄で包み使用不能にした。ここで鉄也は職場体験で新たに身につけた技を試した。

(普通この体のでかい脳無に俺のパンチなんて効くはずがない。けどこの技なら！)

包んだ脳無の腕を左右に開き前面をガラ空きにした。空いた脳無の顔面に向け次は鉄也が拳を振るう。そして振りかざした拳が脳無の当たる直前、『個性』で自身のコスチュームを操り拳を加速させた。

「ウゴアー！」

(ヨシ！磁気加速なら俺のパンチでも脳無に通用する！)

脳無の反応で手応えを感じ脳無がダウンするまで続けるつもりだったが数回続けたところで『個性』の出力調整を誤り腰を痛めた。

(クソ、やっぱり慣れないうちは連続で使うもんじゃないな。)

その隙を脳無は見逃さず砂鉄で拘束されている腕を膨張させ拘束から逃れる。すぐに腕を振るうが磁気加速で後ろへ下がり距離を取る。

(腕が膨らんだ…。体の一部を膨張させて力を上げてるのか？だったら突進の加速もこれか。)

鉄也は頭の中で脳無の『個性』を整理した。『膨張』、『硬化』、『腕を生やす』。先ほ

どの脳無の攻撃パターンを思い出し対策を練っていく。

(これ以上『個性』がないなら勝てると思う。万が一を考えながらもこのまま脳無を仕留める！)

方針を決め脳無へ仕掛け様とすると脳無が呻き声をあげながら震えはじめた。脳無の全身が膨れ上がり6本の腕が『硬質化』し先ほどよりも体が大きくなった。

「全身膨らませられるのかよ！」

溜めを必要とする突進程ではないがそれに近い速さで鉄也へ迫る。なんとかかわしカウンターを決めるが硬質化した腕で防がれる。ならばと硬質化していない体に攻撃するものこちらにも有効打にならない。最初は脳無の腕1本に対し束ねた砂鉄1本で受け切れたが膨張した脳無の腕を受けきれずにじわじわと追い詰められていく。一度立て直そうと距離を取るとすかさず脳無はあの突進を繰り返して来た。鉄也は反応したものの防ぎきれずに吹き飛ばされしまう。

「ガハッ！」

受け身をとり起き上がるがその衝撃に膝をつき咳き込んでしまう。

(完全じゃないとはいえ防いでもこのダメージ！直に食らうのは絶対にダメだ。)

視線を脳無に向けると脳無は腕を広げ突進して来た。

(こいつ面積を広げやがった！)



なんとか直撃コースか外れたが脳無が鉄也とすれ違う寸前に腕の一本を地面に突き刺しそれを軸に体を回転させ進路を変え再び鉄也に迫る。まさかの急旋回に不意をつかれた。辛うじて避けたが脳無の腕が鉄也に直撃しまたも吹き飛ばされる。あまりの衝撃に体を起こせずその場に嘔吐してしまった。

「ゲホツゲホツ……。まさか旋回するなんて。」

咳き込みながら顔を上げるとお構いなしに脳無は再び腕を広げ突進して来た。横に避けるのは危険と判断し上へ回避する。流石に上へ旋回することは出来ずその勢いそのまま建物に激突した。土煙を上げ自分の開けた穴から出て来た脳無。鉄也は先ほどのダメージが残っていて回避した後も膝たちで建物から出てくる脳無を見つめる。

(：： あいつ、もしかして自分の突進のスピードをコントロール出来ないのか?)

最初に対峙した時も今も脳無の突進をかわすと脳無は止まらずにそのまま何かにぶつかり止まっていた。

まだ数回しか見ていないが鉄也の中でこの疑問は確証に変わっている。

(だつたらそれを利用して……)

脳無の突進を上へ避け磁気加速マゼネティックの応用で空中にとどまり当たりを見渡す。

目的のものを見つけ脳無へ攻撃し引きつけながらある場所へ誘導する。距離をとり脳無のつって突進をするには絶好の位置。さらに足を膨張させ今日見た中でも一番の

大きさとなった。

鉄也は膝たちになり脳無から視線を外さない。脳無から見れば先ほどのダメージが残っていてまともに立てない様に見える。確かにダメージはあるものの実際には鉄也はタイムミングを逃さないよう集中していた。

(タイムミングを逃したら終わり。この一撃に全神経を集中させる！)

「ウッウウウグアアアアア！」

(……今だ！)

脳無が鉄也に直撃する寸前鉄也は『個性』で足元のマンホールを起こした。先ほどのことから脳無が急に止まれないのは知っている。その速度と止まれないことを逆手に取り脳無をこの位置へ誘導した。

鉄也の予想通り脳無はそのままマンホールへ直撃。あの速度で鉄の塊に正面からぶつかっては流石の脳無もひとたまりもなく脳震とうを起こしたのかふらついている。その隙を逃さず磁気加速で脳無の顎にアッパーを決め勢いをのまま脳無の上空へ行き静止する。

「これだけ隙があれば俺の最高火力を叩き込める！」

操れるだけの全ての砂鉄を一箇所に集めて一つの巨大な鉄塊にする。雄英の実技試験の時にだした鉄也の最初の技。シンプルかつ強力なその一撃に鉄也は名前をつけて

脳無へ振るう。

「トールハンマー!」

鉄塊に『個性』での加速と位置エネルギーを乗せて全力で脳無へ叩きつけた。今だふらついている脳無に抵抗も出来るはずもなくすぎましい音と共に鉄塊に飲み込まれた。あまりの衝撃に周囲が揺れ脳無のいた所にはクレーターが出来ていた。鉄塊をどけると『個性』が解除されしほみ静かになった脳無が横たわっていた。念のため破損していたガードレールを脳無に巻き付け拘束した。脳無が動かないことに緊張が解け大きく息を吐きその場に座りこんでしまった。

「イタタタ、脳無の腕が当たった時何か折れる落としたけどもしかして肋骨折れた? 漫画だと平気そうにしてるけどめっちゃ痛いじゃん…」

少し休憩し避難誘導を再開しようとするマスターハンドが息を上げてこちらに向かって来た。

「マグネージ! こつちに脳無が来なかった!? こつちに脳無の目撃したって連絡を受けたんだけど…。まさかあれって…」

「あそこにいるのが多分目撃されて脳無だと思えます。目をつけられて逃してくれなっかんで応戦しました。今は意識がなくて拘束してるんで動くことはないと思います。」

「… まあ詳しい話は後で聞こう。どこか怪我は?」

「多分肋骨が折れてるかもです。けど動けます！手当てなら避難誘導が終わってからでもー！」

「落ち着いて。脳無は確認された数全て拘束した。ひとまずこれ以上の被害はない。けど救助するにも人手が足りない。無理しない程度に手伝ってもらおうよ？病院はそのあとだ。」

「はいー！」

その後救助活動しある程度落ち着いた頃には深夜になっていた。病院に行き治してもらいいつのまにか寝てしまった。

~~~~~

「[[[[[.....]]]]」

「・・・え？なんでお前らここにいるの？」

脳無襲撃から一晩がたち病院のベッドで目を覚ますと同じ病室には緑屋、飯田、轟がいた。

「そういう磁場こそなんでここに？」

「確か磁場くんはマスターハンド事務所にいたはずじゃ？」

「それになんで磁場くんまで入院を？」

「マスターハンド事務所に保須市に来て欲しくて他のヒーローから要請があったんだ。」

「ここにいる理由は分かったが何故病院に？」

「その…脳無の衝撃があつて避難誘導中に脳無と鉢合わせてなんとか倒したけど肋骨折られちゃつてさ。」

「え!? 脳無に!?。」

「オールマイトでさえ手を焼いていたのにすごいじゃないか磁場くん！」

「いや、オールマイトの時ほどのやつじゃないよ。『再生』や『超パワー』がなかったから俺でも倒せたんだ。」

「あの脳無を1人で倒したんだ。十分凄いや。」

「ありがと…。じゃあ次はお前らな?なんでここにいて、入院してるんだ？」

すると3人は視線を交わしながらなんとも言いづらそうにしななな口を開かない。

「ん?なんか言えない理由でもあんの?」

「い、いやその僕達ステインに遭遇しちゃつて…。」

「ステイン!? まじか!よく無事だったな!」

「…緑谷がステインと遭遇した時の近くにプロヒーローがいなかったから俺らのクラスグループに位置情報を送ったんだ。まさかつて思つてエンデヴァーを連れて行つ

てステインを確保したんだ。俺たちが入院してるのはエンデヴァーの到着が遅れてその間俺らで足止めしてたんだ。」

「エンデヴァーが？… あ、轟エンデヴァー事務所だったもんな。じゃあエンデヴァー事務所もステインの為に保須市に来たのか。で飯田は元々保須市だもんな。じゃあ緑屋なんで保須市に？」

「僕は元々保須市の先の街に用があつて新幹線に乗つてたんだけど新幹線が脳無に襲われてその脳無を追っているうちステインに…。」

「なるほどなあ、みんな大変だったんだな。けど無事でよかつたな。そうだ！どうせならみんな職場体験先でなにやつたか教えてくれよ。」

「あ、僕も気になるな。轟くんなんてエンデヴァーのところ…。」

コンコン

鉄也達のいる病室の扉がノックされ入つて来たには2人のプロヒーローとすーつを着た頭が犬の大人だった。

緑谷と飯田の反応を見るに2人の職場体験先のプロヒーローらしく犬顔の大人は保須警察署の所長らしい。

緑谷たちにステインの事を聞きたいらしく来たらしい。ちようど鉄也が身体検査で呼ばれたので入れ替わりで鉄也は病室を出た。その後体に異常が無いことを確認し家

へ帰った。

次の日、マスターハンド事務所に行くところっぴどく怒られた。しかし状況が状況だった為仕方ないとされ説教は終わりその日もマスターハンドについて行き長かった職場体験体験は終わった。